

古市下遺跡・古市上遺跡

一般国道57号大野竹田道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

2014

大分県教育庁埋蔵文化財センター

古市下遺跡・古市上遺跡

一般国道57号大野竹田道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

2014

大分県教育庁埋蔵文化財センター



古市下遺跡・古市上遺跡全景（南から）



古市下遺跡・古市上遺跡全景（上空から・上が北）

序 文

本書は、大分県教育委員会が、国土交通省九州地方建設局大分河川国道事務所の依頼を受けて実施した一般国道57号大野竹田道路建設工事に伴う古市下遺跡・古市上遺跡の発掘調査報告書です。

遺跡の所在する豊後大野市朝地町一万田地区は、九州山地の祖母・頼山系に源を発する大野川水系の一角に位置しています。遺跡の周辺は、標高200～300mの丘陵と市万田川やその支流の小河川により開析された狭小な谷が入り組む複雑な地形を呈しています。

朝地町の遺跡は、そのほとんどが市万田川や平井川の河川流域に集中しており、それらの中には縄文時代早期の土器編年の標式となっている田村遺跡、同後期の石組み炉をもつ竪穴建物跡が発見された田村谷遺跡、戦国大名大友氏の有力家臣の館である一万田館跡など、県下でも著名な遺跡が存在しています。

本書に収録した古市下遺跡では、縄文時代・弥生時代後期から古墳時代前期・古代・中世の遺構・遺物を調査し、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴建物跡16基や中世の溝に区画された館跡を確認しました。

古市上遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴建物跡3基・土坑墓（木棺墓）29基・溝3基などを調査し、特に土坑墓（木棺墓）は大野川流域では発見例の少ない貴重な調査事例となりました。

本書が埋蔵文化財に対する保護・啓発、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後に、この発掘調査に多大な御支援と御協力をいただきました関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

平成26年3月31日

大分県教育庁埋蔵文化財センター
所 長 宮 内 克 己

例 言

- 1 本書は、国土交通省九州地方建設局大分河川国道事務所より委託を受けて大分県教育委員会が実施した一般国道57号大野竹田道路建設工事に伴う発掘調査報告書第2集である。
- 2 本書には、平成21年度に実施した大分県豊後大野市朝地町に所在する古市下遺跡・古市上遺跡の調査成果を収載した。
- 3 発掘調査については、遺構実測・写真撮影・発掘作業員の労務管理等の業務を発掘調査支援委託業務として株式会社島田組に委託して実施した。
- 4 出土遺物の整理作業や報告書作成に伴う諸作業については、埋蔵文化財センター職員が担当したほか、平成平成23年度に洗浄・注記・接合を株式会社イピソクに、平成24年度に遺物実測・トレースを株式会社九州文化財総合研究所に委託して実施した。
- 5 出土遺物の写真撮影は江田豊（埋蔵文化財センター）による。
- 6 出土遺物ならびに図面・写真等は、大分県教育庁埋蔵文化財センター（大分市大字中判田1977番地）において保管している。
- 7 本書で使用する方位は、いずれも座標北である。
- 8 本書で使用する遺構略号は、以下のとおりとする。
SH：堅穴建物跡 SK：土坑 ST：土坑墓（木棺墓） SE：井戸 SB：掘立柱建物跡 SD：溝
SX：その他の遺構
- 9 本書の執筆は、以下のとおり分担した。
第1章～第3章 後藤一重 第4章 吉田寛 第5章 後藤一重・吉田寛
- 10 本書の編集は後藤・吉田で協議して行った。

目 次

巻頭図版

序文 例言 目次 挿図目次

第1章 はじめに（後藤一重）

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第3節 調査組織の構成	2

第2章 遺跡の立地と歴史的環境（後藤一重）

5

第3章 古市下遺跡（後藤一重）

第1節 調査の概要	7
第2節 遺構と遺物	11
第3章 小結	71

第4章 古市上遺跡（吉田寛）

第1節 調査の概要	91
第2節 遺構と遺物	94
第3章 小結	126

第5章 総括（後藤一重・吉田寛）

132

遺物一覧表

133

写真図版

143

報告書抄録

挿図目次

第1章 はじめに			
第1図 国道57号大野竹田道路予定地と古市下遺跡・古市上遺跡の位置	1	第35図 古市下遺跡SH016出土遺物①	28
第2図 古市下遺跡・古市上遺跡位置図	2	第36図 古市下遺跡SH016出土遺物②	28
第3図 古市下遺跡・古市上遺跡調査区配置図	3・4	第37図 古市下遺跡SH017	29
第2章 遺跡の立地と歴史的環境		第38図 古市下遺跡SH017出土遺物①	30
第4図 古市下遺跡・古市上遺跡周辺の遺跡	6	第39図 古市下遺跡SH017出土遺物②	31
第3章 古市下遺跡		第40図 古市下遺跡SH019	32
第5図 古市下遺跡位置図	7	第41図 古市下遺跡SH019出土遺物	33
第6図 古市下遺跡基本層序	8	第42図 古市下遺跡SH008出土遺物①	33
第7図 古市下遺跡遺構配置図	9・10	第43図 古市下遺跡SH008	34
第8図 古市下遺跡縄文土器出土状況	11	第44図 古市下遺跡SH008出土遺物②	35
第9図 古市下遺跡縄文土器集中箇所出土土器①	12	第45図 古市下遺跡SH008出土遺物③	35
第10図 古市下遺跡縄文土器集中箇所出土土器②	13	第46図 古市下遺跡SH008出土遺物④	36
第11図 古市下遺跡出土縄文時代土器	14	第47図 古市下遺跡SH018	37
第12図 古市下遺跡縄文時代石器	15	第48図 古市下遺跡SH018出土遺物①	38
第13図 古市下遺跡SH350	16	第49図 古市下遺跡SH018出土遺物②	39
第14図 古市下遺跡SH350出土遺物①	17	第50図 古市下遺跡SH018出土遺物③	40
第15図 古市下遺跡SH350出土遺物②	18	第51図 古市下遺跡SH031	40
第16図 古市下遺跡SH001	19	第52図 古市下遺跡SH031出土遺物①	41
第17図 古市下遺跡SH001出土遺物①	20	第53図 古市下遺跡SH031出土遺物③	42
第18図 古市下遺跡SH001出土遺物②	20	第54図 古市下遺跡SH031出土遺物④	43
第19図 古市下遺跡SH001出土遺物③	20	第55図 古市下遺跡SH011	44
第20図 古市下遺跡SH003	21	第56図 古市下遺跡SH011出土遺物	44
第21図 古市下遺跡SH003出土遺物①	21	第57図 古市下遺跡SH011・SH025土層図	45
第22図 古市下遺跡SH003出土遺物②	22	第58図 古市下遺跡SH025	46
第23図 古市下遺跡SH003出土遺物③	22	第59図 古市下遺跡その他の弥生時代遺物①	46
第24図 古市下遺跡SH002	23	第60図 古市下遺跡その他の弥生時代遺物②	46
第25図 古市下遺跡SH002出土遺物①	24	第61図 古市下遺跡SK009	47
第26図 古市下遺跡SH002出土遺物②	24	第62図 古市下遺跡調査区と昭和63年度調査区	48
第27図 古市下遺跡SH004	24	第63図 昭和63年度調査 古市遺跡A区SK1	48
第28図 古市下遺跡SH006	24	第64図 昭和63年度調査 古市遺跡A区SK1出土土器	48
第29図 古市下遺跡SH005	25	第65図 古市遺跡SK150	49
第30図 古市下遺跡SH005出土遺物	26	第66図 古市下遺跡SK150出土遺物	49
第31図 古市下遺跡SH015出土遺物①	26	第67図 古市下遺跡SK087・SK176	50
第32図 古市下遺跡SH015出土遺物②	26	第68図 古市下遺跡SK087出土遺物	51
第33図 古市下遺跡SH015	27	第69図 古市下遺跡SK279出土遺物	51
第34図 古市下遺跡SH016	28	第70図 古市下遺跡SK279	52
		第71図 古市下遺跡SK425	53
		第72図 古市下遺跡SK425出土遺物	53
		第73図 古市下遺跡SK423	54
		第74図 古市下遺跡SK423出土遺物	54

第75図	古市下遺跡SK013	54	第109図	Ⅲ地域の金ウンモ含有土器出土遺跡と 金ウンモ含有土器	88
第76図	古市下遺跡SK013出土遺物	54	第4章 古市上遺跡		
第77図	古市下遺跡SK012	55	第110図	古市上遺跡土層模式図	91
第78図	古市下遺跡SE010出土遺物	55	第111図	古市上遺跡遺構配置図	92
第79図	古市下遺跡SE010	56	第112図	古市上遺跡SH005	95・96
第80図	古市下遺跡SD007	57	第113図	古市上遺跡SH005出土遺物①	97
第81図	古市下遺跡SD007出土遺物①	57	第114図	古市上遺跡SH005出土遺物②	98
第82図	古市下遺跡SD007出土遺物②	58	第115図	古市上遺跡SH027	99
第83図	古市下遺跡SB501	59	第116図	古市上遺跡SH027出土遺物	99
第84図	古市下遺跡SB502	59	第117図	古市上遺跡SH040	100
第85図	古市下遺跡SB503	60	第118図	古市上遺跡SH047	101
第86図	古市下遺跡SB504	61	第119図	古市上遺跡SH047出土遺物	101
第87図	古市下遺跡SB505	61	第120図	古市上遺跡土坑墓(木棺墓)①	107
第88図	古市下遺跡SB506	62	第121図	古市上遺跡土坑墓(木棺墓)②	108
第89図	古市下遺跡SB507	62	第122図	古市上遺跡土坑墓(木棺墓)③	109
第90図	古市下遺跡掘立柱建物跡出土遺物	63	第123図	古市上遺跡土坑墓(木棺墓)④	110
第91図	古市下遺跡Ⅰ区柱穴出土中世遺物	65	第124図	古市上遺跡土坑墓(木棺墓)⑤	111
第92図	古市下遺跡Ⅰ区出土銭貨	66	第125図	古市上遺跡土坑墓(木棺墓)⑥	112
第93図	古市下遺跡Ⅱ区出土銭貨	66	第126図	古市上遺跡土坑墓(木棺墓)⑦	113
第94図	古市下遺跡Ⅰ区その他の古代・中世遺物	66	第127図	古市上遺跡土坑墓(木棺墓)⑧	114
第95図	古市下遺跡Ⅱ区その他の古代・中世遺物	67	第128図	古市上遺跡土坑墓(木棺墓)⑨	115
第96図	昭和63年度調査B区位置図	68	第129図	古市上遺跡土坑墓(木棺墓)⑩	116
第97図	昭和63年度調査 古市遺跡B区	68	第130図	古市上遺跡土坑墓(木棺墓)⑪	117
第98図	昭和63年度調査 古市遺跡B区SK1、柱穴出土土器	69	第131図	古市上遺跡土坑墓(木棺墓)出土遺物	118
第99図	昭和63年度調査 古市遺跡B区SK2出土土器	69	第132図	古市上遺跡SK058	119
第100図	昭和63年度調査 古市遺跡B区包含層出土土器	69	第133図	古市上遺跡SK058出土遺物	120
第101図	昭和63年度調査 古市遺跡B区柱穴1出土銭貨	70	第134図	古市上遺跡SD043・SD045・SD046	121
第102図	古市下遺跡遺構変遷図	73・74	第135図	古市上遺跡SD043出土遺物	122
第103図	東北九州における石町式土器出土主要遺跡 及び関連遺跡	77	第136図	古市上遺跡SD045出土遺物	123
第104図	東北九州主要遺跡出土土器分類	79・80	第137図	古市上遺跡SD046出土遺物	123
第105図	関連遺跡の土器	82	第138図	その他の遺物	125
第106図	豊後国における金ウンモ含有土器出土地域	84	第139図	古市上遺跡における遺構の変遷	127
第107図	I地域の金ウンモ含有土器出土遺跡	85	第140図	古市上遺跡の木棺墓構築手順(模式図)	128
第108図	Ⅱ地域の金ウンモ含有土器出土遺跡	87	第141図	土坑墓(木棺墓)のグルーピングと時期	131

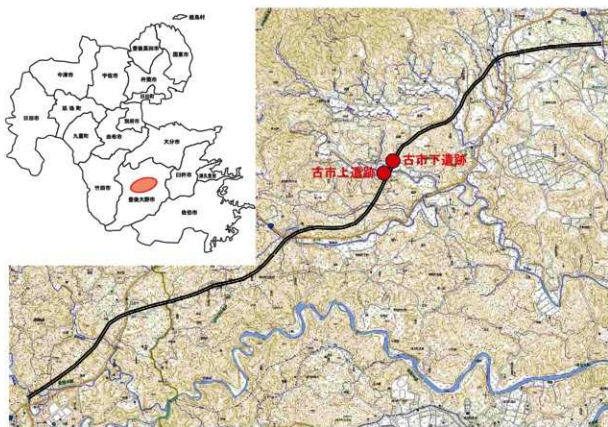
第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

一般国道57号中九州横断道路は大分市と熊本市を結ぶ高規格道路で、両県の交流を促進すると共に沿線地域の産業発展や地域活性化を目的とし計画されたものである。大分県内では、豊後大野市犬飼町の国道10号から分岐し、豊後大野市千歳町・大野町・朝地町、竹田市を通る。このうち、犬飼～千歳間は平成19年3月に、千歳～大野間は平成20年3月に各々供用が開始されている。

大野竹田道路については、平成19年5月に国土交通省大河川国道事務所から大分県教育委員会文化課に、事業暫定予定地の分布調査依頼があった。これを受け、大分県教育委員会文化課は大分県教育庁埋蔵文化財センターとともに予定地の分布調査を実施した。その結果、暫定予定地内において調査の必要な箇所が20箇所余り確認され、平成19年6月に国土交通省へ通知した。その後、工事の詳細設計が完成したため、平成19年12月に再度の分布調査を行った。詳細設計に伴い工事予定地が大きく絞り込まれたため、調査が必要な箇所は13箇所となり、平成20年1月に国土交通省へ通知した。

平成20年度以降、用地買収が本格的に開始され道路工事が着手されることとなった。調査必要箇所については、用地買収終了後に国土交通省から調査依頼を受け、試掘・確認調査を実施した。遺跡が確認された箇所は、大分県教育庁埋蔵文化財センターが記録保存のための本調査を実施した。本調査された遺跡は、発掘調査報告書の刊行に向け、埋蔵文化財センターで整理作業を行った。



第1図 国道57号大野竹田道路予定地と古市下遺跡・古市上遺跡の位置

第2節 調査の経過

古市下遺跡、古市上遺跡は豊後大野市朝地町に所在する。

両遺跡の所在する箇所は、市万田川添いの段丘上などに位置しており、地形的にみても遺跡が存在する可能性が高く、工事予定地の一部には周知遺跡である古市遺跡が所在する。古市遺跡は圃場整備事業実施に伴い調査が行われており、古代・中世などの遺構・遺物が検出されている。工事予定地の試掘・確認調査は、平成21年度に国土交通省の依頼を受けて大分県教育庁埋蔵文化財センターが行った。その結果、市万田川に近い箇所と川から離れた丘陵裾部の2カ所で遺跡が確認された。前者を古市上遺跡、後者を古市下遺跡として本調査を行うこととしたが、周辺の工事は既に着手されており、工事と併行して調査を進めることとなった。調査にあたり工事施工業者と協議を行い、本調査箇所の表土持ち出しを事前に工事業者が行い調査期間の短縮を図るとともに、各遺跡の調査区ごとに終了期日を定め、工事の進捗に支障をきたさぬよう調査を進めた。

なお、調査期間中の平成22年1月29日には、豊後大野市立朝地小学校6年生約20名が古市下遺跡を訪れ、遺構・遺物の見学を行うとともに、実際に移植ゴテを持ち発掘作業を体験した。

第3節 調査組織の構成

古市下遺跡、古市上遺跡の調査組織は以下のとおりである（役職名は平成21年度当時）。

○調査主体

大分県教育委員会

○調査機関

大分県教育庁埋蔵文化財センター

○調査担当

佐藤 英一

大分県教育庁埋蔵文化財センター 所長

坂本 嘉弘

同 次長

栗田 勝弘（古市上遺跡調査担当）

同 資料管理班 課長補佐（総括）

後藤 一重（古市下遺跡 調査・報告書担当）

同 大型事業班 主幹（総括）

小柳 和宏

同 受託事業班 主幹（総括）

吉田 寛（古市上遺跡 調査・報告書担当）

同 資料管理班 副主幹

○調査事務

宮水 敬三

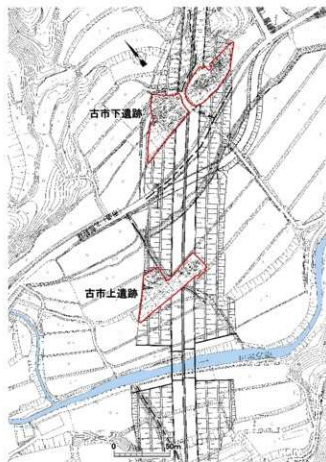
同 管理予算班 主幹（総括）

久寿米木 百合子

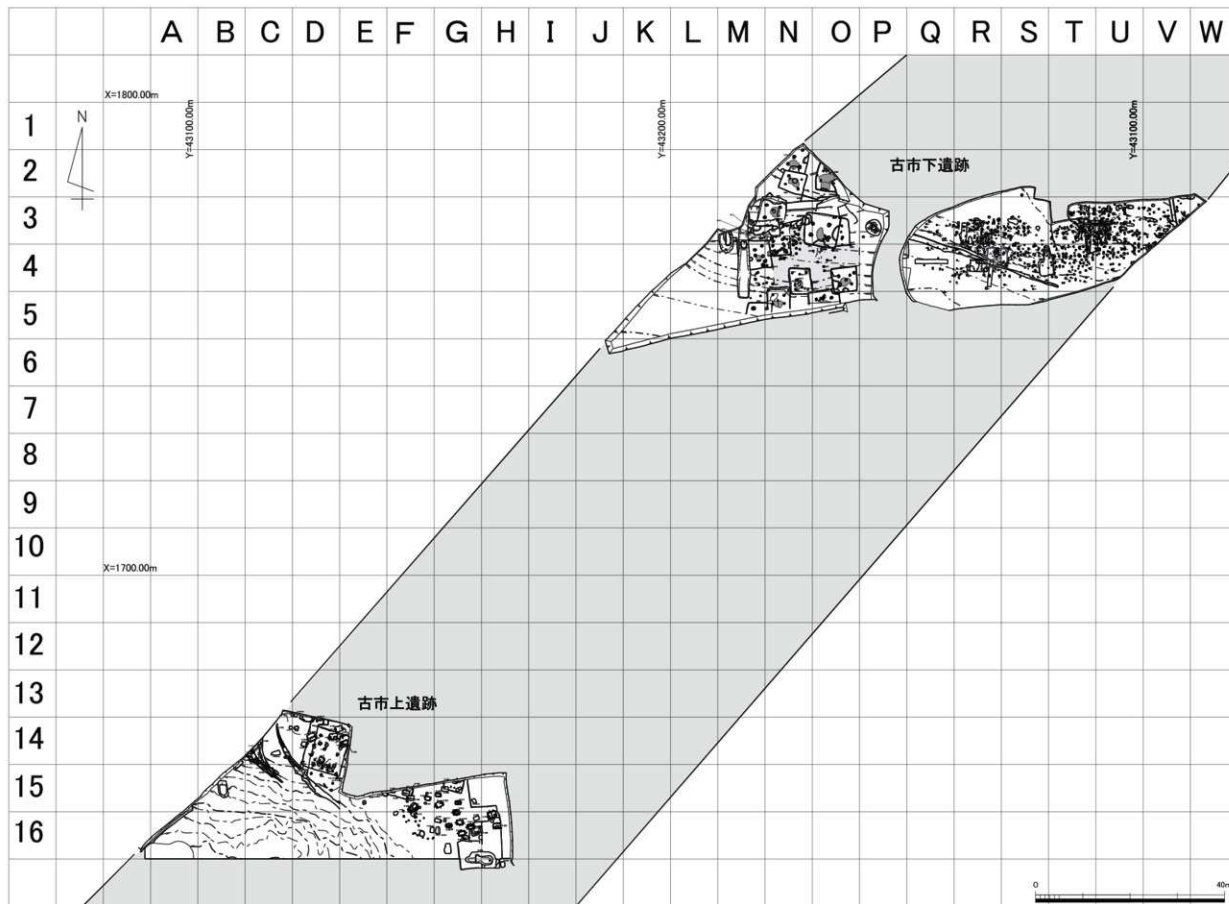
同 管理予算班 副主幹

徳脇 仁志

同 管理予算班 副主幹



第2図 古市下遺跡・古市上遺跡位置図



第3図 古市下遺跡・古市上遺跡調査区配置図(1/800)

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

古市下遺跡・古市上遺跡の所在する豊後大野市朝地町一万田地区は、九州山地の祖母・頓山系に源を発する大野川水系の一角に位置する。周辺は標高200～300mの丘陵と、市万田川やその支流の小河川により開析された狭小な谷が複雑に入り組む。大野川上中流域においてしばしば見られる火山灰台地は、あまり認められない。全体として平地が乏しく、山地地形が卓越した地域である。

豊後大野市朝地町の遺跡は、山城跡などを除き、ほとんどが市万田川や平井川などの河川流域に集中する。時代的には、旧石器時代から中世に至る各時代の遺跡が確認されている。

旧石器時代の遺跡は少なく、わずかに田村遺跡でナイフ型石器が確認されている程度である。

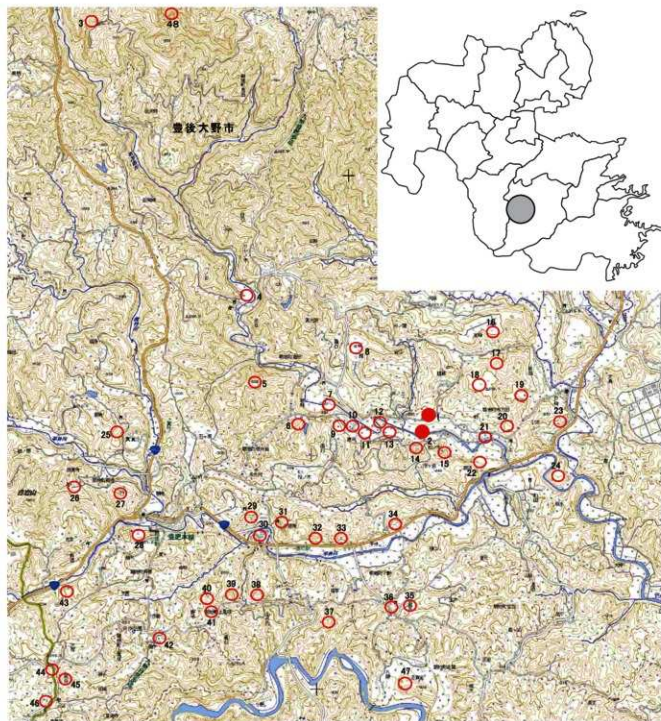
縄文時代は、田村遺跡、シゲツキ遺跡、田村東遺跡、田村谷遺跡、池在遺跡など良好な遺跡が多数確認されている。いずれも市万田川派の段丘上に立地する。田村遺跡では早期から晩期の遺物が確認されている。なかでも早期の押型文土器は、粗大な楕円文・山形文、丸底、口縁部内面の長い条痕などを特徴とする。これらは田村式とされ、川原田式—稲荷山式—早水台式—下菅生B式—田村式—ヤトコロ式という、東九州押型文土器編年の一角を占める。シゲツキ遺跡でも早期の遺物が多量に出土している。田村東遺跡と田村谷遺跡では後期の鐘崎式、北久根山式土器が良好な状態で出土しており、田村谷遺跡では、石組炉を有する竪穴建物跡が検出されている。池在遺跡では、後期三万田式の遺物がまわって出土している。

弥生時代～古墳時代の遺跡のうち集落遺跡は、西蓮寺遺跡、シゲツキ遺跡、田村谷遺跡、田村下津留遺跡などで確認されている。西蓮寺遺跡は丘陵上に立地するもので、多くの竪穴建物跡が検出されており、平井川流域の拠点集落のひとつであろう。シゲツキ遺跡、田村谷遺跡、田村下津留遺跡は市万田川派の段丘上に立地する。これらの遺跡は、地形的な制約から、西蓮寺遺跡に比べると小規模である。同じ市万田川流域に位置する古市下遺跡、古市上遺跡の立地する場所は、同川流域でも最も広大な平坦地がみられる。両遺跡の調査成果と調査区外の周辺地形から、両遺跡を含む周辺地域に市万田川流域の拠点的な集落が存在していた可能性が高いと思われる。

古墳について、平井川流域では、高伏古墳、丸山古墳、用作古墳、有緑寺古墳、久保古墳などの小規模な円墳が平井川右岸の丘陵尾根派に点在する。これに対し横穴墓は平井川左岸の丘陵斜面にみられ、狐迫横穴墓群、姉井迫横穴墓群、石田横穴、大戸横穴などがある。市万田川流域では、町古墳群、七崩横穴群、田村横穴群、向瀬口横穴などが知られている。以上から、平井川流域、市万田川流域とも古墳時代後期には、谷の開発が順調に進み比較的安定した状況であったことが窺える。

古代の遺跡については確認例が少ない。そのなかで、圃場整備事業に伴う調査で、古市下遺跡に隣接する箇所から検出された遺構・遺物は注目される。遺構は、土師器杯20個体と土師器壺5個体が河原石とともに置かれ、空間部に砂が充填されたもので、地鎮祭などに伴う一括埋納遺構と思われる。これらは9世紀代に比定されている。小面積の調査のため遺跡の性格等は定かではないが、上位層の屋敷である可能性が考えられる。

中世には一万田氏や志賀氏が朝地町域に所領を得て入部する。一万田氏は豊後守護大友能直の六男景直を祖とする。景直は延応二年(1240)母の深炒尼から大野荘上村半分の地頭職を譲り受け、代々相伝する。一万田氏の館跡は市万田川流域に所在しており、大野荘上村半分の中核をなすのが市万田川流域の地であると考えられている。一万田館跡は比較的良好に残存しており、数次の調査により内部の状況も明らかになっている。それによると館の規模は、東西約120～200m、南北230m、総面積約40,400m²の広大なもので、一町四方の主郭に加え半町四方の枳形を配する。主郭に隣接する箇所からは、鉄滓、籾羽口、埴場などが出土しており、鉄や銅などの製品製作に係わる工房が存在したことがわかる。また、館跡周辺には「妙園寺」、「矢馬雑司」、「武家」、「勢馬溜」、「武家台」、「城戸」、「北口」、「出口」などの呼称が伝承されており、館とその周辺の諸施設の配置状況などを推測することができる。一万田氏に係わる山城として、鳥屋城跡や小牟礼城跡がある。一方志賀氏は、朝地町南部の大野荘志賀村に所領を得て一万田氏とほぼ同時期に入部する。志賀氏は三代までこの地を本拠とするが、その後竹田市の岡城に移る。志賀氏の居城と伝えられる志賀城跡が残るが、入部当初の状況を良く残している。



- | | | | | |
|------------|------------|----------|------------|----------|
| 1 古市下遺跡 | 11 田村谷遺跡 | 21 町遺跡 | 31 大恩寺稲荷洞穴 | 41 銭蓋石棺 |
| 2 古市上遺跡 | 12 不動院遺跡 | 22 滝ノ上遺跡 | 32 石田横穴 | 42 用作遺跡 |
| 3 田夫時洞穴 | 13 田村下津留遺跡 | 23 小畑横穴群 | 33 姉井追横穴群 | 43 久保古墳 |
| 4 池在遺跡 | 14 田村横穴墓群 | 24 小牟礼城跡 | 34 狐追横穴群 | 44 大森古墳 |
| 5 ナメリ遺跡 | 15 七崩横穴墓群 | 25 額倉遺跡 | 35 若宮遺跡 | 45 小森古墳 |
| 6 向瀬口横穴 | 16 尾峰遺跡 | 26 西蓮寺遺跡 | 36 若宮古墳 | 46 有縁寺古墳 |
| 7 田村シゲツキ遺跡 | 17 地神原古墳 | 27 近地城跡 | 37 高城城跡 | 47 志賀城跡 |
| 8 一万田船跡 | 18 宮迫遺跡 | 28 草木洞穴 | 38 高伏古墳 | 48 鳥屋城跡 |
| 9 田村遺跡 | 19 袴田横穴 | 29 大戸横穴 | 39 狐迫古墳 | |
| 10 田村東遺跡 | 20 町古墳群 | 30 中江遺跡 | 40 丸山古墳 | |

第4図 古市下遺跡・古市上遺跡周辺の遺跡

第3章 古市下遺跡

第1節 調査の概要

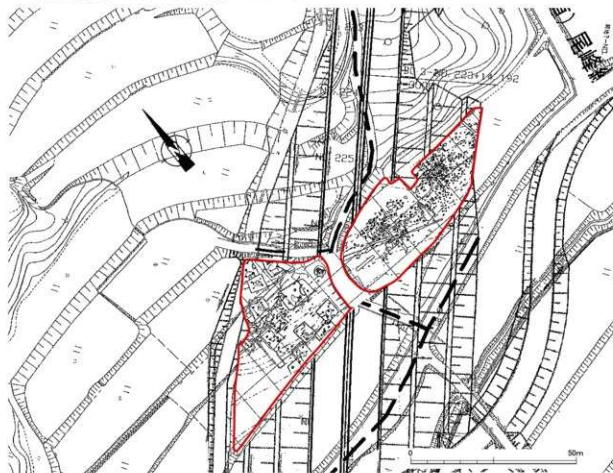
1 調査の経緯

古市下遺跡は大分県豊後大野市朝地町大字市万田に所在する。

蛇行しながら東流する市万田川左岸の丘陵裾部に位置しており、標高は約185mである。市万田川流域の谷は、昭和60年代から平成5年頃にかけて、県営圃場整備事業が実施されており、それに伴い多くの遺跡が確認されている。本遺跡もその際に確認され、古市遺跡として一部が調査された。その結果、古代・中世の遺構と遺物が良好な状態で検出されている（『田村遺跡・池在遺跡・古市遺跡・市万田館跡』朝地町教育委員会 1994）。

古市下遺跡の本調査は、平成22年1月6日から2月15日までの間実施した。道路建設工事が既に着手されていたことから、工事工程と調整を図りながらの調査であった。そのなかで、調査区ごとに調査終了期日を設定し工事の進捗に支障なく調査を終了することができた。表土剥ぎについては、工事工程的にも土を持ち出す必要があったため、調査に先立つ平成21年12月21日から28日の間、大分県埋蔵文化財センター職員立ち会いのもとで工事業者の重機により掘削・持ち出しを行った。

調査期間中は厳寒の時期で、毎日の朝の気温は氷点下を記録し、日中でも5℃を下回る日が多くみられた。さらに、霜柱や土の凍結など悪条件が重なったが、発掘作業員の皆さんの献身的な努力により、工期に遅れることなく調査を無事完了し、多くの成果を得ることができた。



第5図 古市下遺跡位置図

第1節 調査の概要

2 遺跡の基本層序

本遺跡の基本層序について説明する（第6図）。

1層・2層は現在の水田耕作土と造成土である。当該地区一帯は県営圃場整備が実施されており、丘陵裾部の斜面地にあたる本遺跡では、場所によっては水田造成土が2mを超す箇所もみられた。

3層・4層は圃場整備前の旧水田耕作土と造成土である。近代の用水路整備に伴い開田されたもので、一部では4層中に土器の小破片混入が認められた。

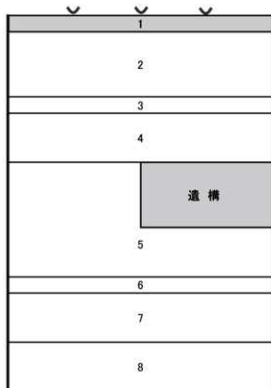
5層以下は火山灰堆積層である。5層は黒褐色のやや粘質をおびた層である。下部に6層（アカホヤ層）が部分的にみられる。本来、この層の上面が弥生時代以降の遺構検出面であるが、遺構埋土と本層の識別が極めて難しい。そのため、一部については、5層を少し掘下げるなかで、遺構を確認した。

また、5層は縄文時代前期から晩期の遺物包含層でもある。本遺跡においても、縄文時代後期の遺物集中箇所が確認されている。

6層は鹿児島県の鬼界カルデラを噴出起源とするアカホヤ火山灰層である。5層下部に部分的にみられる。

7層は茶褐色粘質土である。縄文時代早期に相当する層であるが、本遺跡では遺構・遺物は確認されていない。

8層は明褐色粘質土で、旧石器時代に相当する層である。本遺跡では、遺構・遺物は確認されなかった。



- 1層 現水田耕作土
- 2層 現水田造成土
- 3層 旧水田耕作土
- 4層 旧水田造成土
- 5層 黒褐色土層 弥生～中世遺構検出面
縄文時代後期包含層
- 6層 アカホヤ層
- 7層 茶褐色土層
- 8層 明褐色土層

第6図 古市下遺跡基本層序

3 調査区と検出遺構

確認調査で遺構の確認された丘陵斜面から裾部にかけての場所に調査区を設定した。生活道となっている巾約3mの道路はさみ、東側をⅠ区、西側をⅡ区とした。調査面積は、Ⅰ区とⅡ区を併せて2332㎡である。

調査の結果、縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世の遺構・遺物を確認することができた（第7図）。

遺構の確認は5層上面で試みたが、遺構の識別が難しく、検出作業を何度も行った。当初の想定では、古代・中世の遺構が主体をなすと考えられていたが、Ⅱ区において弥生時代～古墳時代の竪穴建物跡が密集して検出された。竪穴建物跡はⅠ・Ⅱ区併せて16基に及び、市万田川流域における拠点的な集落である可能性が確認できた。

古代については、Ⅱ区の水田造成土などに土器の小破片が含まれるのが認められたが、遺構は少数であった。古代の遺構はⅡ区西側に分布の中心があるものと推定される。

中世の遺構は、Ⅰ・Ⅱ区の両調査区で確認することができた。特にⅠ区では柱穴が多数検出され、大規模な竪立柱建物跡が数棟復元されており、中心的位置を占めるものと考えられる。

また、5層上面における遺構検出作業中に、縄文時代後期の土器集中箇所が確認された。遺構に伴う可能性が高いと考え精査したが、遺構として捉えることはできなかった。

第2節 遺構と遺物

1 縄文時代

I区、II区で縄文時代の遺構・遺物が検出された。I区では、中世遺構に混入したものが散発的に出土したのみで、包含層は確認されていない。一方II区では、5層中から縄文土器が集中する部分が1ヶ所確認された。

(1) 遺物集中箇所

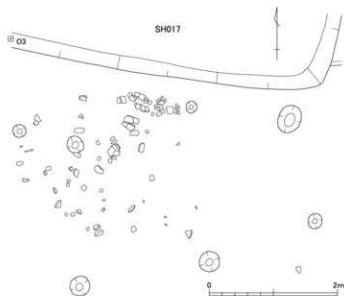
II区の5層上面で遺構検出作業中に、縄文時代後期土器が5層中から出土するのが確認された。その範囲は概ねSH017とSH008・018の間である。そのため、この範囲に調査区を設定し、5層の掘下げを行った。上面から約10cm掘下げた段階で、SH017の南側において、土器などが集中する箇所が確認された。これは大形破片も含む良好な出土状態で、竪穴などの遺構に伴う可能性が高いと判断された。そのため、集中箇所の周辺を精査して遺構ラインの検出に努めたが、平面観察では確認することができなかった。さらにサブトレンチを設定し、断面観察も行ったが遺構の確認にはいたらなかった。その後、集中箇所周辺を平面的に掘下げながら遺構検出作業を試みたが、確認はできなかった。また、焼土や石組炉などの出土も期待されたが、それらも検出することができなかった。遺物の集中する範囲は2×2m程であるが、SH017により切られた状況である(第8図)。本来はSH017も含む範囲に広がりをもしたものであったと推定される。遺構の確認はできなかったが、これらの遺物は極めて一括性が高いものである。

遺物集中箇所から出土した土器について説明する(第9、10図)。

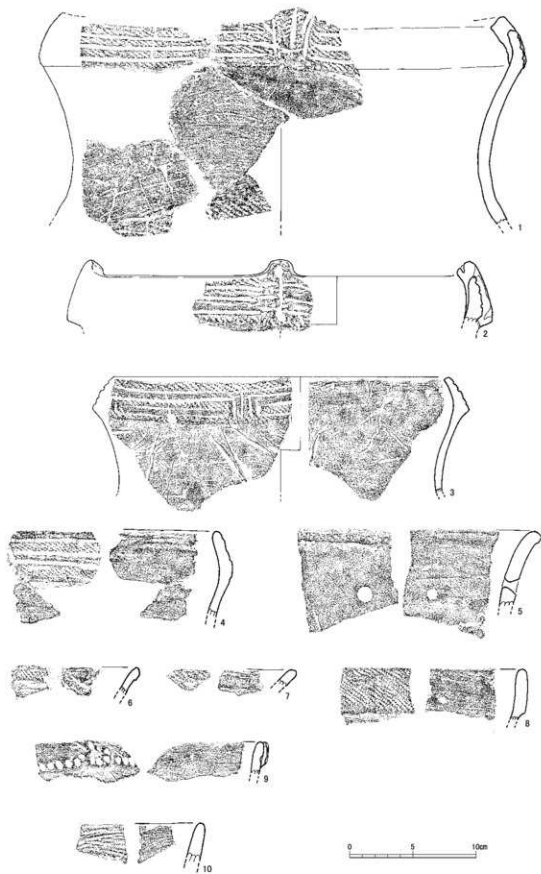
深鉢A(1~4) 口縁部に縄文と沈線による文様帯をもち、口縁部がくの字状に内傾する一群である。口縁部の数ヶ所に隆帯の貼り付けが施され波頂部を形成する。1は頸部から口縁部にかけての資料である。頸部下の体部に縄文が一部みられるが、頸部は無文で外湾しながら口縁部にいたる。くの字状に内傾する口縁部文様帯には縄文地に3本の沈線が横方向に施される。貼り付けが施される波頂部は、横方向の3本の沈線を切るように縦方向の沈線が3本みられる。2は口縁部だけの資料である。口縁部文様帯は縄文地に横方向の沈線が3本施される。波頂部は隆帯が貼り付けられ、横方向の3本沈線を切るように1本の沈線が垂下する。この沈線の上端と下端には円形の刺突がみられる。また波頂部上面にも刺突が施される。3は頸部から口縁部にかけての資料である。外湾する頸部は無文で、口縁部はくの字状に内傾する。口縁部文様帯は縄文と沈線により構成されている。1、2の文様帯は横方向の沈線文のみであったのに対し、3は縦方向の短沈線による区切りを行いながら方形の沈線文様を配置している。本資料も波頂部を有するものと推定される。4も頸部から口縁部にかけての資料である。無文の頸部から口縁部文様帯が内傾するもので、文様帯には縄文地に横方向の沈線が3本施されている。

深鉢B(8) 深鉢Aと同様な器形であるが、口縁部は内傾しない。口縁部文様帯は縄文のみにより形成される。8は口縁部資料である。口縁部文様帯は肥厚し縄文のみが施される。

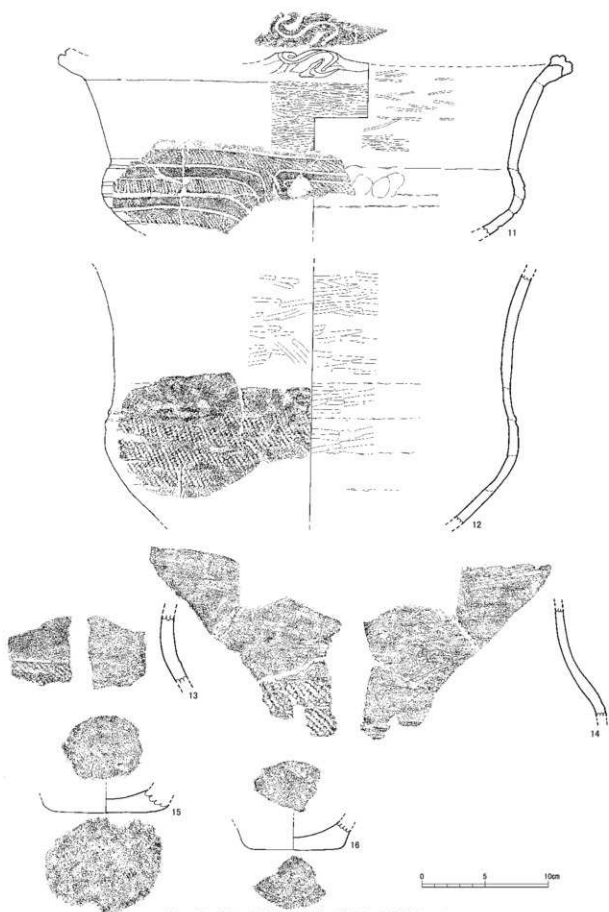
深鉢C(9) 口縁部下に刺突による文様が施されるものである。9は口縁部であるが、肥厚や内傾はみられない。口縁部から一定の無文部を残し刺突文を連続し口縁部文様帯を構成する。刺突が施された隆帯の貼り付けもみられるが、顕著な波頂部とはならない。



第8図 古市下遺跡縄文土器出土状況



第9圖 古市下遺跡縄文土器集中箇所出土土器①(1/3)



第10図 古市下遺跡縄文土器集中箇所出土土器②(1/3)

第2節 遺構と遺物

深鉢D（5～7） 頸部から口縁部にかけ大きく外反するもので、口縁端部外面が肥厚し帯状に縄文が施される一群である。5は外反する頸部がそのまま口縁部にいたる。頸部は無文で口縁端部外面を肥厚させ、縄文を施す。頸部に焼成後の穿孔がみられる。6は口縁部の資料である。やはり口縁端部外面を肥厚させ縄文を施している。7は口縁端部外面に縄文が帯状に施文されるが、肥厚は顕著に認められない。

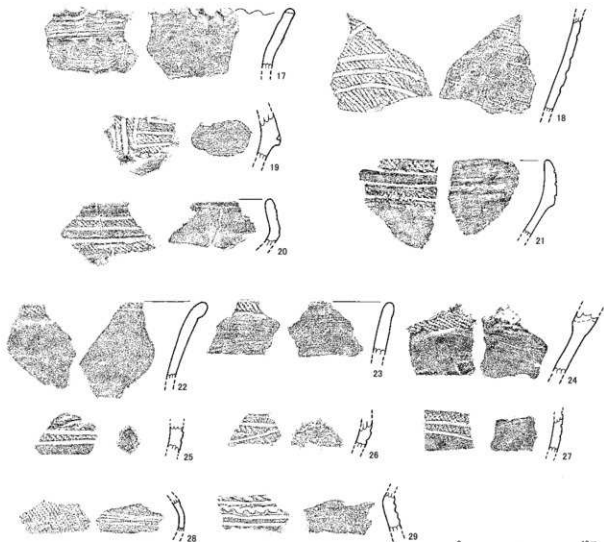
深鉢E（10） 口縁部に文様帯をもたない一群である。10は内外面に条痕がみられる。

浅鉢A（11） 深鉢A～Eに比べ、口径に比し器高が明らかに低いものである。体部と口縁部に文様が施される。11は扁平な体部をもち、頸部は外傾しながら直線的に口縁部に伸びる。口縁部は外方に折れ、文様帯を形成する。体部は縄文と沈線により文様が構成される。頸部は無文で、外方に折れた口縁端部外面には縄文が施される。また、口縁部には貼り付けによる波頂部がみられ、波頂部上面にはS字状の曲線文が描かれる。

深鉢（12～14） 口縁部を欠くため不明であるが、深鉢A～Cの体部から頸部にかけての資料と考えられる。12は半球形の体部に縄文が施され、無文の頸部が外反しながら伸びる。13は頸部下部の資料である。体部には縄文が施され、体部と頸部の境に軽い段が付き無文の頸部へと続く。14も球形の体部に縄文がみられ、頸部が外湾しながら立ち上がる。

底部（15、16） いずれも平底の底部である。

以上は、一括性の高い良好な資料で、縄文時代後期石町式新相に比定される（詳細は第3節小結参照）。



第11図 古市下遺跡出土縄文時代土器(1/3)



第12図 古市下遺跡縄文時代石器(1/2)

(2) その他の縄文時代遺物

土器

Ⅱ区の5層包含層中や弥生時代遺構などに混入していた土器を紹介する(第11図)。

17、18は包含層中から出土したものである。包含層からの遺物出土状況は、前述した遺物集中箇所を除けば散発的であった。17は深鉢で、口縁部がやや外方に折れる。口縁部上面を連続的に押し、波状を呈する。後期初頭に比定されよう。18は深鉢の体部である。内外面に条痕がみられ、外面は斜方向の条痕の後に横方向の沈線が施される。

19～29は弥生時代等の遺構から出土したものである。19～21は遺物集中箇所の深鉢Aにあたる。いずれも口縁部が内傾し外面に口縁部文様帯がみられる。19は口縁部が欠けが波頂部と思われ、横方向の沈線を区切るように縦方向の沈線が3本みられる。20、21は口縁部資料で、縄文と沈線による文様が施される。22、23は遺物集中箇所の深鉢Dにあたる。いずれも口縁部外面がわずかに肥厚し、幅狭の縄文が帯状に施される。24は口縁部ちかくの資料で、内外面とも肥厚する。外面肥厚部は文様帯を形成しており、縄文が施文されている。25～29は胴部資料である。このうち25～27は沈線と縄文による文様がみられる。28は球形の胴部で、外面に縄文が施される。29は体部から頭部にかけての資料である。外面に沈線による波状文、直線文、列点文がみられる。以上のうち、19～28は土器集中箇所の土器と同一の時期で、29はこれよりも時期が下がると考えられる。

石器

石器の出土数は少なく、Ⅰ、Ⅱ区併せて3点を紹介する(第12図)。

30はⅠ区の中世遺構に混入していたものである。チャート製のトロトロ石器と思われる。長さ3.6cm、幅1.6cmで、幅に比し長さが長い。また、厚さも一定ではなく、最も厚い部分で0.9cmを図る。脚部は短く、脚の基部の外縁にわずかに抉りをいれ脚を強調する。31、32はⅡ区の弥生時代遺構から出土したものである。31は姫島産黒曜石製石鏃であるが、未成品である可能性もある。32は姫島産黒曜石製石鏃の欠損品と思われる。

2 弥生・古墳時代

弥生・古墳時代の遺構は5層上面において検出した。5層は黒褐色土を呈し、遺構埋土との識別が難しく、全体の遺構分布状況を確定するまでには何度も遺構検出作業を繰り返した。また、Ⅱ区においては竪穴建物跡の切り合いが顕著で、平面的な前後関係の把握についても時間を要した。

遺構はⅡ区の東半分に集中し、Ⅰ区では1基の竪穴建物跡が確認されたのみである。調査区は丘陵斜面から裾部にかけて設定されており、弥生・古墳時代の集落が谷底平野から傾斜地にかけて営まれたことが分かる。

(1) 竪穴建物跡

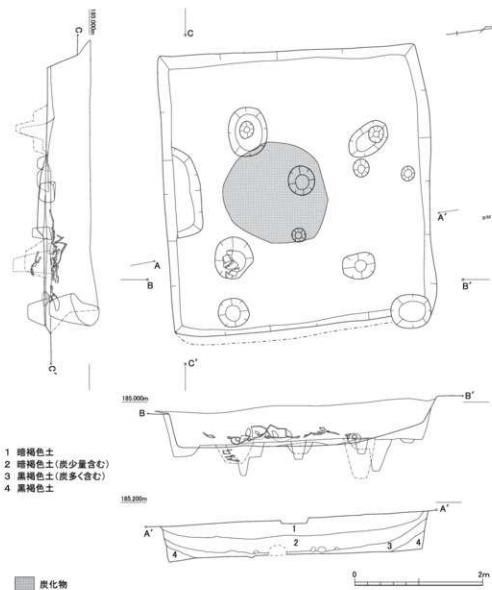
竪穴建物跡はⅠ・Ⅱ区併せて16基が確認された。特にⅡ区の東半分では、重複して密集する状況であった。これらの中には、調査区外に及ぶものや、圃場整備等により大半が削平され一部しか残存しないものなどもみられる。

SH350

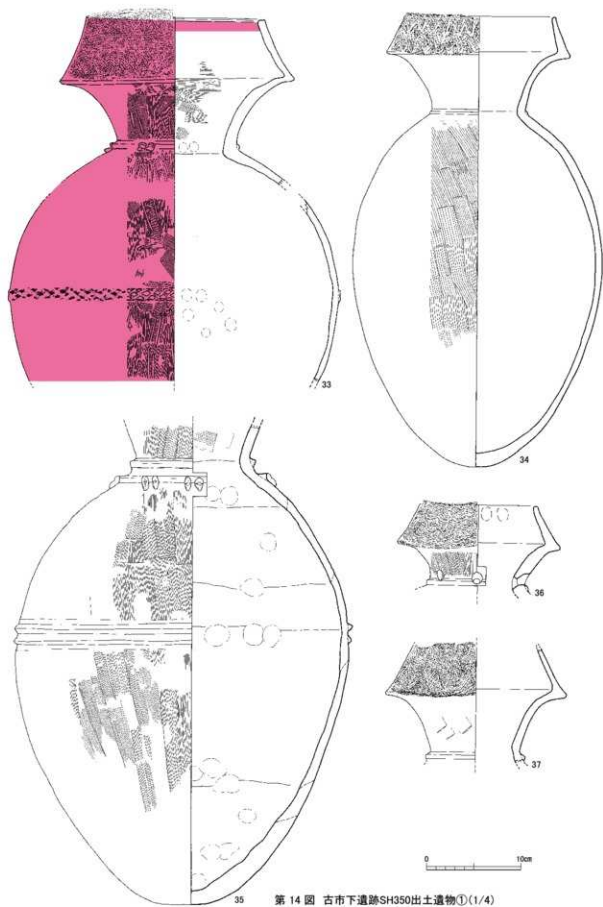
SH350 (第13図) はI区に位置する。I区において確認された竪穴建物跡は、この1基のみである。丘陵斜面から裾部に展開する集落の最も東に位置するものである。

本遺構は中世の柱穴等と重複しており、これら遺構の調査後に掘削を開始した。平面形は方形を呈し、その規模は南北約4.4m、東西約4.5mである。本遺跡の中にあつては規模が小さい。しかし、竪穴の深さは0.5～0.6mで、その残存状況は良好である。主柱穴は4本で、柱間の長さは各辺とも約2.1mである。竪穴の主軸がほぼ南北を呈するのに対し、主柱穴の軸は全体がやや東に振れる。床面中央は踏み固められた状況が顕著で、その中央には径約0.5m、深さ約0.2mの土坑がみられるが、土坑内から焼土等は検出されていない。この土坑付近から南側の床面には、炭化物の付着が顕著に認められた。その範囲は径約1.7mである。また、南壁沿いの中央付近には長楕円形を呈する土坑がみられる。長さ1.5m、幅0.4m、深さ0.2mである。

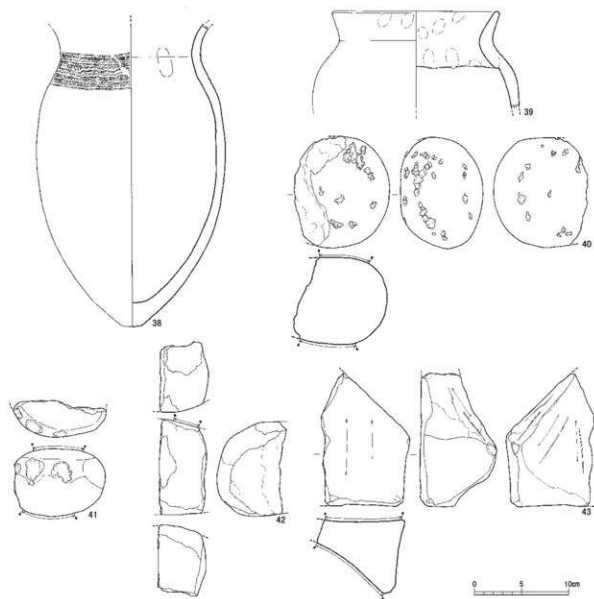
竪穴内からは完形にちかいいものも含む土器がまとまって出土した。これらは、南東主柱穴周辺において、床面より0.1～0.2m浮き、一括して検出された。壺が主体をなし、壺のなかには、頸部より上だけのものもみられた。竪穴建物廃棄に係るものであろう。



第13図 古市下遺跡SH350(1/60)



第14圖 古市下遺跡SH350出土遺物①(1/4)



第15図 古市下遺跡SH350出土遺物②(1/4)

出土遺物は土器と石器がみられる(第14, 15図)。

33~37は壺である。33は二重口縁壺で、体部下半を欠く。体部は肩が張り球形にちかい器形を呈する。体部中程にはベルト状の突帯が貼り付けられ、連続X字状の刻みが木口により施される。頸部下には断面三角形の突帯が1条付され、2個単位の浮文が配される。頸部は、内傾する口縁部の立ち上がりに比し短い。口縁部外面には、上から波状・直線・波状の櫛描文が施される。外面及び口縁内側に赤色顔料が塗られている。34は丸底を呈する二重口縁壺である。体部は卵形をなし、突帯は付されない。頸部下に1条の断面三角形の突帯が付され、口縁立ち上がり部に比し、頸部は長い。35は口縁部を欠くが二重口縁壺と思われる。底部はレンズ状底で、体部中程と頸部下に各々2条断面三角形の突帯が付される。頸部下の突帯に接し、2個単位の浮文が配される。36、37は二重口縁壺の頸部より上部の資料である。両者とも頸部下に断面三角形の突帯が1条付される。36の頸部下には円形の焼成前穿孔がみられる。38、39は甕である。38は長胴形を呈し、尖底状の平底である。頸部のくびりは緩やかで、肩部に櫛描波状文が施される。39は肩部があまり張らず、短い口縁部が短く外方に折れる。

40~42は磨石である。40、41は両面に磨面がみられる。

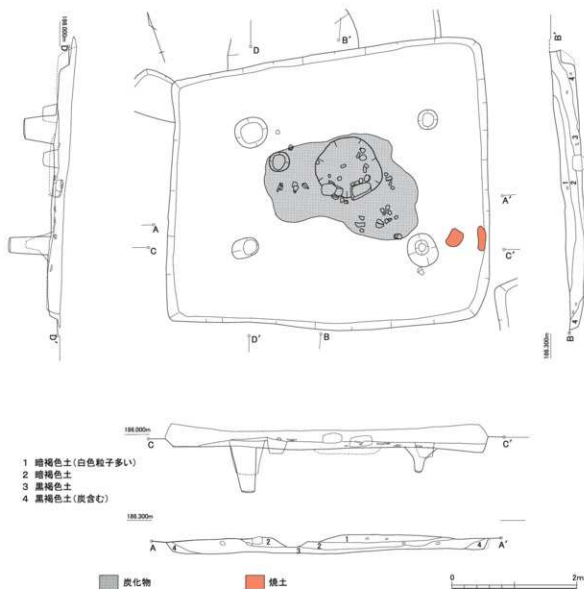
43は砥石である。一部欠損するが、表裏両面に使用の痕跡が認められる。

以上の出土遺物から、本竪穴の時期は弥生時代後期後葉と思われる。

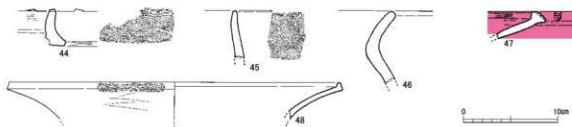
SH001

SH001 (第16図) はⅡ区北端近くに位置する。傾斜地に設定された調査区の最高所にあたり、同じⅡ区のSH018などの位置と比べると2.5mも高い。本竪穴はSH003と重複しているが、SH003を切っている。

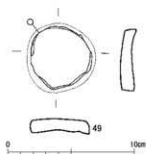
竪穴建物跡の平面形は長方形を呈し、東西方向に長軸をもつ。本遺跡の中では比較的規模が小さい方で、その規模は南北約4.0～4.6m、東西約5.1～5.3mである。竪穴の深さは0.15～0.3mで、圃場整備事業により大きく削平されているものと考えられる。主柱穴は4本で、竪穴の形態に比例し南北間よりも東西間の柱間の長が長い。柱間の長さは、南北が1.9～2.1m、東西が約2.9mである。床面中央は踏み固められた状況が顕著で、その中央に径約1.0m、深さ約0.1mの皿状を呈する円形の浅い土坑がみられる。土坑から焼土等は検出されていないが、炉に關係する可能性が高い。この土坑を中心として、床面に炭化物が顕著に付着するのが確認できた。その



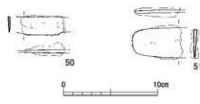
第16図 古市下遺跡SH001(1/60)



第17図 古市下遺跡SH001出土遺物①(1/4)



第18図 古市下遺跡SH001出土遺物②(1/3)



第19図 古市下遺跡SH001出土遺物③(1/3)

範囲は、南北1.2～1.8m、東西2.0～2.5mである。また、土坑近くから台石と思われる大型の石が2個出土した。うち1個は床面に伴う可能性が高い。

出土遺物は土器、土器片加工品、鉄器がある。

土器（第17図）のうち、44、45は二重口縁甕である。44は二重口縁が短く直立気味に立ち上がる。外面には櫛描波状文がみられる。45は口縁部で、二重口縁の立ち上がりが長い。やはり外面には櫛描波状文が施される。46は甕である。肩はあまり張らず。口縁部が短く外方に折れる。47、48は、口縁部が外方に大きく開く器台と思われる。47は端部を上下に拡張し端面に浮文を付す。48は端部を上方に拡張し、端部外面に櫛描波状文を施す。

土器片加工品（第18図）は1点出土している。49は打ち欠きにより円形に加工されている。端面は粗く磨られている。鉄器（第19図）は50、51の2点が出土している。50は刀子、51は鎌あるいは刀子と思われる。

以上の出土遺物から、本竪穴は弥生時代後期終末に位置づけられる。

SH003

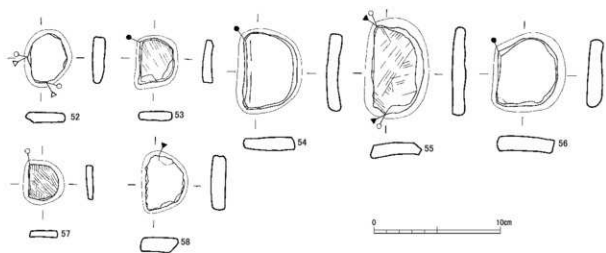
SH003（第20図）は調査区の北端に位置する。北側と西側が調査区外に及び、全容は不明である。SH001と重複しており、本竪穴の南がSH001により切られる。竪穴の全容は分からないが、SH001に比べるとかなり大規模であることが推定される。

竪穴の平面形は方形基調と思われるが、大半が調査区に及ぶため、方形になるのか長方形になるのかは不明である。残存する竪穴の辺の長さは、南東コーナー部が残っていないので推定で、南北約6.0m、東西6.2mである。主柱穴の配置は、検出した柱穴から、4本柱に加えて中央に1本配される形態と考えられる。柱間の長さは、4本柱の東西が約2.6m、南北が約3.9mである。4本柱主柱穴が南北方向に長い長方形に配置されることから、本竪穴の平面形も長方形である可能性が高い。中央主柱穴の南側床面には炭化物付着が顕著な範囲が認められる。さらにこの南側には、径約2.1mの円形を呈する皿状の浅い土坑がみられる。また、南壁沿いの中央付近と思われる場所にも土坑がある。このほか床面ちかくの数ヶ所において、焼土や炭化材が検出されている。

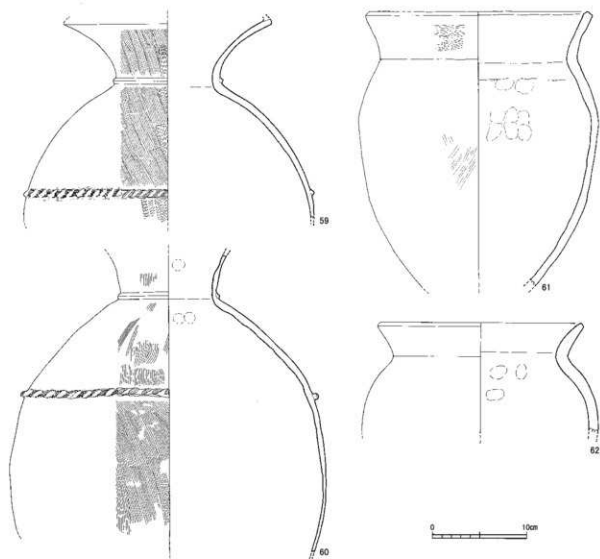
出土遺物は土器、土器片加工品、鉄器がある。



第20図 古市下遺跡SH003(1/60)



第21図 古市下遺跡SH003出土遺物①(1/3)



第22図 古市下遺跡SH003出土遺物②(1/4)



第23図 古市下遺跡SH003出土遺物③(1/3)

土器（第22図）のうち、59、60は壺である。59は二重口縁壺で口縁部を欠く。体部中程にやや巾狭の突帯を貼り付け、木口により刻みを施す。頸部は大きく外に開き、下部に断面三角形に突帯を1条付す。60は59と同様な突帯を体部中程よりやや上に付す。頸部はほぼ直立し、頸部下に断面三角形の突帯が1条みられる。61、62は粗製甕である。61は体部最大径と口径がほぼ同じで、口縁部は頸部から緩やかに立ち上がる。62は肩部がやや張り、口縁部は頸部からくの字状に外方へ折れる。

土器片加工品（第21図）は7点みられる。52が円形基調で、他は半円形を呈する。これらのうち、53、54、56の端面は顕著に磨られ、52、57は端面が粗く磨られる。また、55は直線部が打ち欠きのみで他は粗い磨りが施される。58は打ち欠きのみである。

鉄製品（第23図）は2点出土している。63は鉄鏃あるいは刀子と思われる。64は刀子あるいは鎌の一部と考えられる。

以上の出土遺物から、本竪穴の時期は弥生時代後期後葉～終末に位置づけられる。

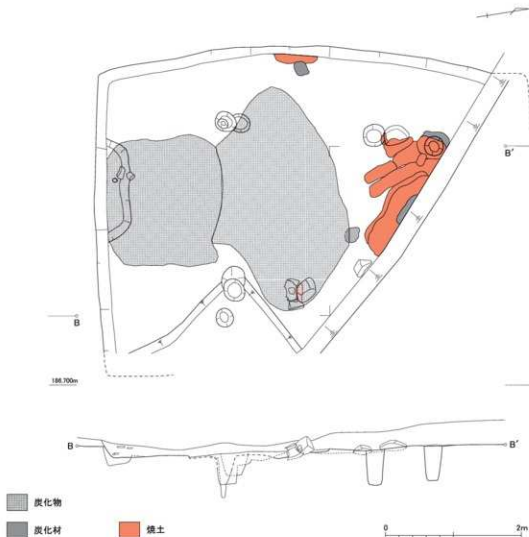
SH002

SH002 (第24図) はⅡ区の北端で検出された。竪穴の北側が調査区外に及び、東側が擾乱により削平されていることから全容は不明である。

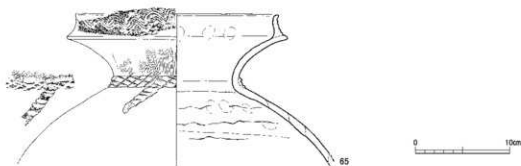
竪穴の平面形は南北に長い長方形を呈すると思われる。その規模は残存長で、西辺約5.8m、南辺約4.0mである。深さは、削平が著しく0.1～0.3mを測るのみである。主柱穴は4本柱であるが、北東の柱は調査区外である。柱穴間の長さは、東西約2.8mを測る。南北については北西の柱穴候補として2箇所の柱穴があるため、約2.2mあるいは約3.1mである。南壁沿いの中央からやや西に寄ったところに土坑がみられる。その規模は、長さ約1.4m、幅0.3mである。また、中央部から南壁にかけての床面には炭化物の付着が顕著に認められるが、明らかに炉跡と推察されるものは検出されなかった。

埋土には焼土や炭化物が多量に含まれる。これらはレンズ状に堆積しており、一定の埋積が行われた後に、火が焚かれたことが分かる。火勢はかなり強かったようで、竪穴周辺の地山の一部が被熱により変色している箇所がみられた。これらは、火災によるものではなく、竪穴廃絶後に意図的に燃やされたものと考えられる。また、南東主柱穴付近の床面には、壺の上半部(第25図65)が置かれており、これも竪穴廃絶に係わる祭祀行為であろう。竪穴からの出土物には土器と土製品がある。

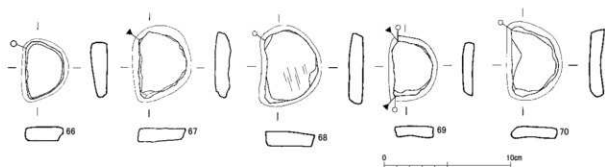
土器は好資料が少なく、図示できるものは1点のみである(第25図)。65は二重口縁壺である。頸部が大きく



第24図 古市下遺跡SH002(1/60)



第25図 古市下遺跡SH002出土遺物①(1/4)



第26図 古市下遺跡SH002出土遺物②(1/3)

外方向に開き、口縁部がやや外反しながら短く立ち上がる。口縁部外面には、柳描波状文が施される。体部は肩部があまり張らない。頸部下にはベルト状の突帯が1条付され、さらに下に垂らすように肩部にかけて突帯を貼り付ける。突帯には格子状の刻みが施される。

土器片加工品(第26図)は5点出土している。形態的には、いずれも半円形を呈する。67、69は打ち欠きのみ、他は端面が軽く磨られている。

以上の出土遺物から、本竪穴の時期は弥生時代後期後葉～終末に位置づけられる。

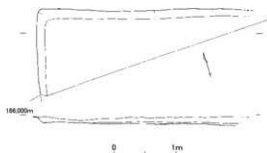
SH004、SH006

SH004(第27図)、SH006(第28図)はSH001とSH002の南側に位置する。竪穴は水田造成のため大半が削平されており、一部が残存するのみである。平面形は方形を呈すると思われるが、両者とも西北コーナーを残すのみで、規模は不明である。両竪穴は並ぶように位置するが、SH004がSH006を切る。主柱穴をはじめとする竪穴内の施設については全く不明である。

また、両竪穴からは若干の土器片が出土したのみで、目立った遺物は出土しなかった。図示できる遺物はなく、時期も不明である。



第27図 古市下遺跡SH004(1/60)

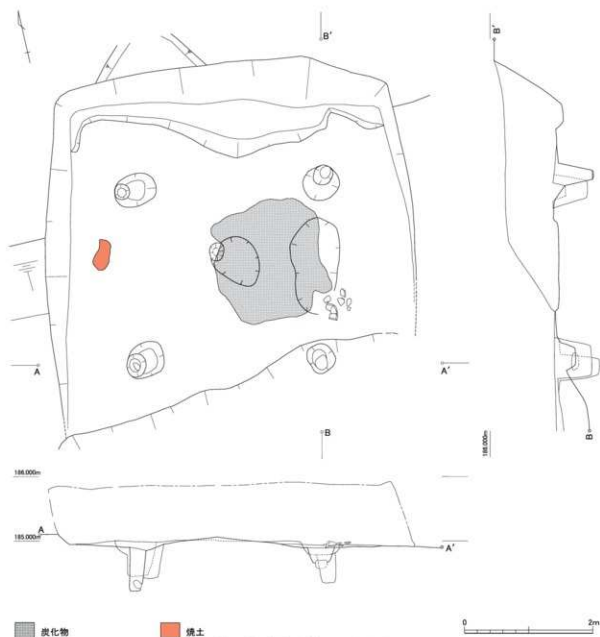


第28図 古市下遺跡SH006(1/60)

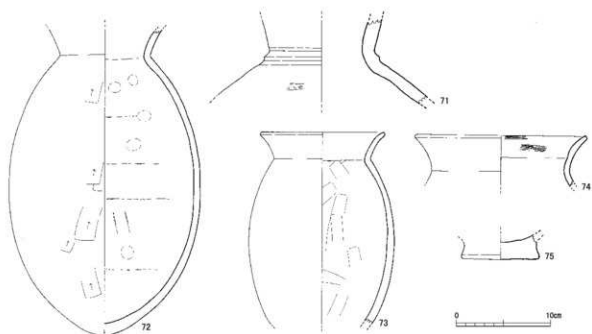
SH005

SH005 (第29図) はSH001の南側に位置する。水田造成のため大きく削平されており、竪穴南端部は残存しない。竪穴の平面形は方形を呈する。規模は東西が約5.7m、南北が残存長で約5.3mである。深さは最深部で約1.0mを測り、削平されていない部分の残存状況は良好である。支柱穴は4本で、柱間の長さは、東西の長さが北側で3.2m、南側で2.9m、南北の長さが東側で2.9m、西側で2.7mである。床面中央には、長径0.8m、短径0.6mの浅い皿状の土坑があるが、焼土等は検出されなかった。また、中央土坑の東側の支柱穴間に長径1.5m、短径0.7mの楕円形の土坑がある。深さは浅く、皿状を呈する。両土坑の周辺の床面には、炭化物の付着が多くみられた。出土遺物は、竪穴の残存状況が良好にもかかわらず、それほど多くなく、床面からの出土もわずかであった。

出土遺物は土器(第30図)のみである。このうち71、72は壺で、いずれも二重口縁を呈するものと思われる。71は頸部から肩部にかけての資料で、頸部下に断面三角形の低い突帯を貼り付ける。72は口縁部を欠く資料で



第29図 古市下遺跡SH005(1/60)



第30図 古市下遺跡SH005出土遺物(1/4)

ある。体部は肩が張らず卵形を呈し、底部は丸底である。頸部は体部から外方向に開く。頸部、体部に突帯は付されない。73、74は甕である。73は肩が張らない長胴形を呈する。口縁部は、頸部から外方に折れ、端部ちかくでやや外反する。74は口縁部資料で、頸部から緩やかに外反しながら口縁にいたる。75は鉢の底部と思われる。円盤状の粘土を貼り付けて底部を形成している。

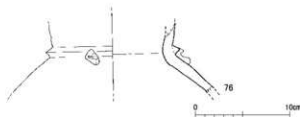
以上の出土遺物から、本堅穴の時期は弥生時代後期末に比定される。

SH015

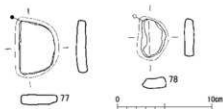
SH015 (第33図) はSH005の南側に位置する。この付近は弥生時代以降の遺構が錯綜しており、遺構のプラン・前後関係を確認するために、5層上面で何回も遺構検出作業を行った。その結果、本堅穴はSH016を切り、SD007により切られることが分かった。

SH015は西側を大きくSD007に切られるが、平面プラン方形を呈するものである。南西コーナー部が残存しないが、その規模を残存する部分で測ると、東西約6.8m、南北約5.8mである。主柱穴については、SD007により切られているため全容は不明であるが、4本柱と思われる。堅穴の残存状態は悪く、壁の立ち上がりは0.1m以下である。そのためか、遺物の出土も極めて少数であった。

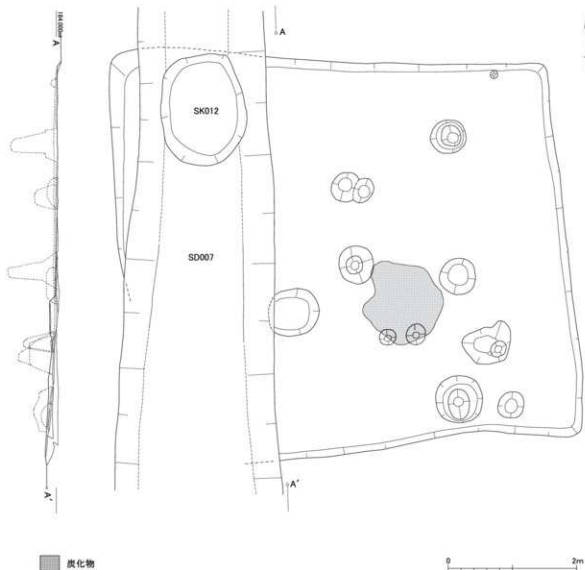
出土遺物は土器(第31図)と土器片加工品(第32図)である。76は二重口縁壺の肩部から頸部にかけての資料である。肩はあまり張らず、頸部が直立気味に立ち上がる。頸部下に断面三角形の突帯を1条付し、浮文が配される。77、78は土器片加工品である。両者とも半円形を呈する。77は端面全周が顕著に磨られているが、78



第31図 古市下遺跡SH015出土遺物①(1/4)



第32図 古市下遺跡SH015出土遺物②(1/3)



第33図 古市下遺跡SH015(1/60)

の端面は粗く磨られるのみである。

以上の出土遺物から、本竪穴の時期は弥生時代後期後葉に比定される。

SH016

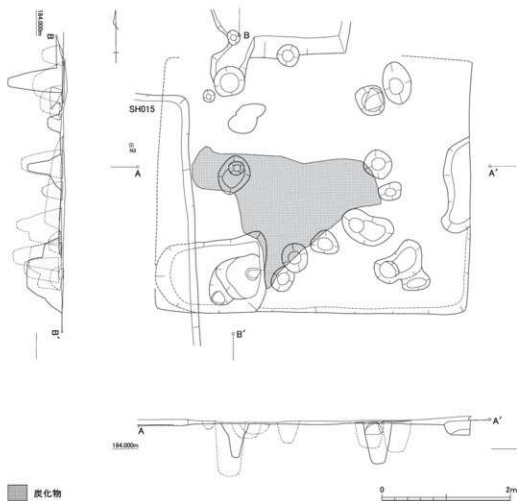
SH016 (第34図) はSH015の東側に位置し、一部重複する。削平が著しいため、両者の前後関係については判別が難しかったが、SH016がSH015に切られる。

竪穴は方形を呈すると思われるが、南東コーナーが残存するのみである。その規模は東西約4.8m、南北約4.0m程と思われる。主柱穴は2本で、東西方向に配される。柱間の長さは約2.2mである。また、東壁中央付近と南西コーナー部に土坑がみられる。竪穴からの出土遺物は極めて少なかった。

出土遺物は土器 (第35図) と鉄器 (第36図) がある。79は壺の底部ちかくである。丸底気味になるとと思われる。80は器種不明の鉄器である。

以上の出土遺物から、本竪穴の時期は弥生時代後期後葉と思われる。

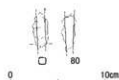
第2節 遺構と遺物



第34図 古市下遺跡SH016(1/60)



第35図 古市下遺跡SH016出土遺物①(1/4)

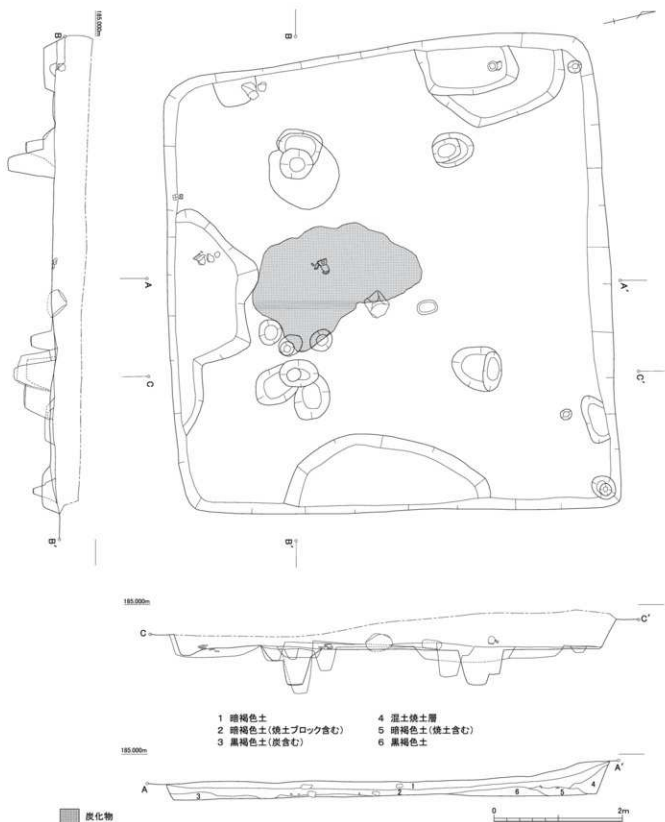


第36図 古市下遺跡SH016出土遺物②(1/3)

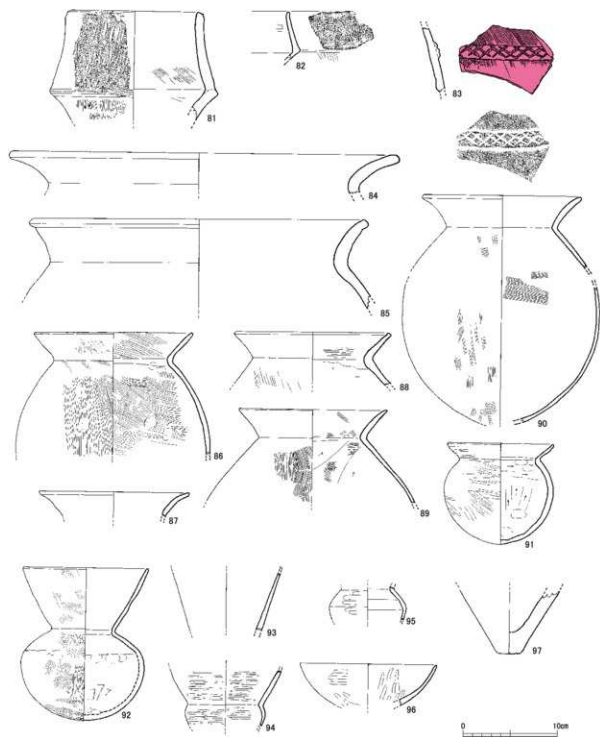
SH017

SH017(第37図)は、SH016の東側、SH004、SH006の南側に位置する。SH019と重複しており、それを切っている。また、位置的にみるとSH004、SH006とも重複関係にあったと思われるが、前述したようにSH004、SH006が大きく削平されており、本竪穴との関係は不明である。

本竪穴は方形を呈し、その規模は東西約6.7~7.3m、南北約6.7mで、今回検出された竪穴のなかでは最大規模である。深さは0.2~0.5mで、竪穴の南半については残存状況がよくない。主柱穴は4本柱で、柱間の長さは、東西が約3.2と3.4m、南北が約2.3mと3.0mである。土坑は、東壁と南壁の中央及び北西コーナー部付近にみられる。床面中央付近には台石と思われるものが残されている。中央付近の床面は顕著に踏み固められており、中



第 37 図 古市下遺跡 SH017 (1/60)

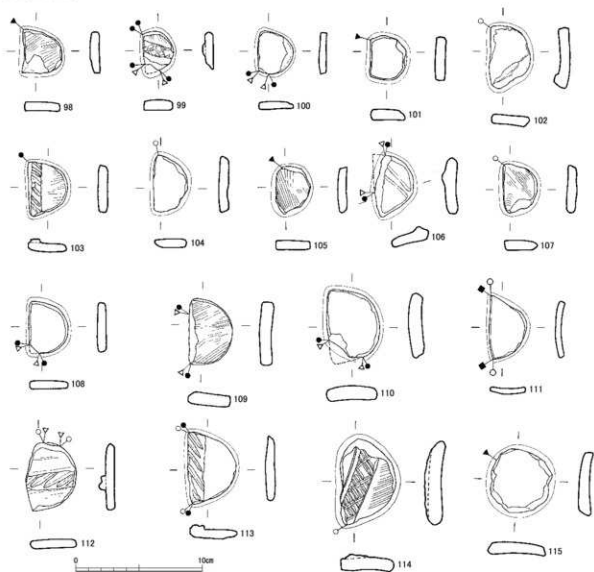


第38圖 古市下遺跡SH017出土遺物①(1/4)

尖付近から南側の床面には炭化物の付着が顕著に認められた。

出土遺物には土器と土器片加工品がある。

土器（第38図）のうち、81～83は壺である。81、82は二重口縁壺の口縁部で、81は直立気味の立ち上り部が著しく発達したもので、外面には粗い波状文がみられる。83は体部に付されたベルト状の突帯で、X字状の連続文が施される。84～90は甕である。84、85は在地系のもと思われ、器壁がやや厚手である。84の口縁部が大きく外方に折れるのに対し、85は緩やかに外方に折れる。86～90は器壁の薄い一群である。86は体部下半を欠くが球形にちかい形態を呈すると思われる。内外面ともハケ目調整が施される。87は口縁部資料で、頸部から外湾しながら折れる。88、89は体部内面にヘラ削りがみられるもので、いずれも頸部下まで施される。体部は肩がほとんど張らず、下膨れ的な球状を呈すると思われる。口縁端部は88がやや角ばるのに対し、89は尖り気味である。90は全形が分かる資料である。体部は肩があまり張らず球形を呈する。口縁部は頸部から外方にくの字状に折れ、端部付近でやや外反する。体部は内外面ともハケ目調整である。91、95は鉢である。91は体部は球形を呈し、やや内碗気味の口縁部が外方に折れる。体部内面にはヘラ削りがみられ、外面にはヘラ磨きが施される。95は小型品で、口縁部と底部を欠く。体部は球状を呈し、口縁部が短くくの字状に折れる形態をなすと思われる。



第39図 古市下遺跡SH017出土遺物②(1/3)

第2節 遺構と遺物

92、93は長頸壺である。92は球状の体部を有し、頸部は外方に大きく折れそのまま口縁部にいたる。体部最大径と口径がほぼ同じである。93は頸部の資料で、口縁端部に欠く。口縁に向かい開きながら伸びるが、その開き方は92ほど顕著ではない。94は小型丸底壺である。内外面ともヘラ磨きにより仕上げられている。96は浅い椀状を呈する鉢である。内外面にヘラ磨きが施される。97は底部資料である。在地系甕と思われる、尖底気味であるがわずかに平底が残る。

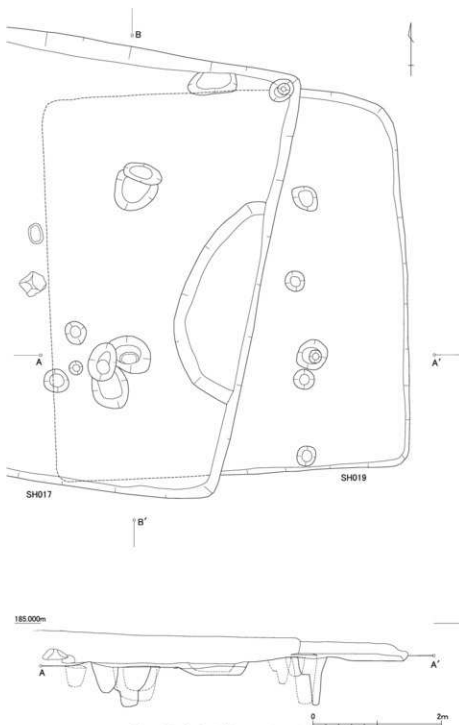
土器片加工品(第39図)は18点出土した。円形は115のみで、他は半円形を呈する。これらのうち、98、101、105、115は打ち欠きのみで端面は全く磨られていない。また、102、104、107、111、112、114は粗い磨りが認められる。111については直線部は土器本来の面が残る。99、100、103、106、108、109、110、113は一部欠損するものもあるが、端面が顕著に磨られている。

以上の出土遺物のうち一部の混入品を除けば、本竪穴の時期は、古墳時代前期に位置づけられる。

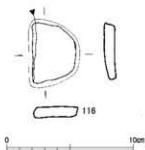
SH019

SH019(第40図)はSH017の東側に位置し、SH017に切られる。

竪穴の平面形は方形を呈すると思われる。半分以上が残存せず、東辺のみで規模を測ることができる。東辺の長さは、約5.5mである。主柱穴は4本である。東側の2本は残った竪穴内で確認された。西側の2本のうち、1本はSH017の貼り床の下で検出したが、北西柱穴については貼り床を剥ぎ精査したが確認することができなかった。おそらく、SH017北東主柱穴と同位置にあったと推察される。柱間の長さは、南北が約2.5東西が約2.7~2.9mである。壁は



第40図 古市下遺跡SH019(1/60)



第41図
古市下遺跡SH019出土遺物(1/3)

0.1~0.15mしか残存せず、全体として削平が著しい。土坑等の床面施設はみられない。本地域の堅穴建物内では、東側あるいは南側の壁沿い中央付近で土坑がしばしば検出される。本遺跡の他の堅穴でもこのような土坑が確認されている。本堅穴についても、SH017によって切られた南壁沿いに存在した可能性が考えられる。

堅穴からの出土遺物は極めて少なく、少量の土器片等が出土したのみである。図示できたのは土器片加工品(第41図)1点のみである。116は半円形を呈する。端面は打ち欠きのみで、全く磨られていない。

時期の決定ができる遺物がないため、本堅穴の時期は不明である。

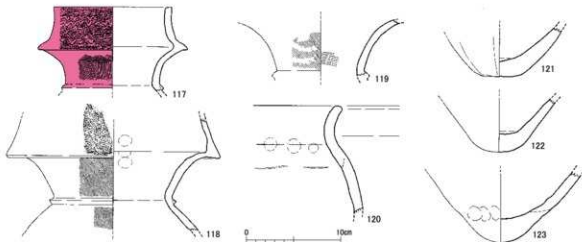
SH008

SH008(第43図)は、SH016の南側に位置する。また、本堅穴の南東側にSH031が、南西側にSH011がある。SH031とはわずかに重複関係にあり、SH031に切られる。SH011とは接するように検出された。本来は微妙な重複関係にあったものと思われる。

本堅穴は、遺構検出の際に遺構ラインの見極めが特に難しく何度も検出作業を行った。検出面では、5層と堅穴埋土との差が捉え難く、サブトレを設定するなどして検出を試みた。その結果、堅穴の平面形は南北に長い長方形を呈することが確認できた。その規模は、南北長が東辺で約5.0m、西辺で約5.6m、東西長が南辺で約4.6m、北辺で約4.4mである。深さは北壁が約0.4m、南壁が約0.1mで、南ほど削平が著しい。主柱穴は4本である。柱穴間の長さは、南北方向が東側3.6m、西側3.5m、東西方向が南側2.5m、北側2.9mである。堅穴規模に比し主柱穴間が長く、各々の主柱穴が堅穴のコーナーに近い。また、東西方向の両主柱穴間と南北方向の西側主柱穴には、主柱穴ラインからやや内側に入った位置に各々柱穴がみられる。これらは主柱穴を補助する役割を有すると考えられる。保持柱穴のない堅穴東側には、入り口施設が設置されていた可能性がある。中央から南西に寄った補助柱穴間には、長径0.75m、短径0.55mの楕円形を呈する土坑がみられる。土坑は皿状を呈する浅いもので、炉跡であると思われる。炉跡及び周辺の床面には炭化物の付着が顕著にみられた。土坑については、東側あるいは南側の壁沿い中央付近から検出される例がしばしばみられるため、本堅穴でも意識的に精査したが確認することができなかった。堅穴内からの遺物の大半は浮いた状態での出土であったが、炉跡周辺と東北主柱穴付近の床面から土器片がまとまって検出された。

出土遺物には、土器、土器片加工品、石器がある。

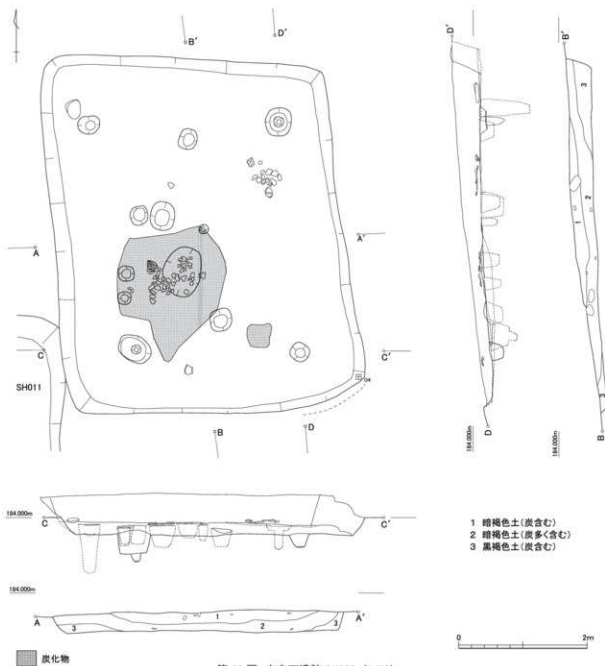
土器(第42図)は壺と甕がある。壺のうち117~119は二重口縁壺の頸部から口縁部にかけての資料である。



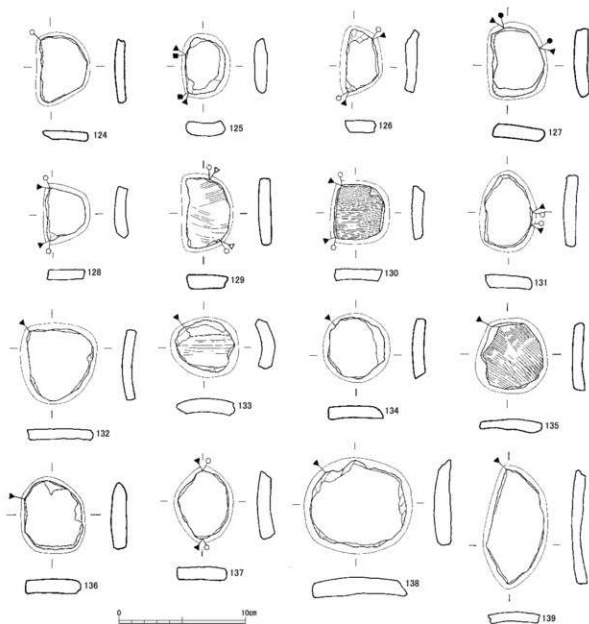
第42図 古市下遺跡SH008出土遺物①(1/4)

第2節 遺構と遺物

117は頸部下に断面三角形の突帯が付される。頸部は直立気味に立ち上がった後に大きく外反し、口縁部が立ち上がる。口縁部は外反気味に直立し、外面に櫛描波状文が2段施される。頸部と口縁立ち上がり部がほぼ同じ長さである。頸部外面にはハケ目がみられる。118は頸部下に断面三角形の突帯が1条付される。肩部は張らず、卵球形の体部を呈すると思われる。頸部はくの字状に外方に折れて立ち上がる。二重口縁部は内傾し直線的に端部にいたるものと思われる。口縁部外面には、2段の櫛描波状文が施文されている。体部と頸部外面にはハケ目調整が施される。119は頸部の資料である。頸部下には、断面三角形の突帯を付した痕跡がわずかに残る。頸部は外方に大きく外反して立ち上がる。頸部内外面にはハケ目がみられる。120は甕である。在地系のもので、器壁は厚手である。肩部はほとんど張らず長胴の体部へ続く。頸部は明確ではなく、肩部から緩やかにくびれた後



第43図 古市下遺跡 SH008 (1/60)



第44図 古市下遺跡SH008出土遺物②(1/3)

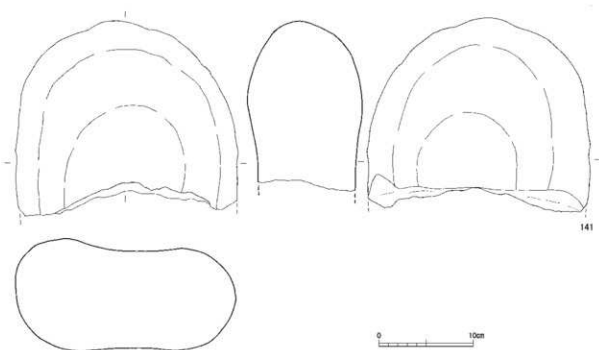
に口縁部にいたる。121～123は底部である。121はわずかに平底が残る。122、123は底部の器壁が厚く、レンズ底状を呈する。

土器片加工品(第44図)は16点が出土した。形態的には半円形のもの(124～131、139)と円形基調のもの(132～138)がみられる。端面の状況を見ると、打ち欠きのみのもの(132～136、138、139)、打ち欠きだけの部分と磨っている部分があるもの(124、126～128、130、131、137)、端面全部が磨られているもの(124、129)、一部に土器本来の面を残し残りを磨っているもの(125)がある。

石器(第45、46図)には磨製石鏃と石皿である。140は磨製石鏃である。先端部を欠くが、柳葉形を呈する。基部はわずかに凹む。現存長2.5cm、最大幅1.2cm、厚さ0.2cm、重さ0.7gである。141は石皿である。欠損品であるが、現存長約18.0cm、



第45図 古市下遺跡SH008出土遺物③(1/2)



第46図 古市下遺跡SH008出土遺物④(1/4)

最大幅約23.0cm、最大厚13.8cmを測る。上面は緩やかに窪んでいる。

以上の出土遺物から、本竪穴の時期は弥生時代後期後葉に比定される。

SH018

SH018 (第47図)はⅡ区調査区の南東端に位置する。南西コーナー部分がSH031と重複しており、本竪穴がSH031を切る。

本竪穴は方形を呈する。その規模は、南北方向が東側5.0m、西側5.1m、東西方向が南側4.8m、北側5.3mである。壁の立ち上がりは北壁が約0.5m、南壁が約0.2mで、南側の削平が著しい。主柱穴は4本である。主柱穴間の長さは、南北方向の東側が1.9m、西側が1.8m、東西方向が南側2.4m、北側2.3mである。竪穴規模に比し主柱穴間が近い。竪穴が正方形にちかいかにも係わらず、主柱穴は東西方向に長い長方形に配される。床面中央には、円形の土坑がみられる。規模は約0.45mで、浅く皿状を呈する。本土坑は炉跡と思われる、本土坑から南側の主柱穴間の床面には炭化物が顕著にみられた。また、南壁沿いの中央付近には土坑がある。規模は南北約0.7m、東西約1.25mである。

竪穴内からは比較的多くの遺物が出土した。特に南西隅にちかい部分において、まとまってみられた。いずれも床面から約0.2m程浮いており、竪穴が一定程度埋まった後に一括して廃棄されたものと思われる。

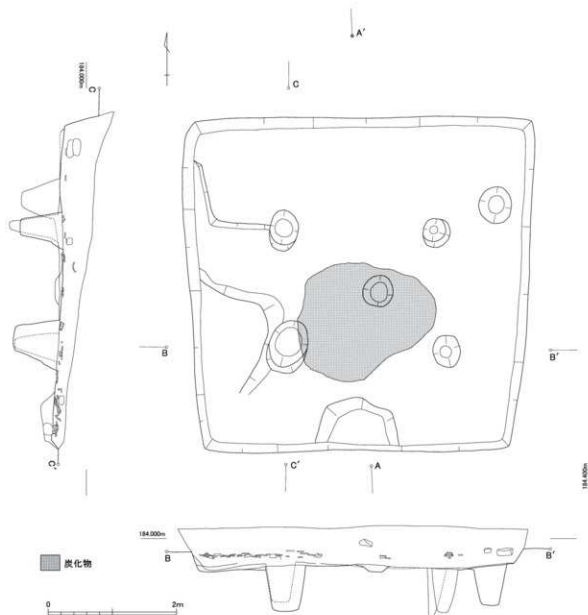
出土遺物には土器と土器片加工品がある。

土器(第48、49図)は壺、甕、高坏がある。142～145は二重口縁壺である。142は底部を欠くが、全形を知ることができる資料である。体部が卵球形を呈するもので、底部は丸底になると推定される。体部中程よりやや上部にベルト状の突帯を1条貼り付ける。突帯には木口により刻みがX字状の刻みが施される。頸部下にもベルト状突帯が1条みられる。一部は短く垂下させ貼り付けられており、あたかもリボンを巻いて垂らしたような状況を示す。頸部の突帯にも、体部と同様木口による刻みが施される。頸部は大きく外反し、口縁部が直立のち外反して立ち上がる。口縁部外面には櫛描波状文が2段にわたり施文される。143は体部下半を欠く資料である。体部は142に比べ球形が協調される。頸部下に断面三角形の突帯が1条付されるが、体部には突帯はみられない。

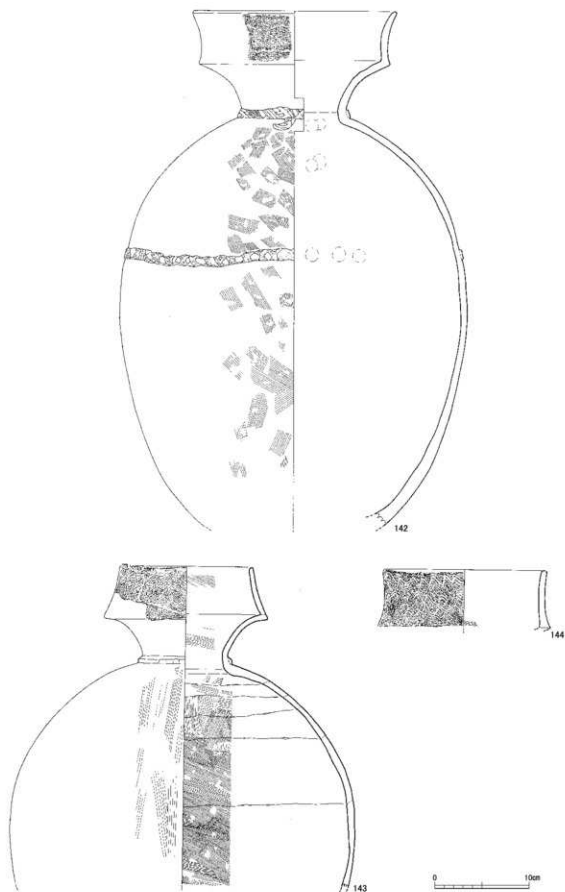
頸部が外反して立ち上がり、口縁がくの字状に内傾する。口縁部外面には櫛描波状文が2段施文される。144は口縁部である。発達した口縁部がほぼ直立し、外面に櫛描波状文が施される。145は体部資料であるが、下半を欠く。肩部はあまり張らず、卵球形を呈する。体部中程より上部にベルト状突帯が1条付される。突帯には格子目状の刻みが連続して施されている。頸部下にも突帯貼り付けの痕跡がみられる。146、147は甕である。146は大型品である。肩部はあまり張らず、最大径は体部中程よりやや上にある。頸部は比較的緩やかにくびれ、口縁部が外方に折れる。147は体部下半を欠くが、体部は球状を呈するものと思われる。最大径は、体部中程にある。口縁部は頸部から強く外方に折れ、外反しながら口縁にいたる。内外面ともハケ目調整がなされる。148、149は高坏である。148の坏部は平坦な内定面から斜方向に直線的に口縁部にいたる。脚は円筒状の脚部上半から緩やかに底部にいたる。149は脚部上半で、下に向かい開く。150、151は底部で両者とも丸底を呈する。

土器片加工品(第50図)は3点出土した。半円形のもの(152、154)と円形基調のもの(153)がある。端部はいずれも打ち欠きのみで、磨られているものはない。

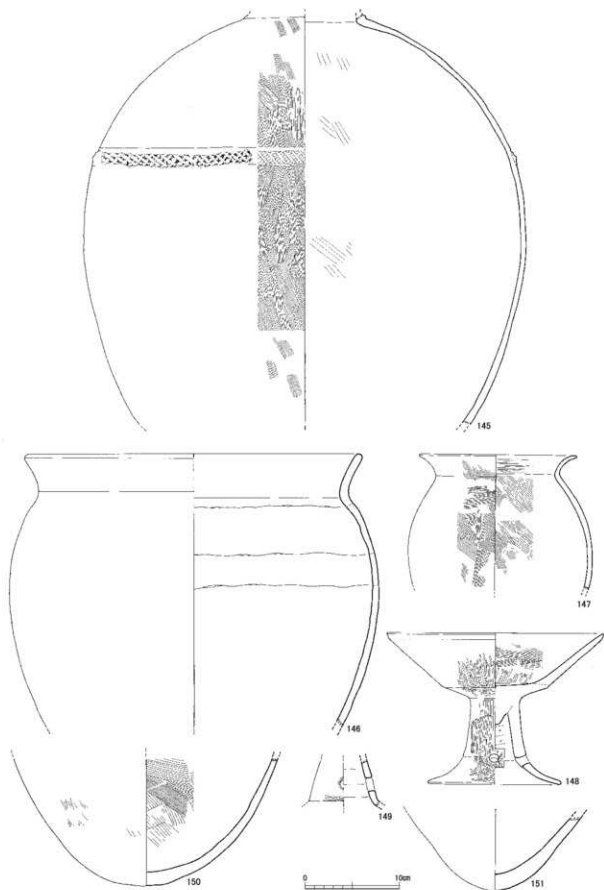
以上の出土遺物から、本竪穴の時期は古墳時代前期に位置づけられる。



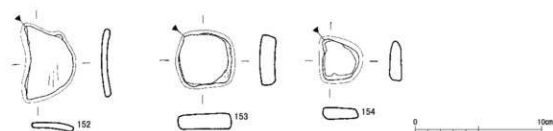
第47図 古市下遺跡 SH018 (1/60)



第48圖 古市下遺跡SH018出土遺物①(1/4)



第49圖 古市下遺跡SH018出土遺物②(1/4)

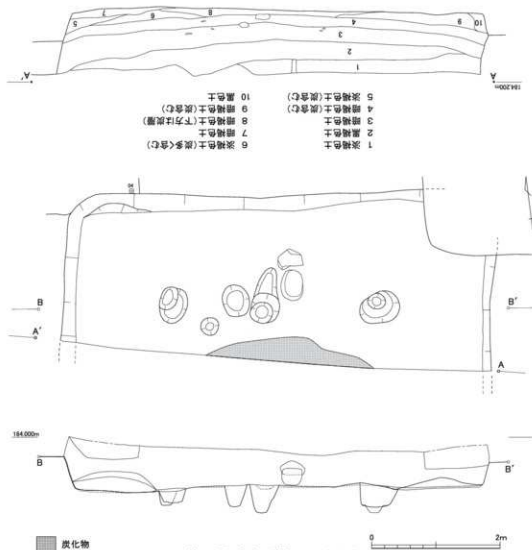


第50図 古市下遺跡SH018出土遺物③(1/3)

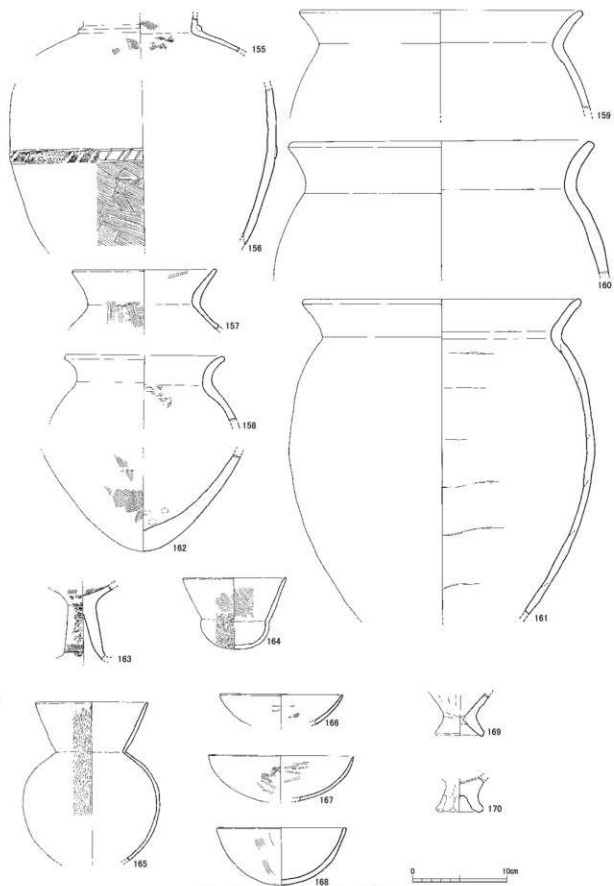
SH031

SH031 (第51図) は、SH008とSH018の南側に位置する。竪穴の大半が調査区外に及び、調査されたのは竪穴全体の1/3程である。SH031はSH008及びSH018と各々わずかに重複しており、SH008を切り、SH018に切られる。

本竪穴の平面形は方形を呈すると思われる。大半が調査区外のため全体の規模は不明だが、残存する北辺の長さは約6.5mを測る。深さは0.3～0.7mで、竪穴の残存状況は比較的良好である。主柱穴に係わると思われる柱



第51図 古市下遺跡SH031(1/60)



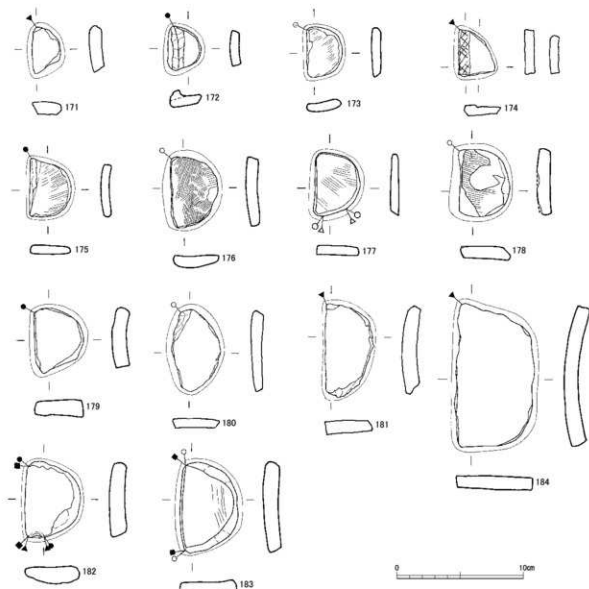
第52図 古市下遺跡SH031出土遺物①(1/4)

穴は3か所で見られる。東西に直線的に並ぶもので、いずれも同様な深さである。よって、本竪穴の主柱穴は6本ないしは4本と思われる。4本主柱穴の場合、3本のうち真ん中の柱穴は、補助的な役割を有するものであろう。柱穴間の長さは、東から約1.7m、約1.5mである。床面中央付近は踏み固められており、炭化物も顕著に散布する。

竪穴内からは比較的多くの遺物がまとまって出土した。これらの大半は床面より浮いた状態で検出されており、床面に伴うものはほとんどなかった。

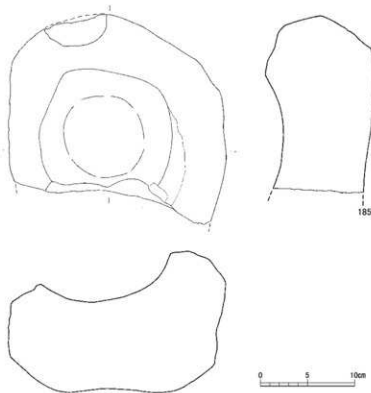
出土遺物には、土器、土器片加工品、石器がみられる。

土器（第52図）には、壺、甕、高坏、小形丸底壺、長頸壺、椀、製塩土器がみられる。壺のうち、155は二重口縁壺の肩部から頸部にかけての資料である。頸部下に断面三角形の突帯が1条付される。156は二重口縁壺の体部である。中程にベルト上の突帯が1条貼り付けられる。突帯には刻みが施される。157、158は小型の甕である。157は口縁部がくの字状に折れるもので、体部外面にはハゲ目がみられる。158は口縁部が頸部から緩やかに外反する。159～161が大型の粗製甕である。162は底部で丸底を呈する。163は高坏の脚である。筒状の上半分から椀部に向かい大きく開くものである。164は小型丸底壺である。扁球形の体部外面はヘラ磨きが施され、長く伸びる口縁部内外面にはハゲ目調整がみられる。165は長頸壺である。球形の体部から頸部が口縁部に向い直線



第53図 古市下遺跡SH031出土遺物③(1/3)

的に伸びる。外面には丁寧なヘラ磨きが施される。166～168は碗である。166、167は内外面にヘラ磨きが残る。168の外面にはハケ目がみられる。169、170は製塩土器である。169は脚部で、復元底径5.2cmである。坏部から脚部にかけて連続成形されており、円盤充填を行うことにより底部が形作られていたと思われるが、円盤充填部がはずれている。脚部の高さは1.3cmで、直線的にハの字状に開く。坏部外面には平行タタキ痕がわずかに残る。脚部は指オサエの後にナデによる成形が行われている。土器の表面は、被熱により明橙褐色を呈する。胎土には石英粒の混入がみられることから、海部地域からの搬入品と思われる。170も脚部で、底径5.0cmである。坏部から脚部にかけての連続成形で、円盤充填がなされていると推定される。脚部の高さは1.7cmで、外方向にやや



第54図 古市下遺跡SH031出土遺物④(1/4)

開きながら底部にいたる。脚部内外面には指オサエ痕が顕著に残る。土器の表面は被熱により淡褐色を呈し、坏部内面も被熱による剥離が観察される。胎土には169と同様に石英粒が顕著に含まれる。

土器片加工品(第53図)は14点が出土しており、すべてが半円形を呈する。打ち欠きのみで端部が磨られないもの(171、174、181、184)、端部が粗く磨られるもの(173、176～178、180)、端部が顕著に磨られるもの(172、175、179)、土器本来の端面が一部残り他を磨るもの(182、183)などがみられる。

石器(第54図)は185の石皿である。欠損品であるが、使用により上面が大きく凹む。

以上の出土遺物から、本竪穴の時期は古墳時代前期に比定される。

SH011

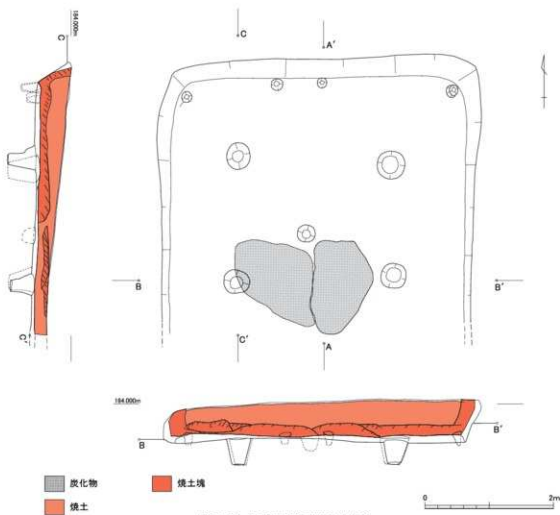
SH011(第55、57図)はⅡ区調査区の南端に位置し、一部は調査区外に及ぶ。本竪穴の北西側にSH008が、南西側にSH025がある。SH025とは重複関係にあり、本竪穴が切る。

竪穴は方形を呈する。全形は不明だが、その規模は東西約4.8～5.0m、南北が残存長で約4.1mである。主柱穴は4本で、柱穴間の長さは、南北が東側約1.7m、西側約1.9m、東西が南側約2.4m、北側約2.4mである。床面中央付近には径約0.3m、深さ約0.2mの柱穴状のものがある。炉の可能性が考えられる。床面の中央南側には炭化物の散布が顕著である。また、北側壁際沿いには、径約0.2mの柱穴が並ぶ。

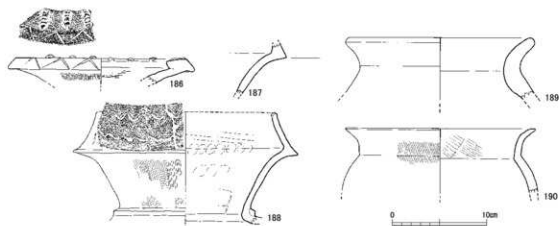
竪穴埋土は、床面から0.1～0.2m(E～G層)埋まったのち、焼土や炭化物を多量に含む層(D層)が堆積する。D層中の焼土のなかには被熱により硬化した箇所もみられた。

出土遺物には土器(第56図)がある。186～188は二重口縁壺である。186は肥厚した口縁外側に山形の沈線が施され、上面に浮文が付される。187は口縁部が内傾して立ち上がる。188は頸部下に断面三角形の突帯が1条付される。頸部は外傾し、口縁部が内傾し立ち上がる。外面には柳指波状文が2段にわたり施文される。189、

第2節 遺構と遺物



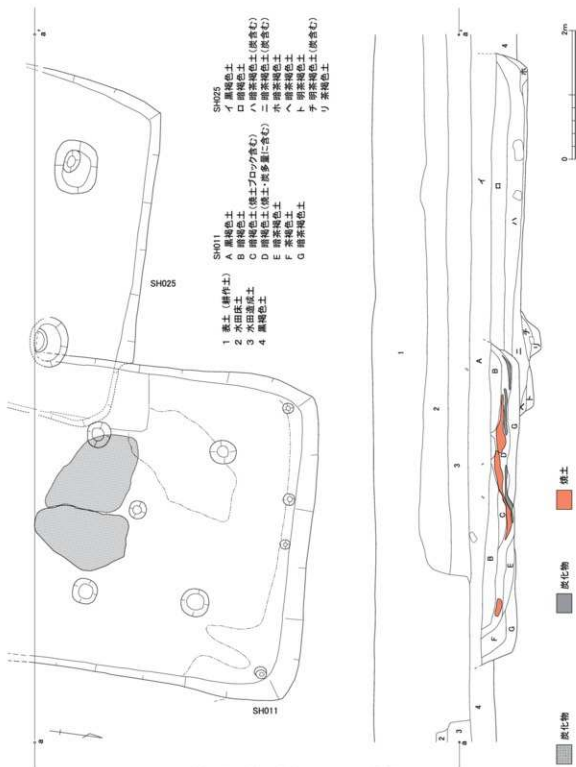
第55図 古市下遺跡 SH011(1/60)



第56図 古市下遺跡SH011出土遺物(1/4)

190は甕である。189は粗製甕で、器壁が厚い。頸部のくびれはあまりシャープでなく、口縁はくの字状に外方に折れる。190の肩はほとんど張らず、口縁部は頸部から一度直立気味に立ちあがった後、外方に折れる。内外面にハケ目調整がみられる。

以上の出土遺物から本壱穴の時期は弥生時代後期後葉～終末に比定される。

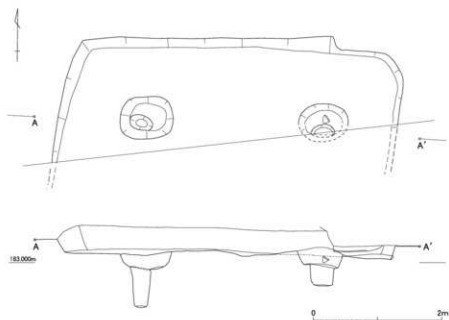


第 57 図 古市下遺跡SH011・SH025土層図

SH025

SH025 (第57、58図)はSH011に切られる。大半が調査区外に及ぶが、方形を呈する。竪穴の規模は、東西約5.1mを測り、深さ約0.3mである。主柱穴は4本と思われ、柱穴間の長さは約2.8mである。竪穴からの出土遺物は少なく、土器片がわずかに出土したのみである。

図示できる遺物はなく、竪穴の時期も不明である。



第58図 古市下遺跡 SH025 (1/60)

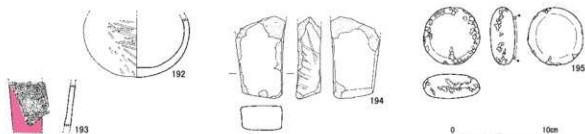
(2) その他の弥生・古墳時代遺物

中世遺構混入品や遺構検出作業中に出土したものを紹介する(第59、60図)。

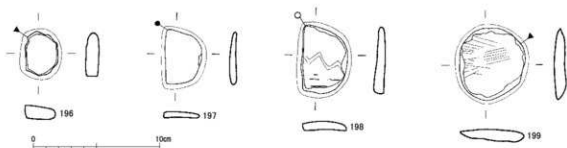
192は長頸壺の体部である。球形を呈し、外面にヘラ磨きが施される。193は長頸壺の頸部と思われる。外面には横方向の細比線がみられ、赤色顔料が塗布される。以上は、いずれも古墳時代前期のものであろう。

194は砥石である。195は磨石である。片面に磨った痕跡がみられ、縁辺部には敲打痕が残る。

196～199は土器片加工品である。形態は、196～198が半円形を、199が円形を呈する。また、196と199は打ち欠きのみ、198は端面も粗い磨りが、197は端面に顕著な磨りがみられる。



第59図 古市下遺跡その他の弥生時代遺物①(1/4)



第60図 古市下遺跡その他の弥生時代遺物②(1/3)

2 古代

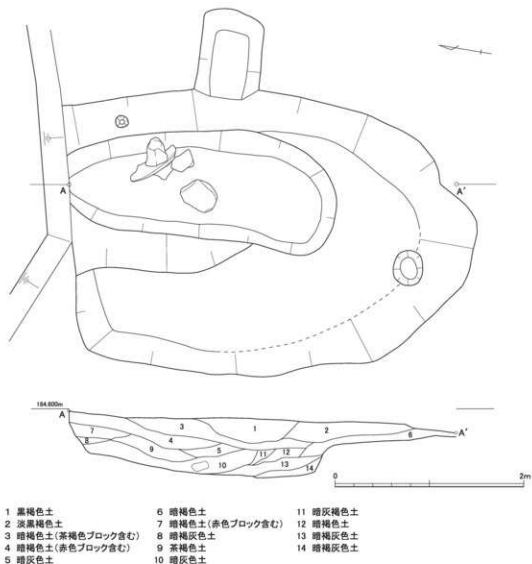
Ⅱ区の西側隣接地では、昭和63年度の圃場整備事業に伴う調査により古代の遺構・遺物が確認されている(第62～64図)。そのため、今回の調査でも古代の遺構が検出されることが予想された。しかし、表土や水田造成土中あるいは遺構検出の際に古代土器が出土したのみで、確実に古代に位置づけられる遺構はⅡ区のSK009のみであった。調査区内から出土した土器は一部を除き大半が細片で、その出土はⅡ区の北西部に集中していた。本来、Ⅱ区の北西部から調査区西側にかけて古代の遺構が存在していたと思われる。

(1) 土坑

SK009

SK009(第61図)はⅡ区に位置する。平面形は南北方向に長軸をもつ楕円形基調を呈し、北側が一部調査区外に及ぶ。その規模は、南北が現存長で約4.2m、東西が約3.0m、深さが約0.6mである。二段掘り状を呈し、底面は比較的平坦である。

土坑内からは大型の礫などのほかに土器片も出土した。土器片は全てが古代に位置づけられるものと思われるが、細片のため図示することはできなかった。



第61図 古市下遺跡SK009(1/40)

3 中世

中世の遺構・遺物は、Ⅰ区とⅡ区から確認された。

Ⅰ区では、土坑、柱穴などの遺構が密集しており、掘立柱建物跡も7棟が復元されている。また、土器などの遺物もⅡ区に比べると圧倒的に多く、中世における本遺跡の中心をなすものと考えられる。

一方、Ⅱ区からは溝、土坑、井戸などが検出された。しかし、遺構数は少なく柱穴も散発的で、掘立柱建物跡は復元されていない。溝Ⅰの西側は遺構が全く検出されていない。遺物についても、その量は少なかった。

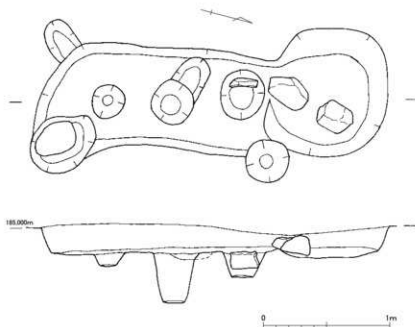
(1) 土坑

SK150

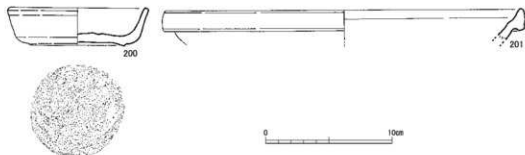
SK150 (第65図) は、Ⅰ区の中央からやや東によった位置にある。平面的には、SB502、SB504と重複する位置にある。土坑は南北に長軸をもつ。径約1.0mの円形の土坑と、長さ約2.0mの土坑が重複している可能性が高いが、その前後関係は不明である。

出土遺物 (第66図) は少ない。200は土師質土器杯である。胎土に金ウンモを含むもので、口径11.2cmを測る。底部は糸切りである。体部は下半が丸みをもち、直立気味に口縁部にいたる。201は東播系のこね鉢である。口縁部が上下に肥厚する。復元口径28.0cmである。

本土坑に時期は、14世紀後半に位置づけられよう。



第65図 古市遺跡SK150(1/30)



第66図 古市下遺跡SK150出土遺物(1/3)

SK087

SK087 (第67図) はSK150の西側に位置する。SK176と重複関係にあり、SK176から切られる。また、平面的にSB504とも重複するが、建物を構成する柱穴と直接切り合い関係にないで、その前後関係は不明である。

第2節 遺構と遺物

土坑は楕円形を呈すると思われるが、土坑4や柱穴に切られているため、全容は不明である。その規模は、長径が残存長で約1.1m、短径約0.9mである。深さは約0.2mで、床面は比較的平坦である。土坑内からは常滑焼甕の破片などが重なるようにして出土した。これらは一括して廃棄されたものと思われる。

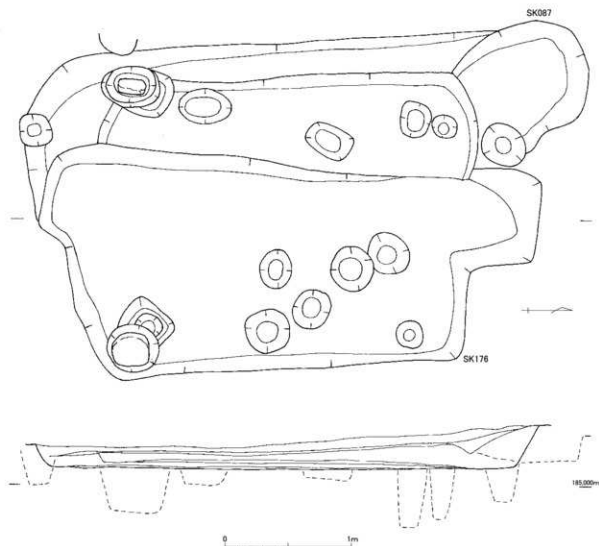
出土遺物（第68図）には吉備系土師器、常滑焼、瓦質土器などがある。

202は吉備系土師器である。口径10.8cm、底径4.8cmを測るもので、体部が緩やかに内湾し口縁部にいたる。高台は断面三角形を呈する。203、204は常滑焼の甕である。203は体部上半の資料で、肩部の張りが強調される。大型品で、胴部最大径は77.2cmを測る。204は口縁部資料である。内傾する頸部が外反し口縁にいたる。口縁部は上下の拡張が認められるが、それほど顕著ではない。205は瓦質土器鉢で、内面にハケ目がみられる。206は磨石で、弥生・古墳時代遺物の混入品である可能性がある。

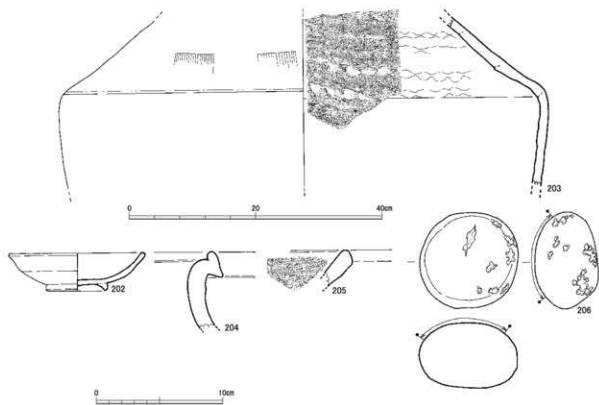
以上から、本土坑の時期は14世紀前半に比定される。

SK176

SK176（第67図）は南北に長い長方形基調を呈する。その規模は、南北約4.0m、東西約2.5mである。SB504を構成する柱穴と重複しており、SK176がこれらを切る。土坑内からは土師質土器片などが出土したが、細片のため図示できるものはない。



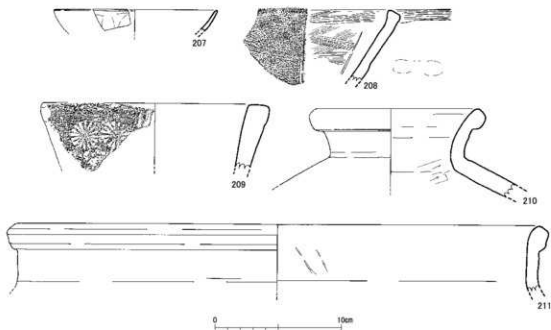
第67図 古市下遺跡SK087-SK176(1/30)



第 68 図 古市下遺跡SK087出土遺物(1/8, 1/3)

SK279

SK279 (第70図) は、I 区のほぼ中央に位置する。I 区では、中央のやや遺構の希薄な部分をはさみ、東側と西側に遺構が密集する傾向にある。本土坑は、2 箇所の遺構密集箇所の間が存在することになる。また、南側約5.0mには急激な段落ちがあり、本遺構のあたりからそれに向かい傾斜がきつくなり始める。地形的にも、遺跡の南端に位置することが分かる。平面的には、SB507と重複しているが、建物を構成する柱穴を切っており、



第 69 図 古市下遺跡SK279出土遺物(1/3)

第2節 遺構と遺物

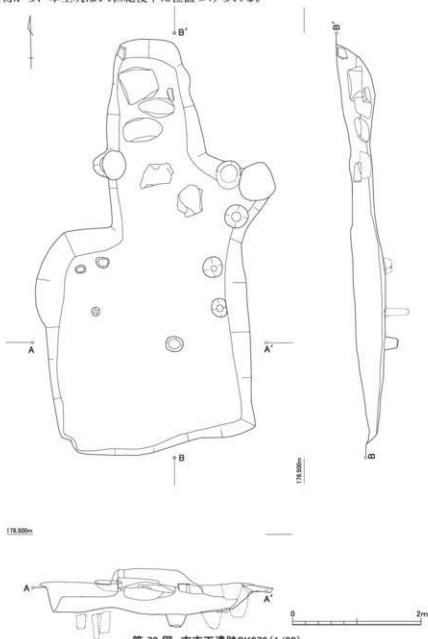
本土坑が掘立柱建物跡7に後出する。

本土坑はし字状を呈し、南北に長い。規模は南北約6.3m、東西約1.4～3.2m、深さは約0.2～0.5mである。床面は比較的平坦で、北寄りの部分に0.3～0.5mのやや大型の礎がみられる。遺物は備前焼などが出土したが、遺構規模に比しその量は少なく、床面に伴うものはない。

出土遺物（第69図）には青磁、瓦質土器、備前焼がある。

207は中国龍泉窯系青磁碗である。色調は灰緑色を呈し、外面に蓮弁文と思われる文様がみられる。蓮弁の鋪の有無は定かではない。208は瓦質土器播鉢である。外面は指オサエの後にナデ調整が行われている。端部は上方にわずかに肥厚する。内面には横方向あるいは斜方向のハケ目が全面に施され、摺り目が1本残る。209は瓦質土器鉢で、復元口径17.6cmを測る。外面口縁下には2個のスタンプ文がみられる。210は備前焼の壺と思われる。頸部から口縁部にかけてやや外方に開き、口縁部は玉縁状を呈する。211は備前焼の甕である。頸部が直立し、口縁部は玉縁をなす。

以上の出土遺物から、本土坑は14世紀後半に位置づけられる。



第70図 古市下遺跡SK279(1/60)

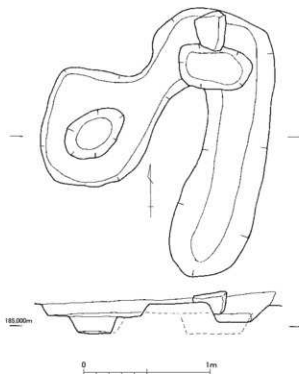
SK425

SK425 (第71図) はI区の西側に位置する。平面的にはSB505、SB506と重複するが、建物を構成する柱穴と直接切り合い関係がないため、前後関係は不明である。

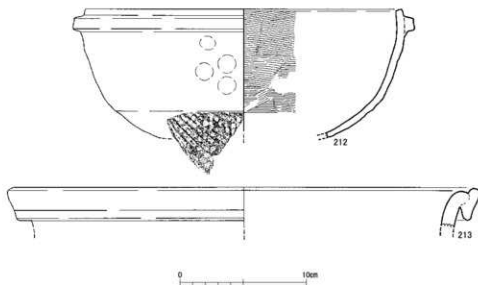
土坑はU字形を呈する。複数の土坑が重複している可能性もある。遺構の幅は、最も狭い箇所約0.6m、広い箇所約1.7mである。深さは約0.2~0.4mである。土坑内からは、約0.6m程度のほかに土器片が出土した。

出土遺物(第72図)には瓦質土器、常滑焼などがある。212は瓦質土器土鍋である。復元口径は約25cmで、底部は不明である。体部は内湾気味に口縁部にいたる。外面口縁下にはやや巾広の突帯が付される。外面体部下半には格子目タタキが、また内面にはハケ目が各々みられる。213は常滑焼甕である。口縁部は上下にわずかに拡張される。

以上の出土遺物から、本土坑の時期は14世紀前半に位置づけられる。



第71図 古市下遺跡SK425(1/30)

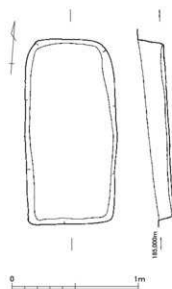


第72図 古市下遺跡SK425出土遺物(1/3)

SK423

SK423 (第73図) はI区にあり、SK425の西側に位置する。I区では中央部をはさみ東側と西側の2箇所、遺構がやや密集する傾向がみられる。本土坑は西側の遺構密集箇所のなかに所在する。柱穴や他の遺構と切り合わず、単独でみられる。平面的には掘立柱建物跡6と重複するが、構成する柱穴と直接切り合い関係がないので、その前後関係は不明である。

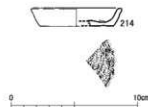
第2節 遺構と遺物



第73図 古市下遺跡SK423(1/30)

土坑の平面形は長方形である。南北方向に長軸を有し、その規模は、長さ約1.45m、幅約0.7mである。深さは0.1～0.2mで、遺構の残存状況はあまりよくない。床面は平坦で、形態や規模から土壇墓などの可能性も考えられるが、副葬品と思われる遺物や鉄釘が出土していないため断定はできない。

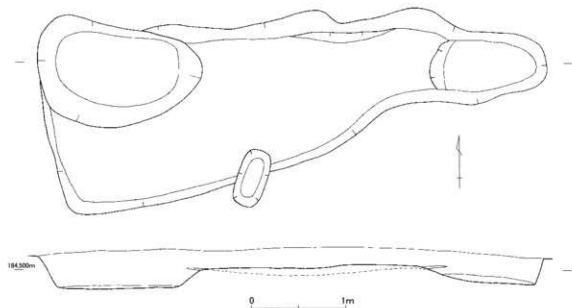
出土遺物(第74図)は少数である。214は土師質土器小皿である。体部は底部と同じ厚さで、直立気味に立ちあがる。復元口径20cmで、14世紀後半に比定される。



第74図 古市下遺跡SK423出土遺物(1/3)

SK013

SK013(第75図)はⅡ区に所在する。Ⅱ区はⅠ区に比べると、中世遺構が圧倒的に少なく散発的である。Ⅱ区の中央にSD007があるが、それよりも西側には中世の遺構は広がらない。本土坑も、SD007の東側に位置し、SD007からの距離は約2mである。



第75図 古市下遺跡SK013(1/40)



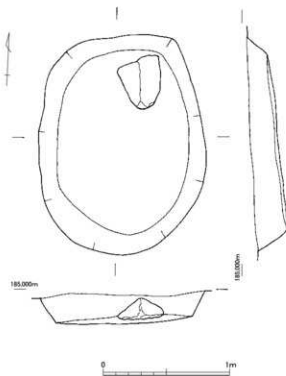
第76図 古市下遺跡SK013出土遺物(1/3)

平面形は三角形基調の不定形を呈し、東西方に長軸を有する。その規模は、東西約5.3m、西辺の長さ約2.1mである。他遺構と重複している可能性がある部分もみられるが、一部を除き床面は比較的平坦である。深さは0.2~0.4mを測る。

出土遺物（第76図）のうち図示できるものは少ない。215は備前焼播鉢である。口縁部の拡張などはみられず、体部の器厚のまま口縁部にいたる。本土坑は、14世紀後半に比定される。

SK012

SK012（第77図）は、SD007埋没後に掘り込まれたものである。南北方向に長軸をもつ楕円形を呈し、長径1.7m、短径1.3m、深さ0.2mの規模を有する。土坑内には長さ約0.4mの礎がみられたが、目立った遺物の出土はなかった。



第77図 古市下遺跡SK012(1/30)

(2) 井戸

井戸は1基が確認されたのみである。石組の井戸であるが、崩落の危険があるため一部の掘下げに止め、完掘はしていない。そのため、井戸の詳細な構造は不明な部分が多く、また出土遺物も少ない。近世以降の所産である可能性も高いが、ここで紹介をする。

SE010

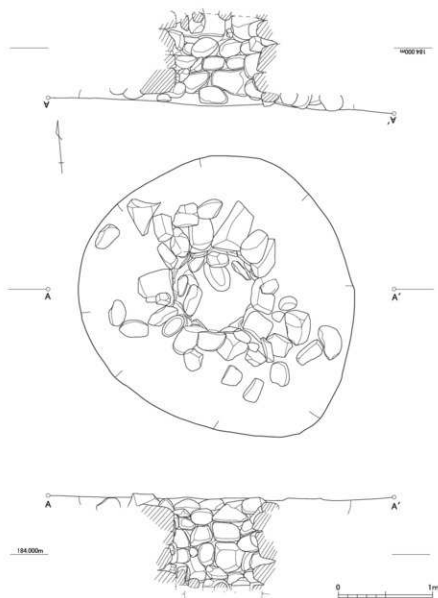
SE010（第79図）は、Ⅱ区の東端に位置する。Ⅰ区・Ⅱ区をあわせた遺跡全体でみた場合、中世遺構の中心はⅠ区にある。Ⅰ区では掘立柱建物跡など復元され、遺構が密集する状況にある。Ⅰ区西端から遺構が希薄になり、Ⅱ区ではほとんど確認されていない。SE010の立地する場所は、中世屋敷地の中心から、やや外れた位置にあたると思われる。

井戸の掘り方は楕円形を呈し、長径約3.1m、短径約2.8mを測る。井戸本体は、掘り方のほぼ中央に位置し、その径は約0.9~1.0mである。井戸は0.3~0.6mの石材で構築される。検出面では掘り方のなかに井戸構築材と同大の石材が確認された。しかし、掘り方の掘下げを少し行っただが、石材はほとんど確認されず、基本的に控え積を顕著に行わず積み上げているようである。

出土遺物は少なく、図示できるもの（第78図）は216の土師質土器のみである。体部は底部から直立気味に立ち、直線的に口縁にいたる。復元口径は11.6cmである。216は14世紀後半に比定されるが、流れ込みなどの可能性もあり、井戸の時期を示すものであるかは不明である。



第78図 古市遺跡SE010出土遺物(1/3)



第79図 古市下遺跡SE010

(3) 溝

I区とII区あわせて溝が3本が確認された。このうち、I区で検出された溝は近世以降の所産と思われる浅い溝で、畑の区画溝等と推定される。よって、ここではII区で検出したSD007について説明を行う。

SD007

SD007(第80図)はII区の中央付近に位置する。I区に中心をもつ中世遺構は、II区では希薄となり、SD007から西側には全くみられなくなる。よって、SD007は中世の屋敷地を区画する機能をもつものと推定される。遺跡は丘陵斜面に位置しているが、II区のすぐ北側は凝灰岩の崖面が立ち、南側はほどなく段丘の落ちがあることから、SD007は、東西に長く展開する屋敷地の西を限る施設であろう。

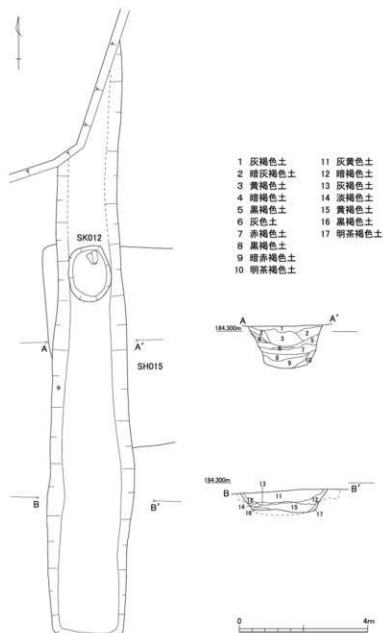
溝は等高線と直交するかたちで南北方向に直線的に延びるもので、北側は調査区外に及ぶ。その規模は幅約

2.0~2.4mである。長さは、現状で約20m確認されている。溝の断面は台形を呈し、深さは約0.7~1.3m、底面の幅は約1.2~1.8mである。溝は掘り直しが1回確認される。最終埋没は、0.4~0.6mの深さの時に、黄褐色ないしは灰黄色の砂質土で人為的に行われている。最終埋没土の砂質土中にはほとんど遺物は含まれておらず、遺物は中下層からの出土である。

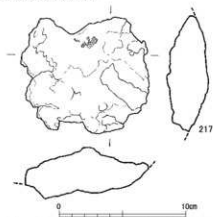
出土物には(第81、82図)には鉄滓、土器などがある。

217は鍛冶炉の炉底滓である碗型滓で、径約10cmを測る。

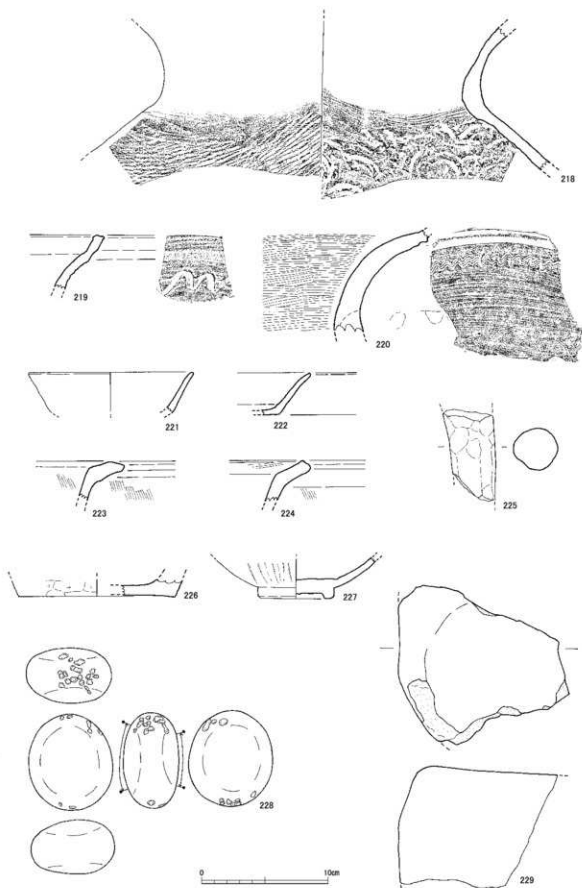
土器のうち、218~220は須恵器である。218は甕の頸部である。体部外面には平行タタキが施され、内面には同心円の充て具痕が残る。219は壺の口縁部である。斜方向にのびる頸部から、口縁部が二重口縁状にわずかに内傾する。外面には波状文が施される。220は甕の頸部である。最上部に凹線状のものがみられ、口縁部に続くとされる。外面には櫛描波状文が施される。221、222は土師質土器杯である。221は復元口径13.0cmで、体部は直線的に斜方向にのびる。222の体部は底部から鋭く立ち上がり、やや外反気味に口縁部にいたる。223、224は甕の口縁部である。両者とも口縁部がくの字状に折れる。225は土鍋の脚部と思われる。226は器種不明の土師器である。平底を呈し、復元底径13.2cmを測る。227は中国竜泉窯系青磁碗で、外面に鎮連弁文がみられる。228は磨石、229は石皿である。SD007の時期は、弥生時代、古代の混入品もみられるが、14世紀代に比定される。



第80図 古市下遺跡SD007(1/120)



第81図 古市下遺跡SD007出土遺物①(1/3)



第 82 図 古市下遺跡SD007出土遺物②(1/3)

(4) 掘立柱建物跡

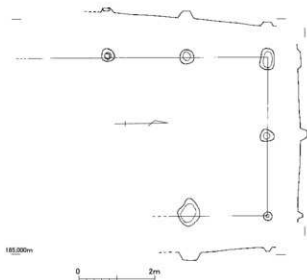
掘立柱建物跡は、I区において7棟が確認された。I区は中央部のやや遺構密度の薄い部分をはさみ、東側と西側に遺構が密集する傾向にある。建物は東側で4棟、西側で3棟が確認された。一方I区では、遺構の分布がII区に比べ極めて薄く、掘立柱建物跡は復元することはできなかった。本遺跡は、SD007を西側の区画施設とする屋敷地と思われるが、その中心はI区にある。

SB501

SB501 (第83図) は、I区の東側遺構密集地からややはずれた位置にある。南北方向に長軸をもつもので、SB502の南側桁行のラインが、本建物の北側梁行ラインとほぼ一致することから、両建物は密接な関係にあるものと思われる。

本建物は南側が調査区外に及ぶため、その全容は不明である。建物規模は梁行2間、桁行3間以上で、建物方位は $N1^{\circ}W$ である。柱間寸法は、東側桁行が北から2.2m、西側桁行が北から2.1m+2.2m、北側梁行が東から2.1m+2.1mである。

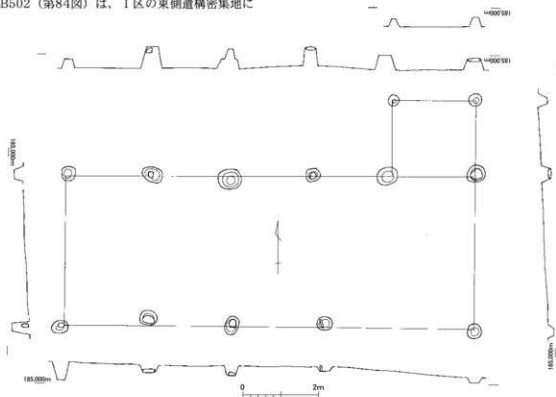
建物を構成する柱穴から時期を明確に決定できる遺物の出土はなかったが、中世に位置づけられるものと思われる。



第83図 古市下遺跡SB501(1/100)

SB502

SB502 (第84図) は、I区の東側遺構密集地に



第84図 古市下遺跡SB502(1/100)

第2節 遺構と遺物

位置する。平面的にはSB503、SB504と重複しているが、建物を構成する柱穴間に切り合い関係がなく前後関係は不明である。

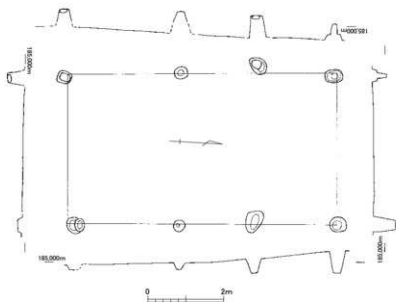
建物は南北に長いもので、梁行1間、桁行5間の規模を有する。また北側に1間×1間の張り出し部が付く。建物方位はN89°Wである。柱間寸法は、梁行が東側4.0m、西側4.0m、南側桁行が東から3.9m+2.4m+2.3m+2.2m、北側桁行が東から2.2m+2.1m+2.2m+2.1m+2.2mである。北側の張り出しは、桁行列から2.0mである。張り出し部を除く身舎面積は43.2㎡である。また、柱穴には礎盤石をもつものが目立つ。

建物を構成する柱穴から土師質土器や白磁が出土した(第86図)。230~232は土師質土器坏である。いずれも底部系切り離して、230、231は体部立ち上がり部が丸みを有する。また、232は体部がやや内湾気味に口縁部いたる。復元口径は12.8~13.6cmである。233は中国製白磁碗である。口縁部は玉縁状を呈する。

本建物の時期は出土遺物から14世紀前半に比定される。

SB503

SB503(第85図)は、I区に位置する梁行1間、桁行3間の南北方向に長軸をもつ建物である。平面的にSB502、SB504と重複するが、前後関係は不明である。建物方位はN86°Eである。柱間寸法は、南北梁行が4.0m、東側桁行が南から2.8m+2.0m+2.2m、西側桁行が南から3.0m+2.0m+2.1mである。身舎面積は28.0㎡を測る。建物を構成する柱穴からの出土遺物は小破片で、詳細な時期は不明である。



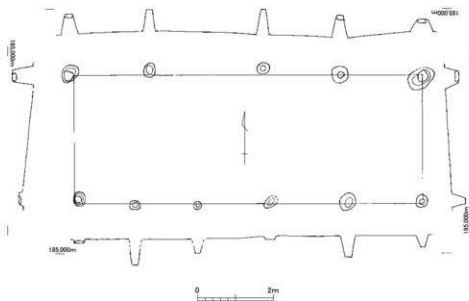
第85図 古市下遺跡SB503(1/100)

SB504

SB504(第86図)はI区に位置する。東西に長軸をもつもので、梁行1間、桁行5間の規模を有する。平面的にSB502、SB503と重複する。また、SK176と構成する柱穴が重複し、SK176に切られる。建物方位はN90°Wである。柱間寸法は、梁行が東側3.4m、西側3.3m、南側桁行が東から1.9m+2.1m+1.9m+1.7m+1.5m、北側桁行が東から2.2m+2.1m+2.9m+2.1mで、身舎面積は30.4㎡を測る。柱穴には礎盤石をもつものがある。

建物を構成する柱穴から土師質土器、青磁、瓦質土器などが出土した(第90図)。234、235は土師質土器坏である。234は体部中程が丸みをもち、復元口径11.1cm。235は体部が斜方向にのび、口縁部がわずかに外反気味である。口径12cm。236、237は土師質土器小皿で、体部は236斜方向に立ち上がり、237は短く直立する。口径は236が7.2cm、237が8.1cmである。238は中国竜泉窯系青磁碗。239は瓦質土器土鍋で、口縁部が短くL字状

に折れ、端部が上方にやや肥厚する。以上から、本建物は14世紀前半に位置づけられる。

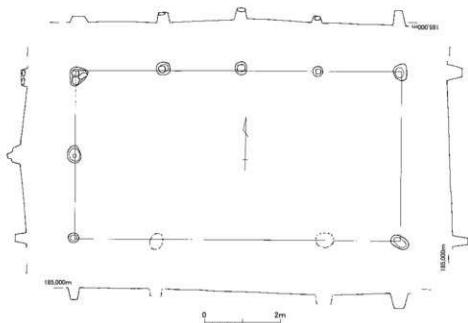


第 86 図 古市下遺跡SB504(1/100)

SB505

SB505（第87図）は、I区の西側遺構密集部分に位置する。平面的にSB506と重複するが、建物を構成する柱穴に直接の切り合いがなく前後関係は不明である。

建物は東西方向に長軸を有するもので、梁行2間、桁行4間の規模をもつ。また、建物方位は $N89^{\circ}E$ である。柱間寸法は、東側梁行が4.5m、西側梁行が南から2.2m+2.3m、南側桁行が東から2.0m+4.4m+2.2m、北側桁行が東から2.4m+2.0m+2.2m+2.3mで、身舎面積は38.7㎡を測る。本建物の柱穴にも礎盤石をもつものがみられる。建物を構成する柱穴からの出土遺物の多くは小破片で、建物の時期は不明である。



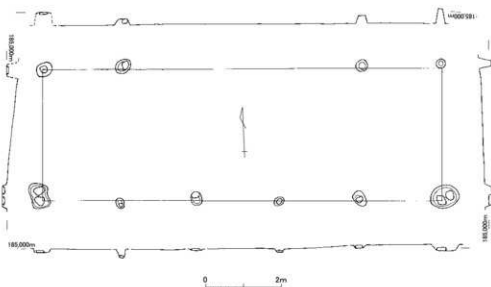
第 87 図 古市下遺跡SB505(1/100)

第2節 遺構と遺物

SB506

SB506 (第88図) は、I区に位置し、平面的にSB505と重複する。本建物の北側桁行ラインは、SB502の南側桁行ライン及びSB501の北側梁行ラインとほぼ一致する。これら3棟の建物が計画的に配置された可能性がうかがえる。

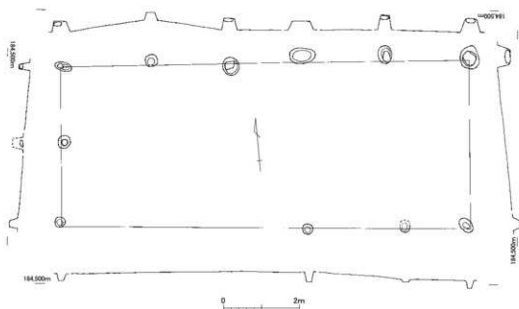
東西方向に長い建物で、梁行1間、桁行5間の規模をもつ。また、建物方位はN87°Wである。柱間寸法は、東側梁行が3.6m、西側梁行が3.5m、南側桁行が東から2.2m+2.1m+2.2m+2.0m+2.1m、北側桁行が東から2.1m+6.3m+2.2mで、身舎面積は37.1㎡を測る。本建物の柱穴にも礎盤石をもつものが目立つ。



第88図 古市下遺跡SB506(1/100)

SB507

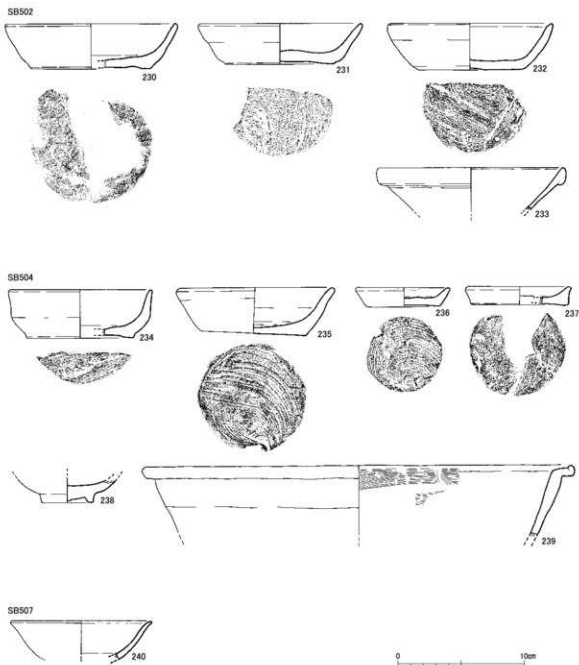
SB507 (第89図) はI区にあり、SB505、SB506の南東側に位置する。SK279と重複しているが、建物を構成す



第89図 古市下遺跡SB507(1/100)

る柱穴がSK279に切られている。

建物は東西方向に長軸を有するもので、梁行2間、桁行5間の規模をもつ。また、建物方位はN85°Wである。柱間寸法は、東側梁行が4.5m、西側梁行が南から2.2m+2.1m、南側桁行が東から1.7m+2.6m+6.5m、北側桁行が東から2.2m+2.3m+1.9m+2.0m+2.4mで、身舎面積は47.5㎡を測る。本建物の柱穴にも礎盤石をもつものがみられる。建物を構成する柱穴からの出土遺物は小破片が多く、図示できるものは少ない(第90図)。240は中国産白磁皿である。復元口径10.9cmで、口縁端部ちかくがわずかに外傾する。口縁内面の端部付近が無軸となっている。本建物の時期は、出土遺物から14世紀代に比定される。



第90図 古市下遺跡堀立柱建物跡出土遺物(1/3)

(5) その他の出土遺物

その他の遺構や表土層などから出土した遺物を紹介する。

柱穴出土遺物

I、II区の掘立柱建物跡を構成しない柱穴から出土した遺物を紹介する(第91図)。

241～245は土師質土器環である。241は他に比べて明らかに大型で、復元口径15.6cm、底径11.5cm、器高5.4cmを測る。底部は糸切り離して、体部の立ち上がりは比較的シャープで、直立気味に口縁部にいたる。242～245は口径11.5～13.2cmを測る。242、243は糸切り離しの底部から直立気味に立ち上がり、口縁にいたる。244、245はやや斜方向に立ち上がり、口縁部にいたる。以上の環のうち、241、244は胎土に金ウモンを含む。246～250は土師質土器小皿である。246、247は底部と同じ器厚の体部が、直立気味に斜方向に立ち上がる。口径は246が7.4cm、247が7.6cmである。248、249は底部から尖り気味の体部を斜方向に引き上げる。口径は248が9.0cm、249が8.8cmである。250は口径7.9cm、器高2.2cmで、口径に比し器高が高いものである。これら土師器小皿の胎土には、いずれも金ウモンを含む。以上の土師質土器は14世紀代に比定される。

251は瓦質土器土鍋である。外面口縁下2cmの位置に鈎状の突帯が貼り付けられる。突帯の高さは約1cmで、比較的高い。畿内系の搬入品であると思われる。252は瓦質土器鉢である。内面にはハケ目がみられる。14世紀代の遺跡で類例がみられる。

253～258は輸入陶磁器である。このうち253～255は中国製青白磁合子の蓋である。253は口径8.5cmを測るもので、上面には2体の鳳凰がヘラ描きにより描かれている。内外面に施軸がみられるが、端部と内面端部付近は無軸である。254は復元口径6.8cmで、外面端部ちかくと内面は無軸である。255は破片資料であるが、鳳凰のヘラ描きが確認される。256は中国製白磁碗で、口縁部は緩やかに外反する。257は中国製青磁碗である。258は中国製青磁碗底部である。底部は厚く、高台は直立する。外底面と見込みの一部が露胎である。以上は12～14世紀に比定される。

259は碗の底部と思われる。内外面無軸で、低い高台を削り出す。

260は土錘である。

表土層、遺構検出面等出土銭貨

遺構検出作業中や近世以降の遺構から出土したものである。I区、II区で各々2枚ずつ出土している(第92、93図)。

261、262はI区から出土したものである。261は破損品で、全体の四分の一程度しか残存しない。残存する文字は2文字で、「元」と「豊」が読めることから、篆書の「元豊通寶」と推定される。1078年初鑄の北宋銭である。262も欠損品である。残存する2文字のうち、左側の「寶」は読めるが、右側の文字は判読できない。よって、銭種を特定するにはいたらない。263、264はII区から出土したものである。263は真書の「熙寧元寶」である。北宋の1068年初鑄。264は縁部が一部欠損するが、文字は判読できる。南宋の1241年初鑄の「淳祐元寶」で、背面に背文と思われるものが確認できる。

表土層、遺構検出面等出土土器

表土剥ぎや遺構検出作業中などに出土した土器について紹介する。

265～273はI区から出土したものである(第94図)。265、266は土師質土器環で、いずれも14世紀代のものと思われる。265は底部糸切り離して、復元底径8.6cmを測る。体部は丸みをもち立ち上がり、口縁部にむけてやや外反するものと思われる。胎土には金ウモンが含まれる。266も底部糸切り離して、体部の立ち上がりはシャープである。底径6.9cmで、胎土には金ウモンがみられる。267は土師器高台付き碗である。高台端部は欠損するが、やや細めの高台がハの字状に貼り付けられている。9世紀後半から10世紀にかけてのものか。268～



第91图 古市下遺跡I区柱穴出土中世遺物(1/3)



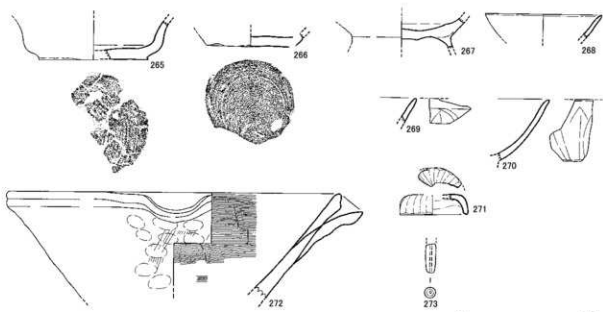
第92図 古市下遺跡Ⅰ区出土銭貨(1/1)



第93図 古市下遺跡Ⅱ区出土銭貨(1/1)

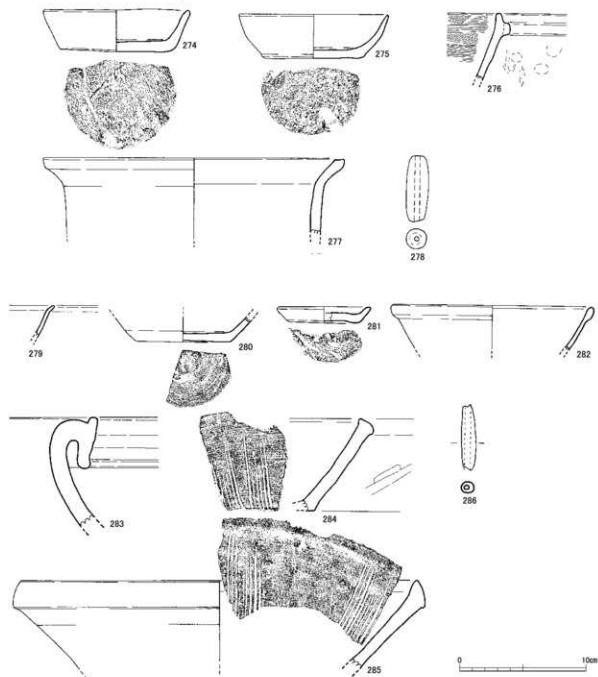
271は輸入陶磁器である。268は中国製白磁皿である。復元口径9.2cmを測るもので、口縁端部内外面が露胎となる。269、270は中国竜泉窯系青磁碗で、両者とも外面に鎊連弁文がみられる。271は中国製青白磁合子の蓋である。復元口径5.3cmを測る。端面と端面内側が露胎となっている。以上の輸入陶磁器は、12～14世紀の所産である。272は瓦質土器こね鉢で、復元口径26.4cmを測る。体部は斜方向にのび、端部を上方に肥厚させる。内面には横方向のハケ目がみられる。273は土錘である。

274～286はⅡ区から出土したものである(第95図)。このうち、274～278は表採及び表土出土品である。274、275は土師質土器坏で、底部は糸切り難しである。274は体部が直線的に口縁部にいたる。口径11.3cmである。275は体部がやや内湾気味に口縁部にいたる。口径は11.7cmである。また、両者の胎土には金ウンモが多量に含まれる。以上は14世紀代に比定されるもので、275の方が古相の特徴をもつ。276瓦質土器土鍋である。外面口縁下に、やや低めの突帯を付す。突帯の状況から13世紀末から14世紀初前後に位置づけられる。277は土師器甕である。直立気味の体部から口縁部が外方に折れる。口縁端部は上面に平坦面を形成する。古代の所産である。278は土錘である。



第94図 古市下遺跡Ⅰ区その他の古代・中世遺物(1/3)

279～286は遺構検出作業中などに出土したものである。280は土師器坏である。底部へラ切り離して、底径7.5cmを測る。9世紀代に比定される。281は土師質土器小皿である。糸切り離しの底部から、底部と同じ器厚の体部が斜方向に立ち上げられ、復元口径は7.4cmを測る。14世紀代に比定される。279、282は陶磁器である。279は細かい貫入が入った浅黄色の釉が内外面にかげられる。282は中国製白磁碗で、口縁部は玉縁状をなす。283は常滑焼甕である。口縁部の拡張が進行し、縁帯幅は4cmちかくになる。14世紀前半代のものか。284は瓦質土器擂鉢である。体部は底部から直線的に斜方向に立ち上がるもので、器高は比較的低い。埋面には横方向のハゲ目がみられ、6本単位の摺り目が施される。285は備前焼擂鉢である。口縁端部は上方に引き上げられ、断面三角形を呈する。内面には9本単位の摺り目がみられる。15世紀前半に位置づけられるものである。286は土錘である。

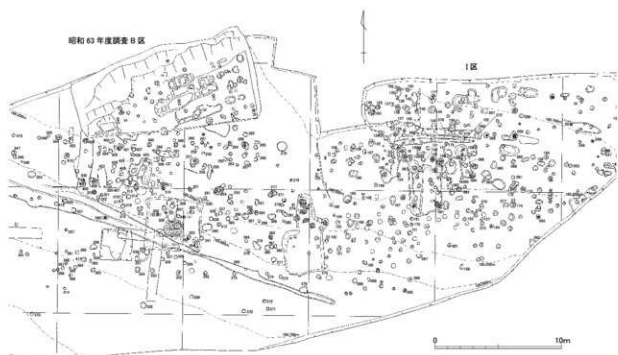


第95図 古市下遺跡Ⅱ区その他の古代・中世遺物(1/3)

(6) 昭和63年度調査の遺構・遺物

昭和63年度調査（『田村遺跡・池在遺跡・古市遺跡・市万田館跡』朝地町教育委員会 1994）では、B区において中世の遺構・遺物が確認されている（第62図）。B区の位置は、今回調査区のI区内にあたる（第96図）。I区の中央やや西寄りの北端一帯では、遺構がほとんど検出されていない。この部分は、県営園場整備に際し削平された箇所である。工事に先立ち調査されたのが、平成63年度のB区である。B区の位置については座標で押さえられていないが、調査区の北端が崖面であるため北端の位置が限定できることと、B区の遺構のうち深い部分が一部今回の調査で確認されたことから、B区の位置をほぼ特定できた。

B区から土坑、柱穴などが検出されている（第97図）。調査区の北側は、崖面に続き凝灰岩の岩盤が露出しているにもかかわらず、柱穴が穿たれている。このような状況は、今回の調査でも崖面に近い箇所で見られた。B区で柱穴が約50検出されているが、建物を復元するにはいたってない。土坑は約10基が確認され、一部は重複している。このうちSK1とSK2からは遺物がある程度まとまって出土している。また、柱穴1からは銅銭約50枚が箱の状態を確認されている。

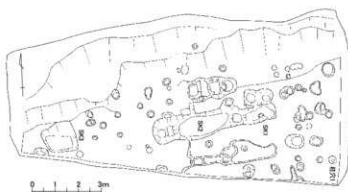


第96図 昭和63年度調査B区位置図

SK1

SK1は直径0.5m程の土坑が重複したものであるが、前後関係は明らかではない。長さ1.4m、幅0.8mで、床面は平坦である。

出土遺物（第98図1～8）のうち土師質土器小皿はいくつかの形態があり、口径7.9～9.0cm、高さ1.2～2.1cmである。土師質土器杯は、体部がやや内湾気味のものと同直線的なものがある口径



第97図 昭和63年度調査 古市遺跡B区

12.6~13.2cm、高さ3.1~3.5cmである。

以上のうち3、5、6の胎土には金ウンモが含まれる。

SK 2

SK 2は楕円形にちかい形態をもち、東西方向に長軸をもつ。しかし、前後を他の土坑に切られている。その規模は、現存長2.3m、幅1.1m、深さ0.5mを測る。

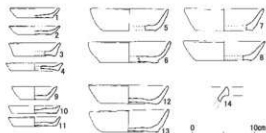
出土遺物(第99図)には土師質土器小皿・坏、青磁、常滑焼、瓦質土器がある。土師質土器小皿は体部が斜方向に短く立ち上げられる。口径は7.6~9.7cm、器高1.3~1.6cmである。その中で、4は底部からわずかに引き上げられた程度である。また、1は口径に比して器高が高い。これらのうち、1、2、4は胎土に金ウンモを含む。土師質土器坏は、体部がやや内湾気味に立ち上げられるもの(6~8)と斜方向に直線的に開くもの(9)がある。口径は13.0~14.8cm、器高2.9~3.4cmである。また、8には胎土に金ウンモが含まれる。10は中国製龍泉系青磁碗である。口縁部が外方に折れ、体部外面委には鎊蓮弁文がみられる。11~13は常滑焼甕である。11、12はこう口縁部で、いずれも上下に拡張し幅広の口縁帯となっている。13は肩部でやや張った状況がみとれる。外面には、短沈線が三段に並ぶ押印文が施される。14は瓦質土器播鉢である。口縁端部が上方に引き上げられ、断面三角形を呈する。櫛目は4条+ α がまばらに施されているようである。

柱穴出土土器

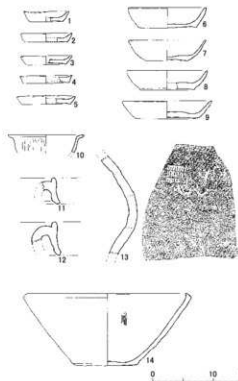
柱穴出土土器(第98図9~14)には土師質土器小皿・坏、東播系こね鉢がある。土師質土器小皿のうち9は、口径7.2cm、口径2.1cmで口径に比し器高が高い。10は体部が底部から上方に引き上げられた感じのもの、11は斜方向に短く立ち上がる。口径は両者とも8.2cmである。土師質土器坏は、口径12.7~12.8cmである。以上のうち、9、11、13には胎土に金ウンモが含まれる。

包含層出土土器

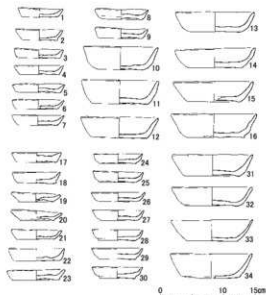
包含層出土土器(第100図)のうち、土師質土器小皿・坏には、金ウンモを含むもの(1~16)と含まないもの(17~35)がある。形態的には両者の違いは顕著ではないが、法量的にみると金ウンモを含む一群が含まないものよりも口径がやや小さい傾向が看取されるようである。調査者はこれらの違いを時期差と考えている



第98図 昭和63年度調査 古市遺跡B区SK1、柱穴出土土器



第99図 昭和63年度調査 古市遺跡B区SK2出土土器

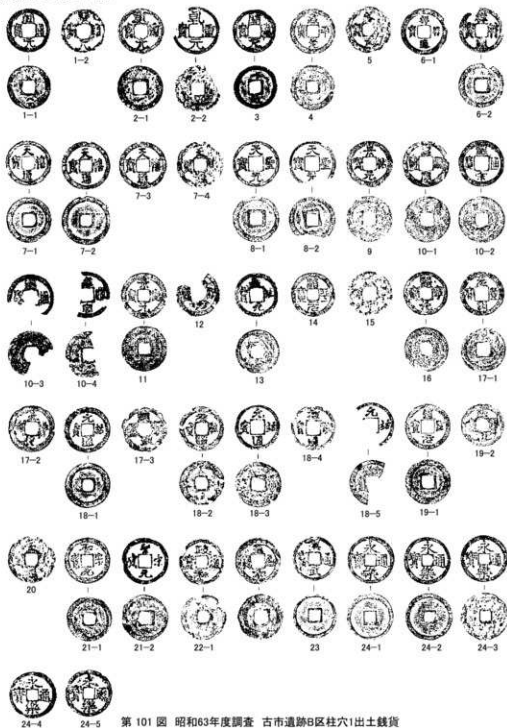


第100図 昭和63年度 古市遺跡B区包含層出土土器

が、その変化は漸移的である。このほか、中国製青磁碗、備前焼部鉢、瓦器椀などが出土している。器機については、低く不明瞭な高台が付くもので搬入品と思われる。

柱穴1出土銭貨

柱穴1からは銅銭が53枚出土している（第101図）。これらは柱穴内に磨銭の状態で見つかり、縦位に埋納されていたものと思われる。検出時には一部に紐の痕跡も確認されている。53枚のうち判読可能なものは47枚で、最も古いのは、621年初鑄の「開元通寶」で、最新は1408年初鑄の「永樂通寶」である。このことから、埋納の時期は15世紀初以降と考えられる。



第101図 昭和63年度調査 古市遺跡B区柱穴1出土銭貨

第3節 小 結

1 古市下遺跡の歴史の変遷 (第102図)

古市下遺跡では、縄文時代、弥生・古墳時代、古代、中世の遺構・遺物が確認された。これらについて時代ごとに歴史的な位置づけを考える。なお、周辺遺跡の位置等については第2章を参照願いたい(第4図)。

(1) 縄文時代

Ⅱ区で縄文時代後期石町式の遺物集中箇所が1箇所確認された。遺物は5層の黒褐色土中から出土したもので、精査にもかかわらず遺構は明らかにすることができなかった。しかし、遺物の出土状況から、竪穴建物跡などの遺構の残影と思われる。調査区内では他に同様な箇所は確認されておらず、また他時代の遺物も極めて少量であることから、小規模かつ継続性がない一過性の集落であったことが分かる。

市万田川流域の谷は、圃場整備事業に伴い谷全域で広く調査が行われている。それによれば、本流域の縄文時代遺跡は、早期と後・晩期のものが目につく。早期の遺跡は、田村遺跡、田村シゲツキ遺跡で各々まとまって確認されている。田村地区という谷の一定地域が、稲荷山式～田村式の間の比較的長い期間利用されていることが分かる。後期の遺跡は、今回の古市下遺跡に加え、池在遺跡(三万田式)、田村谷遺跡(鐘崎式)、田村東遺跡(鐘崎式、北久根山式、石町式)などで確認されている。田村地区に集中する傾向も読み取れるが、早期に比べ谷の広い範囲で確認されている。古市下遺跡同様いずれも比較的小規模で、早期のように長期間利用される姿は読み取り難い。小集団による集落が流域内に点在し、多く場合、各集落の継続性は乏しかったようである。晩期になっても後期と同様な傾向が続き、池在遺跡、田村遺跡、滝ノ上遺跡で遺物の出土が確認されている。本地区が位置する大野川中・上流域では、縄文時代後期後半～晩期中葉にかけて火山灰台地上で遺跡数が増大し、各遺跡の遺物量も増すことが知られている。多くの場合、これらの遺跡からは打製石斧が多量に出土し、原初的な農耕との関連性も考えられている。これらの遺跡に比べると、市万田川流域の遺跡は規模が小さい。その違いは、火山灰台地と谷底平野という遺跡立地環境に起因する可能性が考えられる。

(2) 弥生・古墳時代

本遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴建物跡が重複しながら16基確認された。調査区は丘陵斜面から裾部にあたり、前面の遺跡南側には市万田川との間に平坦な段丘面が広がる。この平坦面の規模は市万田川流域の谷の中でも最大規模である。前面の平坦面の大半は工事予定地外のため未調査で状況を知ることができないが、本遺跡の南西約200mの市万田川沿いに立地する古市上遺跡(第4章参照)の存在を考え合わせると、広い平坦面に同時代の集落が広く展開する可能性が高い。本遺跡は、古市地区の段丘上に展開することが予想される集落の北端に位置するものである。

市万田川流域の弥生・古墳時代遺跡のうち、弥生時代は池在遺跡、田村遺跡、宮迫遺跡、一万田館跡、滝ノ上遺跡などで散発的な遺物出土状況が認められる。古墳時代では、田村シゲツキ遺跡で6世紀後半の竪穴建物跡が、このほか明確な時期が不詳ではあるが弥生時代後期から古墳時代後期に比定される竪穴建物跡が、田村谷遺跡と下津留遺跡で確認されている。以上の、弥生・古墳時代遺跡は、地形的な制約のためか、いずれも小規模で、数棟単位の小集落がであったと思われる。その中において、古市下遺跡、古市上遺跡を含む古市地区は前述したように大規模な集落の存在が予想され、少なくとも弥生時代後期から古墳時代前期の間については、流域内の拠点集落として位置づけられるであろう。このような集落出現の背景には、農業生産力の発展と安定が不可欠である。灌漑用水として市万田川の水を直接利用することは、川と段丘面の比高差が大きいため、弥生・古墳時代には技術的に難しかったと思われる。そのため、この段階の開発は、用水の得やすい市万田川に流れ込む小支流の谷地において主に行われ、現在本地区の主要な水田となっている市万田川沿いに発達する広大な段丘面の大半は集落地として利用されていたと考えられる。古市地区に大規模な集落が成立していたと想定される弥生時代後期から古墳時代前期には、小支流の谷の開発がある程度安定したものになっていたことを裏付けるものであろう。

(3) 古代

本遺跡のⅡ区に隣接する場所で、圃場整備事業に伴う調査において土器埋納遺構が確認されている。部分的な調査のため、遺跡の全容は明らかにされていないが9世紀代に位置づけられるものである。今回、同時期の遺構・遺物が検出され、遺跡の規模や性格が明らかにされると期待されたが、確認された遺構はⅡ区のSK009のみで、遺物も小破片が多かった。しかし、それにより同時期の遺構が今回の調査区内まで大きく広がらず、Ⅱ区の西側隣接地一帯に収まるであろうことが確定できた。また、Ⅱ区の西端に近いほど、圃場整備の整地層に古代の土器と思われる小破片が多数含まれることから、一定規模以上の遺跡であったと推測される。

Ⅱ区の西側一帯は丘陵の緩斜面で、大規模遺跡が立地するには必ずしも好適な場所ではない。しかし、段丘面上の現水田を対象とする圃場整備事業に伴う調査では、古代の遺跡は確認されていない。これは段丘面の集落地としての利用が、弥生・古墳時代に比べ大きく後退したことを物語る。その背景には、弥生・古墳時代以降の段丘面上における農業開発の順調な進展があると思われる。すなわち、小支流内の開発に加え市万田川沿いの段丘面上にまで水田や畑地の開発が及び、一定の成果を得たものであろう。しかし、段丘上の水田については小支流の水を利用するに止まり、全面的な水田化には程遠いものであり、畑地としての利用が主であったと想定され、一部は荒野あるいは集落地としての利用もあつたであろう。古市下遺跡隣接地の丘陵斜面に立地する古代集落は、農業開発の対象となる流域有数の広い段丘面を見下ろす位置にあることが分かる。遺跡で検出された土器埋納遺構は地鎮などの祭祀行為に係わるものと考えられ、このような祭祀関連遺構は、県内の調査でも建物規模、遺物内容・量、墨書土器・刻書土器の有無などから上位層の居宅と推察される遺跡などで確認されている。また、前代の弥生・古墳時代に拠点的な集落が本地区に存在したであろうことを考え合わせると、古代においても流域の中核をなす地区であったことが想定され、本遺跡が流域全体にわたる指導的な位置にある上位層の居宅であった可能性が考えられる。

(4) 中世

中世の遺構はⅠ・Ⅱ区から、掘立柱建物跡、土坑、溝などが確認された。Ⅱ区で検出されたSD007の西側には遺構が広がらないことから、SD007を西側の区画施設とする館であると考えられる。SD007は幅2.0～2.4m、深さ0.7～1.3mの規模を有し、丘陵と直交するように南北方向に伸びる。そして、調査区内を約20m続いたところで突然止まる。これは、西側の出入口施設に関連するためと思われるが、定かではない。北側は背後の丘陵という自然地形により画される。特にⅠ区では凝灰岩の崖面が切り立つ。南側は調査区の端を境に地形的に落ちており、自然地形に合わせた状況であったと思われる。本来は柵列などが配置されていたであろう。東側を限る区画施設は、調査区内において検出されていない。しかし調査区の東側約40mには南北に伸びる小支谷があることから、最大に広がってもこの付近に東限を設定することが可能である。以上から館の規模は、南北約25m、東西が最大約130m程であったと考えられる。地形に規制された変則的なものではあるが、その面積は半町方格規模に匹敵する。掘立柱建物跡等の中心施設はⅠ区にあり、建物7棟復元されている。建物規模は大きく、規模が分かる6棟の平均が37.5㎡である。遺構・遺物についても吉備系土器器柄の存在や銭埋納遺構など、一般的集落を上回る内容をもち、時期的には14～15世紀に及ぶものである。

中世の市万田川流域は一万田氏の本貫の地で、本遺跡の上流約1kmには館が所在する。市万田川からの取水による段丘上の全面水田化は近世以降になるとと思われるが、取水可能な一部地区では河川灌漑による水田化が行われていたであろう。圃場整備事業に伴う調査でも、段丘面上では明らかな中世遺跡は確認されておらず、丘陵裾部において検出されている。中世においては、基本的に段丘面は水田や畑地等の耕作地としての利用が優先し、屋敷地は段丘面を見下ろす丘陵斜面から裾部に展開したものである。本遺跡で確認された館跡も、耕地化された段丘面を避け、あえて丘陵斜面部に構築せざるを得なかったものと思われる。館跡は半町方格に匹敵する規模を有することから、一万田氏を支える有力層の館である可能性が高い。

丘陵斜面部が水田化するの近代になってからで、現在見る景観が成立したのは近代以降のこととなる。それまでは基本的な中世の景観が引き継がれ、丘陵斜面から裾部にかけて屋敷地が点在していたであろう。



第 102 図 古市下遺跡遺構変遷図

2 東北九州における北久根山式併行期の土器様相

(1)

古市下遺跡Ⅱ区遺物集中箇所出土縄文土器の系譜と位置づけを明らかにする。それにあたり、近年増加した大分県から福岡県周防灘沿岸部にかけての同時期の良好な土器出土例を整理・検討する。

(2)

土器の系譜と位置づけを検討するにあたり、当該期の土器様相について多くの優れた先行研究があるので、要旨を紹介し研究の到達点と問題点を整理する。

高橋信武(高橋信武 1981)は、北久根山式から西平式・三万田式にかけての土器変遷を整理するとともに、四国の片粕式の細分を行い九州側との対応関係を示した。東九州地域にみられる片粕式土器などから、西南四国との関係や当該期の地域性を示唆している。

山口信義(山口信義 1989)は、周防灘・響灘沿岸地方の北久根山式併行期前後の土器型式推移を、鐘崎Ⅱ・Ⅲ式-菊水町一貫・井手ヶ本とし、九州北西部の北久根山第一型式-北久根山第二型式(辛川Ⅰ式)-辛川Ⅱ式に対応するとした。北久根山式併行期の地域性を積極的に見出すとしたものである。

松永幸雄(松永幸雄 2001)は、東九州地方の北久根山式について、鐘崎式期終末に近畿地方以東を源とする要素が西漸し在来の要素に加わり成立したものとす(註1)。すなわち、W字貼付文に代表される北久根山第一型式は東九州には存在せず、近畿・瀬戸内地方の影響を受けた北久根山第二型式が鐘崎式直後からみられ、その状況を如実に表すのが、松永自身も報告書の執筆を行っている大分県中津市ボウガキ遺跡(村上久和編 1992)の住居跡出土資料であるとしている。

後藤晃一(後藤晃一 1993)は、大分県宇佐平野周辺の磨治縄文土器の編年のなかで、北久根山式に併行する段階として2段階を設定している。Ⅳ-a期に大分県安心院町の飯田二反田遺跡(渋谷忠幸他編 1989、1990)3・5号住居跡の資料を、Ⅳ-b期に大分県中津市佐知遺跡(坂本嘉弘編 1989)4号住居跡の資料を各々あてている。そして、これらが北久根山第二型式に属し、瀬戸内地方などの影響を大きく受けたものが含まれるとしている。

筆者は(後藤一重 1997)は、大分県国東市安岐町吉松市場遺跡J1竪穴出土土器の位置づけを行うなかで、東九州の北久根山式について整理を試みた。それによれば、東九州地域では北白川上層3期などを発信源とする東からの文化伝播により、鐘崎式の系譜とは様相が異なる北久根山第二型式を中心とする土器群が成立し、北久根山第一型式が主体的に分布する九州山地西側の地域とは明らかな違いをみせるに至った。そして、東九州の北久根山式期の変遷を、ボウガキ遺跡1・2号住居-佐知遺跡4号遺構・飯田二反田遺跡(坂本嘉弘他編 1993)3号住居跡-吉松市場遺跡J1竪穴とした。佐知遺跡4号遺構などの段階からみられる口縁帯への棒状貼付文は、北白川上層3期にはみられず、やや様相を異にするが一乗寺K式にみられるものとの関係が想定される。また、吉松市場遺跡J1竪穴出土土器は、深鉢口縁帯の狭小化・内傾化が強まるなどより新相に位置づけられる特徴を有する。

林潤也(林潤也 2002)は、東北九州では北久根山第一型式と第二型式が併行するとし、主体となる第二型式の土器群の型式名として、福岡県椎田町の石町遺跡(小池史哲編 1992)出土の土器群を標識とする「石町式」を提唱した。そして、この石町式の成立に係わる土器群として中部瀬戸内の彦崎K2式に先行する土器群をあげ、石町式の深鉢頂部直下の渦文や入組文と類似性が高いとしている。さらに、石町式が古相と新相に細分されることを示した。

遠部慎(遠部慎 2002)は、大分県豊後高田市三六田遺跡1号竪穴出土土器の考察のなかで、鐘崎式から北久根山式の土器群について、上唐原遺跡(小池史哲編 1996)2号住居-いわゆる北久根山式-三六田式-吉松市場式という整理を行っている。短文のため型式設定の根拠が不明であるが、東九州の北久根山式が細分可能

なことを示したものとと思われる。

水之江和同・前迫亮一（水之江和同・前迫亮一 2010）は、北久根山式について北久根山第一型式だけを北久根山式とし、北久根山第二型式はそれに後続する土器群の総称という学史的意義に留めるとの立場をとる。そして、北久根山第二型式期に位置づけられる各地域の個性を活かした名称を各地で使用することが適当であるとされている。示された編年表をみると東北九州は、鐘崎式-（+）-松丸式という流れが示されており、（+）は西北九州の北久根山式と併行させている。（+）に相当するものとして福岡県椎田町の石町遺跡出土の土器群を図示している。これらの土器群の特徴は、深鉢が内湾気味に立ち上がる4単位の波状口縁を呈し、沈線文の端部に刺突文を施す。また、巻貝による擬縄文が多用されるという。これに後続する松丸式は福岡県築城町松丸遺跡（伊崎俊秋編 1992）出土土器を標識とするもので、従来の北久根山第二型式の範疇には収まらず、口縁部文様帯の狭小化、胴部文様の山形文あるいは連弧文的連続文様への集約傾向から後続する西平式へ推移する様子が分かるとする。

以上の先行研究から、東九州における鐘崎式に後続する土器群について以下のように整理することができる。

- ①鐘崎式に後続する土器群は北久根山第二型式とされた土器群で、それらを林潤也是石町式とした。
- ②石町式（東九州の北久根山第二型式）は北久根山第一型式と併行する。
- ③石町式の成立には近畿地方や中部瀬戸内地方などの土器要素が深く係わっている。
- ④石町式は器形・文様にバリエーションがみられ、細分の可能性がある。

（3）

北久根山式（北久根山第一型式）については、北久根山遺跡の詳細な内容が報告（富田祐一 1996）されたことにより、その内容が明らかになった。それによれば、大分県から福岡県周防灘沿岸にかけての東北九州地域の遺跡では、北久根山式とされる土器は少数あるいはみることができない状況にあることが分かる。ここでは、東北九州において主体を占める石町式（北久根山第二型式）とされる土器についての整理を行う。

整理にあたり、主要な土器を以下のように分類する。

・A類

口縁部が緩やかに内湾するもので、口縁部には3～4単位の波頂部がみられる場合がある。口径に比し器高が高い深鉢形態をなすものが主である。鉢Aは文様の有無などにより、さらに以下のように細分される。

A 1類 頸部は無文で口縁部と胴部に沈線、縄文、疑似縄文などによる文様がみられる。口縁部の波頂部直下や胴部には、渦文や入組文などが配される場合もある。口縁波頂部に縦位の隆帯を付すものも一部みられる。

A 2類 頸部は無文で、口縁部と胴部には縄文や疑似縄文だけが、あるいは沈線文だけが各々施される。口縁波頂部に縦位の隆帯を付すものも一部みられる。

A 3類 条痕等の器面調整のみで、文様は施されない。

・B類

口縁部がやや肥厚し口縁帯を形成し、頸部からくの字状に折れ、直立あるいは内傾する。口径に比し器高が高い深鉢形態をなすものが主である。鉢Bは文様の有無などにより、さらに以下のように細分される。

B 1類 頸部は無文で、口縁部と胴部に文様がみられる。文様は、沈線、縄文、疑似縄文などにより構成されるが、胴部は縄文、疑似縄文だけの場合も見られる。また、多くの場合、口縁部には縦位の隆帯を貼り付け、波頂部を形成する。口縁部文様帯はA 1類に比べ狭くなり、渦文や入組文などはみられない。

B 2類 頸部無文で、口縁部と胴部に縄文あるいは疑似縄文だけが施される。口縁部に縦位の隆帯が貼り付けられ、波頂部を形成するものもある。

B 3類 条痕等の器面調整のみで、文様は施されない。

・C類

頸部が直線のあるいはやや外湾しながら伸び、そのまま口縁部にいたる一群である。これらの中には、口径に

比し器高が低い浅鉢形態のものもみられる。

口縁の端部や外面に幅状の縄文あるいは疑似縄文が施され、頸部は無文である。胴部には沈線、縄文、疑似縄文による文様がみられるが、縄文、疑似縄文だけのものも見られる。

・D類

C類と同様な器形を呈するもので、内外面とも無文の一群である。多くの場合、内外面に条痕調整が施される。一部で口縁端部に刻みを施すものがみられる。

(4)

上記分類に従い東北九州の主要遺跡(第103図)出土土器を整理・検討する。各遺跡の資料は、いずれも住居跡などから出土したもので一括性が高い。

①石町遺跡(第104図1~12)

石町遺跡2号住居跡からは多くの土器が出土している(小池史哲編 1992)。A1類、A2類、A3類、C類、D類がある。

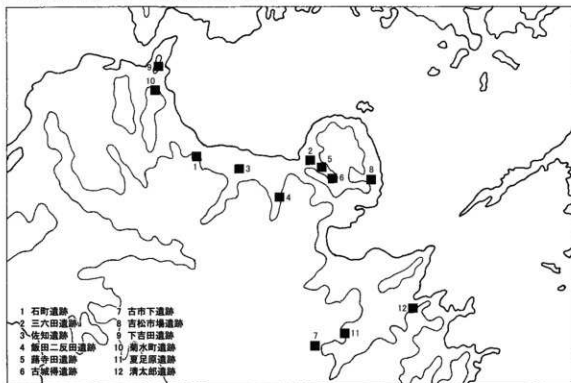
A1類 口縁部と胴部の文様が縄文地に沈線を施すもの(1、2)、疑似縄文地に沈線を施すもの(3)がある。口縁部波頂部や胴部には入組文やそれが退化したと思われる渦巻文がみられる。

A2類 縄文のみが施されたもの(4)、疑似縄文のみが施されたもの(5、6)、沈線のみが施されたもの(7)がある。このうち、6と7の口縁波頂部には縦位の隆帯が付される。7は隆帯上と両脇に縦位に沈線が、また6は隆帯上のみ沈線がみられる。報告されている多くの出土土器のうち、口縁に隆帯が付されるのは全器種の中でこの2点のみである。

A3類 内外面に条痕がみられるのみで、波状口縁を呈する(8)。

C類 9、10がこれに相当する。9は口径に比し器高が低い浅鉢形態を呈する。両者とも口縁端部に縄文が施され、体部下半に縄文と沈線による文様が配される。

D類 内外面とも条痕調整が施されるのみで、口縁端部全面あるいは一部に刻みがみられる場合がある。また、口縁形態は平縁(11)と波状口縁(12)がある。



第103図 東北九州における石町式土器出土主要遺跡及び関連遺跡

②三六田遺跡 (第104図13~20)

三六田遺跡1号竪穴住居跡出土土器である(河野典之他編 2002)。A1類、A2類、A3類、C類、D類がある。

A1類 縄文地に沈線を施すもの(13)、疑似縄文地に沈線を施すもの(14~16)がある。13の沈線内には連続した刺突がみられ、崩れた渦巻文が配される。14は4本の沈線のうち3本が波頂部下に山形に集約されるが、渦巻文等は見られない。15は波頂部に渦巻文が配される。16は波頂部を中心に弧状の沈線がみられる。

A2類 口縁部に疑似縄文のみが施されたもの(17)があり、波頂部を有する。

A3類 外面条痕調整のみもの(18)がある。

C類 口縁部と胴部に疑似縄文を配するもの(19)があり、波頂部を有する。

D類 外面に条痕が施されるもの(20)がある。20は口縁部がやや内湾気味の器形である。A2類やA3類としたものも波頂部以外の口縁部はあまり内湾が顕著ではないことから、20もA3類に分類される可能性をもつ。

③佐知遺跡 (第104図21~30)

佐知遺跡4号遺構出土土器である(坂本嘉弘編 1989)。A1類、A2類、B1類、B2類、C類、D類がある。これらのうち、A1類、A2類は少量である。

A1類 縄文地に沈線を施した文様が口縁部にみられる(21)。沈線は一部が短い弧状を呈する。

A2類 口縁部と胴部に縄文を施すもの(22)と疑似縄文を施すもの(23)がある。

B1類 縄文地に沈線による文様をもつもの(24)と疑似縄文地に沈線による文様をもつもの(25、26)がある。24は口縁部に隆帯が貼り付けられ波頂部を形成する。25の口縁部波頂部には隆帯の貼り付けはみられないが渦巻文が配される。胴部には縄文あるいは疑似縄文のみが施される。これらの口縁部は直立気味のものが多い。

B2類 口縁部と胴部に疑似縄文のみを施すもの(27、28)で、口縁部は直立気味である。

D類 内外面条痕調整のみもの(29、30)で、30は波状口縁を呈する。

④飯田二反田遺跡 (第104図31~37)

飯田二反田遺跡5号住居跡出土土器である(坂本嘉弘他編 1993)。B1類、C類、D類がある。

B1類 縄文地に沈線による文様を施すもの(31)と疑似縄文地に沈線を施すもの(32)がある。31は口縁部に縦位の隆帯を貼り付け波頂部を形成し、胴部には縄文のみが施される。32は沈線による連続山形文がみられる。器形的には、両者とも頸部に比し口縁部文様帯の占める比率が小さい。

B2類 33は口縁部と胴部に縄文のみを施す。口縁は屈曲せず直立する。

C類 縄文、沈線による文様が施される。34は浅鉢で、口縁部に縄文のみ、胴部は縄文地に沈線による文様が施される。口縁部は粘土紐貼り付けの竿の段が残り、内面は沈線状をなす。35は深鉢である。口縁端部に縄文のみが施される。

D類 内外面条痕調整によるもの(36、37)で、両者とも波頂部を有する。36は波頂部が貼り付けにより協調され、上面に刺突が施される。

⑤蔭寺田遺跡 (第104図38~41)

蔭寺田遺跡竪穴遺構出土土器である(河野典之他編 1998)。資料数は少ないがB1類、D類がある。

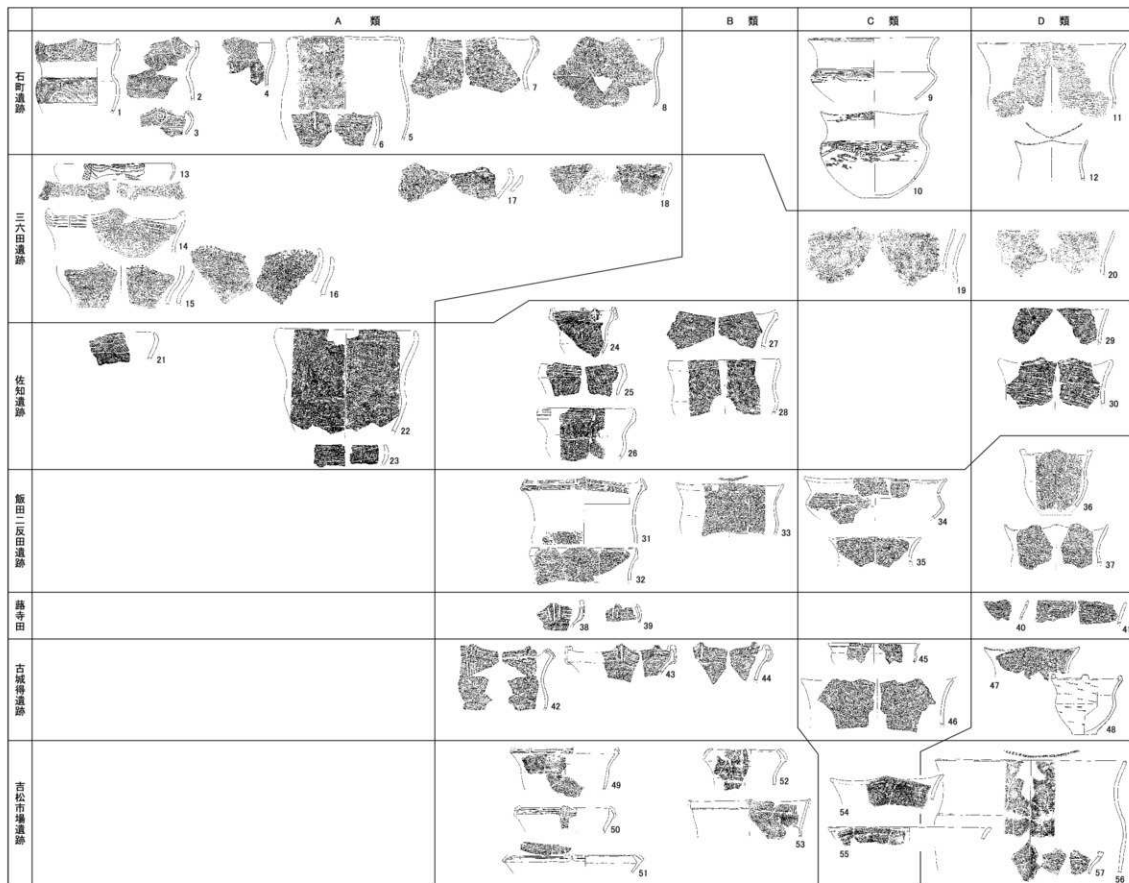
B1類 口縁部には縄文地に沈線を施す文様がみられる(38、39)。両者とも口縁部に縦位の隆帯が貼り付けられ波頂部を形成する。

D類 内外面条痕調整のもの(40、41)である。40は波状口縁を呈する。

⑥古城得遺跡 (第104図42~48)

古城得遺跡J1号竪穴出土土器である(小柳和宏編 1996)。B1類、B2類、C類、D類がある。

B1類 縄文と沈線による文様が口縁部と胴部に配されるもの(42、43)である。両者とも口縁部に縦位の隆帯が貼り付けられ波頂部を形成する。42は口縁波頂部から胴部に向かい沈線が垂下され、その下には渦巻文が



第 104 図 東北九州主要遺跡出土土器分類

みられる。

B 2類 口縁文に疑似縄文のみが施される(44)。口縁部に縦位の隆帯は貼り付けられ、波頂部を形成する。

C類 口縁部外面と胴部に縄文を施すもので、浅鉢形態のもの(45)と深鉢形態のもの(46)がある。46は波状口縁を呈する。

D類 内外面条痕調整のみのもの(47、48)である。47は波状口縁を呈し、端部に刻みが施される。48は波頂部が貼り付けにより強調される。

⑦古市下遺跡(第9、10図1~16)

古市下遺跡Ⅱ区遺物集中箇所出土土器である。B 1類、B 2類、C類、D類がある。

B 1類 縄文と沈線による文様がみられる(1~4)。1、2は口縁部は縄文地に沈線が施され、縦位の隆帯が付され波頂部を形成する。1の胴部は縄文のみが施される。

B 2類 口縁部外面に縄文のみが施されるものである(8)。口縁部は直立気味である。

C類 口縁部外面に縄文が施文される(5~7)。

D類 内外面条痕調整のみのものである(10)。

⑧吉松市場遺跡(第104図49~57)

吉松市場遺跡J1竪穴出土土器である(後藤一重 1997)。B 1類、B 2類、C類、D類がある。

B 1類 縄文と沈線による文様をもつもの(49、50)、疑似縄文と沈線による文様をもつもの(51)がある。いずれも口縁部の内傾が著しい。49の口縁部は縄文地に沈線が施され、胴部は縄文のみが施文される。口縁部には縦位の隆帯が貼り付けられ波頂部を形成するものと思われる。50は隆帯が付された口縁波頂部から沈線による文様が垂下される。51の口縁部には疑似縄文地に沈線が施され、縦位の隆帯が付され波頂部とする。

B 2類 口縁部と胴部に縄文が施される(52、53)。52は口縁部の内傾が著しく、縦位の隆帯が付され波頂部を形成する。隆帯上にも縄文がみられる。53は口縁部が直立気味である。やはり、口縁部に隆帯が貼り付けられる。

C類 口縁部に縄文がみられるもの(54、55)である。54は波状口縁を呈する。

D類 内外面条痕調整のみのもの(56、57)である。56は口縁端部に部分的に刻みが施される。57は波頂部は貼り付けにより強調される。

(5)

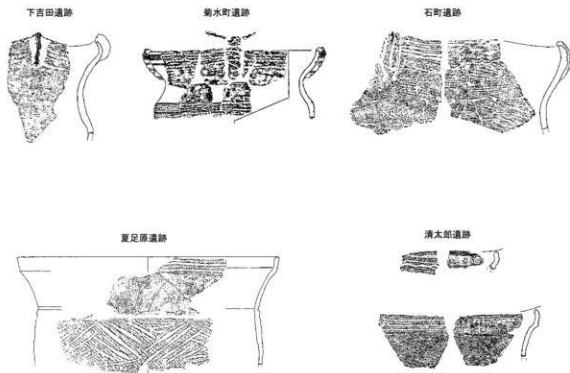
東北九州の主要遺跡出土土器を整理・検討した結果、明らかになった点や問題点について述べる。

石町式を構成する主要な土器としてA類とB類があるが、今回検討した遺跡ごとの土器組成をみると、A類、B類が共存しない傾向にあることが分かる(第104図)。A類のみみられるのが、石町遺跡、三六田遺跡である。またB類のみみられるのが、飯田二反田遺跡、路寺田遺跡、古城得遺跡、古市下遺跡、吉松市場遺跡である。そして、佐知遺跡については両者がみられる。

A類とB類の器形・文様の違いについて再度確認する。器形はA類の口縁部が緩やかに内湾するのに対し、B類は口縁部がくの字状に内傾または直立する。両者とも波頂部をもち、A類の波頂部には縦位の隆帯が付されるものと付されないものがあり、B類の波頂部には縦位の隆帯が貼り付けられる。口縁部文様はA類に渦巻文や入組文などの曲線的な文様がみられるのに対し、B類は直線的な文様のみになる。また、A1類やB1類など沈線と縄文あるいは疑似縄文による文様があるものについては、A類が地文の縄文あるいは疑似縄文の上に沈線が施されるのに対し、B類は磨滑縄文状に沈線による区画がみられる傾向にある。以上のように、A類とB類は器形・文様に顕著な違いを有し、後期後半の松丸式(水之江和同・前迫亮一 2010)や西平式へと続く器形・文様の型式変化を考えると、A類→B類という相対的な時間の流れが想定される。口縁部形態が、緩やかに内湾するものからくの字状に屈曲するものへの変化や口縁部の縦位隆帯出現の動きは、石町式と併行する近畿地方の北白川上層3期→乗寺K式(玉田芳秀・岡田憲一 2010)、山陰地方の沖丈式→権現山式(柳浦俊一 2010)、

山陽地方の四元式→彦崎K2式（千葉豊 2010）などの流れの中にもみることができ（註2）。よって、A類で構成される一群を石町式古相、B類で構成される一群を石町式新相として捉えることが可能であろう。

しかし、東北九州地域におけるA類とB類の分布状況を見ると、下記のように一様ではないため、A類とB類を単純に時期差として捉えられない側面もある。石町式分布地域は、大きく3地域に大別することができる。Ⅰ地域（山国川周辺以西の周防灘沿岸地域）：A類が主体でB類がほとんどみられない地域、Ⅱ地域（山国川周辺から国東半島周辺の地域）：A類、B類ともみられる地域、Ⅲ地域（国東半島周辺以南の地域）：B類のみがみられる地域、以上である。林潤也（林潤也 2002）も石町式分布地域内での土器の在り方の違いについて、その理解に向けた検討の必要性を説いている。ここで改めてⅠ～Ⅲ地域の検討を行い、石町式期における東北九州地域の土器相を探る。このうちA類とB類の両方がみられるⅡ地域は、前述の時間的流れで理解することができる。Ⅰ地域については、B類がみられないため、A類→B類という物差しが使えない。しかし、石町遺跡、下吉田遺跡（佐藤浩司他編 1985）、菊水町遺跡（山口信義 1988）などでA類の口縁波頂部などに隆帯を付すものがあり（第105図）、これを同様な隆帯が付されるB類と時間的併行関係にあると考えれば、隆帯のないA類→隆帯があるA類という時間的な流れとして捉えることも可能であろう（註3）。Ⅲ地域については、A類がみられずB類だけであるが、Ⅰ、Ⅱ地域と異なる点は豊後大野市夏足原遺跡（坂本嘉弘編 1984）、臼杵市清太郎遺跡（坂本嘉弘他編 2001）などで確認されている四国の片箱式土器（木村剛郎 1974）の存在である（第105図）。石町式は、近畿を発した器形・文様などの土器要素が山陽地方を經由し九州に入り、成立したものと考えられる。石町式の成立に直接係わる土器群として、林潤也（林潤也 2002）は中部瀬戸内の津島岡大遺跡出土土器（阿部芳部 1994）や四元式（平井勝 1993）などの彦崎K2式に先行する土器群をあげている。このような背景を前提とすれば、西部瀬戸内に隣接するⅠ・Ⅱ地域と豊後水道を挟み四国西南部に隣接するⅢ地域では、東方からの文化受容状況に違いが生じたことが考えられる。Ⅲ地域は、瀬戸内ルートではなく四国ルートで東方文化を受け入れ、土器については四国の土器そのものを採用したのであろう。それを可能にしたのは、前



第105図 関連遺跡の土器

代から活発に行われてきた四国地域との交流(註4)が下地にあったことは言うまでもない。石町式成立時のⅢ地域では、Ⅰ・Ⅱ地域のA類と併行して、沿岸部を中心に片粕式が分布し、山間部には豊後大野市田村東遺跡(村上久和他編 1986)などの例から北久根山式の文化圏に属していた可能性が考えられる。その後、Ⅱ地域にB類が成立した段階には、四国地域の土器文化圏などから脱し、Ⅲ地域にもB類が展開することになったのであろう。これらの状況については、今後の資料蓄積を待ち詳細を検証していきたい。以上まとめると、石町式古相段階は、Ⅰ地域：隆帯が付されないA類、Ⅱ地域：隆帯が付されないA類、Ⅲ地域：片粕式・北久根山式、石町式新相段階は、Ⅰ地域：隆帯が付されるA類、Ⅱ地域：B類、Ⅲ地域：B類が各々の地域を代表するものとして使用されていたと考えられる。

石町式を設定した林潤也(林潤也 2002)は、A類(註5)について「広い文様帯にしっかりした沈線で複雑なモチーフを描く」ものと「主文様が消失に向かうものや」「矮小化した入組文を施し、初現期の西平式を想起させる」ものがあるとし、前者を古相、後者を新相として捉えられるとしている。先に述べた隆帯のないA類→隆帯があるA類という時間的な流れと合わせ、A類の細分あるいはⅠ地域の新古の指標として捉えられよう。

また、石町式新相を代表するものとしたB類については、くの字状口縁部の屈曲が弱いものと強いもの、口縁部立ち上がり部が長いものと短いものなどのバリエーションがみられる。かつて、筆者はこれらを、口縁部の屈曲が弱く立ち上がり部が長いもの→屈曲が強くなり立ち上がり部が短いものという時間的な差として積極的に捉えようと考えた(後藤一重 1997)。石町式の次の段階である松丸式や西平式の口縁部形態や文様の直線化などを念頭に置けば、一定の傾向として積極的に捉えることも可能と思われるが、今回の検討では明確な型式変化として提示するにはいたらなかった。今後の検討課題としたい。

註

- 1 印刷物として公にされたのは2001年であるが、1992年には報告書掲載のための原稿として用意されていた。
- 2 石町式と近畿・山陰・山陽地方の諸型式を比較すると、器形や文様の細部において共通しない点も多い。しかし、口縁部形態の変化や口縁部の縦隆帯出現の動きは、汎西日本の一連の動きとして捉えることが可能と考える。
- 3 石町遺跡でも隆帯が付されるA類がみられるが極めて少数で、主体は隆帯のないA類の段階であると考えられる。
- 4 九州の鐘崎式土器や姫島産黒曜石が西南四国で確認されている。
- 5 林の分類では有文深鉢Ⅰ-a類。

文献註

- 阿部芳郎 1994 「後期第Ⅳ群土器の型式学的検討」『津島岡大遺跡4』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 伊崎俊秋編 1992 『成谷谷Ⅰ 松丸遺跡』築城町教育委員会
- 遠部慎 2002 「⑤まとめ」『荒尾・弘田糸里遺跡』豊後高田市教育委員会
- 小池史哲編 1992 『山崎遺跡・石町遺跡 一般国道10号椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』福岡県教育委員会
- 小池史哲編 1996 『上唐原遺跡Ⅱ 一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告書第5集』福岡県教育委員会
- 河野典之他編 2002 『荒尾・弘田糸里遺跡』豊後高田市教育委員会
- 木村剛郎 1974 「高知県片粕遺跡出土の土器」『考古学ジャーナル』102
- 後藤一重 1997 「ⅠⅠ堅穴出土土器について」『吉松市場遺跡』大分県安岐町教育委員会
- 後藤晃一 1993 「宇佐平野周辺における磨石陶土器の編年」『考古論集』潮見浩先生退官事業記念会
- 小柳和宏編 1996 『古城得遺跡・小川原遺跡』大田村教育委員会
- 坂本嘉弘編 1984 『大野原の先史遺跡』大分県教育委員会
- 坂本嘉弘編 1989 『佐知遺跡』大分県教育委員会
- 坂本嘉弘他編 1993 『飯田二反田遺跡』大分県教育委員会
- 坂本嘉弘他編 2001 『清太郎遺跡』大分県教育委員会

第3節 小 結

- 佐藤浩司他編 1985 『下古田遺跡』北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
- 高橋信武 1981 『片粕系土器の細分に向けて』『赤レンガ』創刊号
- 渋谷忠章他編 1989・1990 『飯田二反田遺跡発掘調査概報』大分県教育委員会
- 玉田芳秀・岡田憲一 2010 『近畿』『西日本の縄文土器 後期』真福社
- 千葉豊 2002 『沖丈遺跡出土縄文土器の歴史的意義』『沖丈遺跡』鳥根県邑智町教育委員会
- 千葉豊 2010 『山陽』『西日本の縄文土器 後期』真福社
- 富田祐一 1996 『北久根山』肥後上代文化研究会
- 林潤也 2002 『北久根山式土器をめぐる諸問題』『大綱徹夫先生古稀記念論集 四国とその周辺の考古学』大綱徹夫先生古稀記念論文集刊行会
- 平井勝 1993 『縄文後期四元式の提唱』『古代古備』第15集
- 松永幸雄 2001 『大分県中津市棒垣遺跡の縄文土器について』『縄文時代重層社会論』松永幸雄著作集刊行会
- 水之江和同・前迫亮一 2010 『九州』『西日本の縄文土器 後期』真福社
- 村上久和他編 1986 『朝地田村遺跡』朝地町教育委員会
- 村上久和編 1992 『ポウガキ遺跡』三保の文化財を守る会・中津市教育委員会
- 柳浦俊一 2010 『山陰』『西日本の縄文土器 後期』真福社
- 山口信義 1988 『菊水町遺跡』北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
- 山口信義 1989 『周防灘・豊後沿岸地域における北久根山式併行期の土器』『研究紀要』3号 北九州市教育文化事業団

3 胎土に金ウンモを含む中世土師質土器について

(1)

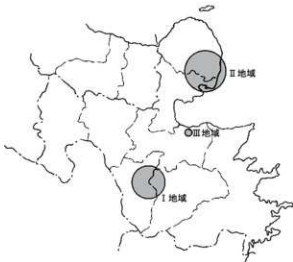
古市下遺跡出土の土師質土器の多くは、胎土に金ウンモを含むものである。このような土器は、古市下遺跡が所在する豊後大野市朝地町の遺跡ではしばしば確認されている。本稿では、豊後国内において、金ウンモを含む中世土師質土器の出土が一定程度認められる地域（註1）を検討し、その分布からみえてくる問題点を整理する。今回検討するのは豊後大野市朝地町から竹田市久住町周辺の地域（Ⅰ地域）、国東市安岐町周辺地域（Ⅱ地域）、大分市周辺地域（Ⅲ地域）である（第106図）。

(2)

Ⅰ地域で金ウンモを含む土師質土器が確認されているのは、豊後大野市朝地町、同緒方町、竹田市、竹田市久住町、同直入町の遺跡である（第107図）。豊後大野市朝地町の東側に隣接する豊後大野市大野町の状況は不明であるが、同千歳町などでは確認されていない。以下、小地域ごとの状況を概観する。

・豊後大野市朝地町

豊後大野市朝地町では、古市遺跡（宮内克己他編 1994）（註2）、一万田館跡（宮内克己他編 1994）、町墳墓群（村上久和編 1996）などの市万田川流域の遺跡で確認されている。古市遺跡では14～15世紀に比定される土器が出土している。これらの中には、金ウンモを含むものと含まないものがある。両者の間には法量に若干の差があることから、調査者は金ウンモを含まない



第106図 豊後国における金ウンモ含有土器出土地域

一群を含む一群よりも漸移的ではあるが古い傾向にあるとしている。しかし、金ウンモの有無を除けば、形態や製作手法等に大きな差異はなく、同時存在した可能性が高い。一万田館跡では15～16世紀に位置づけられる土器が出土しており、そのほとんどに金ウンモが含まれる。金ウンモを含まないのは16世紀後半に比定される京都系土師器のみである。以上から、14～16世紀の朝地町市万田川流域では、時代が下る



第107図 1地域の金ウンモ含有土器出土遺跡

- 1 一万田館跡
- 2 古市下遺跡
- 3 町墳墓群
- 4 千人塚遺跡
- 5 上深迫遺跡
- 6 小原遺跡
- 7 小路遺跡
- 8 中原遺跡
- 9 上城遺跡
- 10 石田遺跡
- 11 高畑遺跡

につれ金ウンモ含有土器の占める割合が増加する傾向が読み取れる。市万田川流域は、延応二年（1240）に豊後国守護大友能直の六男景直が大野庄上村半分の地頭職を受け継いで以来、戦国時代末まで一万田氏が本貫とした地域である。よって、これら金ウンモ含有土器は一万田氏を使用した土器であると考えられる。

・豊後大野市緒方町

大野川を挟み朝地町の南側に位置する豊後大野市緒方町では、千人塚遺跡（坂本嘉弘編 1999）で金ウンモを含む土器が出土している。遺跡は、15世紀後半～16世紀後半の墳墓遺跡である。調査者によると土器は、金ウンモ系、赤色粒子系、手づくね系の三群が認められる。赤色粒子系は器面にロクロ痕が残るもので、大友府内町跡などでみられるロクロ目土師器と同じである。また、手づくね系は京都系土師器である。金ウンモを含むものは一万田館跡の土器に極めて類似し、15世紀後半から16世紀後半に比定されるものである。しかし、16世紀以降は赤色粒子系、手づくね系に主体を譲り、金ウンモを含む土器は少数派となる。土器からみると、15世紀までは一万田氏の土器である金ウンモ系が主体であることから一万田氏との関係が強かったことが窺える。しかし、16世紀になると大友氏中樞の土器（註3）である赤色粒子系、手づくね系が主体となることから、一万田氏とのつながりが相対的に小さくなったことが想像される。

豊後大野市緒方町には、戦国時代に緒方庄政所が置かれ、戸次氏などの大友氏重臣が緒方庄衆中を組織化している。衆中には久保氏、原居氏、堀氏、阿南氏などの諸氏がいた。このような状況下において、16世紀代には大友氏中樞の勢力下へと組込まれていったものと思われる。

・竹田市

竹田市については良好な中世遺跡の調査例が少ない。このうち、竹田市久住町と豊後大野市朝地町の間に位置する稲葉川水系の地域では、上深迫遺跡B地区（城戸誠他編 2011）で金ウンモを含む土器の出土が確認することができる。遺跡出土の土師質土器は少数であるが、その中にあって一部に金ウンモ含有土器が確認される。時期的には13世紀代に位置づけられる。また、竹田市南部の玉来川流域などの地域は、良好な中世遺跡の調査例がなく実態が不明である。

・竹田市久住町

竹田市久住町では、金ウンモ含有土器を出土する遺跡がいくつか確認することができる。これらのうち、上城遺跡（椋浦幸徳編 2002）では13～14世紀に比定される土器がまとめて出土している。土器は坏・小皿ともいくつか形態分類され、形態により金ウンモを含む土器の割合が異なる。上城遺跡は本地域を本貫とする朽網

氏の居館と考えられており、朽網氏の使用する土師質土器に金ウンモ含有土器が含まれていることが分かる。その後の朽網氏の居館として小路遺跡（後藤一重編 2000）がある。小路遺跡は15世紀後半から16世紀後半にかけて存続する居館である。土師質土器は、内外面にロクロ口痕を残すロクロ目土師器、京都系土師器、京都系土師器模倣土器などが主体を占め、金ウンモを含む土器は極めて少量である。15世紀後半以降、朽網氏は前代から使用していた金ウンモ含有土器を含む在地系の土器使用を止め、大友氏中枢の土器であるロクロ目土師器や京都系土師器が主体となる。日常的な儀礼・祭祀に大友氏と同じ土器を使用するということは、大友氏の朽網氏に対する厚い信任を意味するものと理解できる。小路遺跡における金ウンモ含有土器は、15世紀中頃以前のものと16世紀代のものがある。16世紀代のものは豊後大野市朝地町一万田館出土土器と同様な器形である。柱穴から環と小皿あわせて5個体がロクロ目土師器土器4個体とともに出土したもので、地鎖などに係わる一括埋納と思われる。朝地地域からの持ち込みである可能性が高い金ウンモ土器が、館内での祭祀行為に使用されている点が注目される。朽網氏と一万田氏の良好な関係を示すものであろうか。

・竹田市直入町

竹田市直入町は中世遺跡の調査例が少ないが、高畑遺跡で金ウンモ含有土器を確認することができる（橋本和彦編 1996）。時期は13世紀代に位置づけられるものであるが、形態的には隣接する久住町の上城遺跡のものとはやや異なる。16世紀代になると、高畑遺跡でロクロ目土師器が確認されおり、資料数が少ない中ではあるが、久住町同様に在地の金ウンモ含有土器が使用されなくなるものと思われる。直入町域は大友氏を支える有力者である田北氏が本貫とする地域である。久住町の朽網氏同様、16世紀になると、日常的な儀礼・祭祀に大友氏中枢の土器が使用されるようになったと考えられる。

・小 結

以上のI地域における金ウンモ含有土器の状況をまとめると次のようになる。

- ①竹田市、豊後大野市など中世遺跡の情報が少ない地域もあるため確定できないが、現状で金ウンモ含有土器が一定量みられるのは、今回紹介した旧大野郡と旧直入郡にまたがる地域である。
- ②金ウンモ含有土器の分布する範囲は、16世紀代になるとほぼ豊後大野市朝地町域のみとなる。
- ③一万田氏の本貫地である豊後大野市朝地町では、14世紀代には一定量の金ウンモ含有土器が認められ、時代が下るといづれその占める割合が高くなり、16世紀代には在地系土器のほぼすべてを占める。
- ④竹田市久住町、竹田市直入町、豊後大野市緒方町では15世紀後半以前まで在地系の土器を使用しており、竹田市久住町では一定量を金ウンモ含有土器が占める。しかし、15世紀後半以降は大友氏中枢の土器が主体となり、金ウンモ含有土器はほとんどみられなくなる。

(3)

II地域で金ウンモ含有土器の出土を確認することができるのは、国東市安岐町を中心に、国東市国東町、杵築市、杵築市大田村の遺跡である（第108図）。同じ国東半島に位置する国東市国見町、豊後高田市、豊後高田市香々地町・真玉町、日出町では確認することができない。以下、小地域ごとの状況を概観する。

・国東市安岐町

国東市安岐町では、安岐城跡（玉水光洋他編 1988）、小野遺跡（松本啓子編 1994）、光広遺跡（松本啓子編 1998①）、両子寺遺跡（松本啓子編 1998②）、塩屋条里遺跡（松本啓子編 2001）、トガリ遺跡（松本啓子編 2005）などで出土している。13、14世紀代の土器は、塩屋条里遺跡、トガリ遺跡、小野遺跡で確認できる。このうち、13世紀代の塩屋条里遺跡、トガリ遺跡では金ウンモ含有土器の占める割合は低い。しかし、金ウンモを含まない土器との間に、顕著な形態差などは認められない。14世紀代に下るとと思われる小野遺跡では、少数ながら報告された土器には全て金ウンモが含まれる。15、16世紀代については光広遺跡、安岐城跡で出土している。光広遺跡は15世紀後半から16世紀前半のものであるが、報告された中で金ウンモ含有土器とそうでないものがある。一方、安岐城跡は16世紀後半を主体とするもので、京都系土師器を除くすべてに金ウンモ

の含有が認められる。以上から、安岐町域では時代が下るにつれ金ウモン含有土器が増す傾向があり、16世紀後半には在地系の土器ほぼすべてが金ウモン含有土器となることが分かる。

・国東市国東町

国東市国東町では、重藤遺跡（島田正浩他編 1991）、前田遺跡（永松みゆき他編 1997）、原遺跡七郎丸1地区（藤本啓二他編 1999）、陽弓遺跡（綿貫俊一編 1996）などで出土している。これらは13～14世紀代のものであるが、重藤遺跡を除き金ウモン含有土器の占める割合は非常に低い。重藤遺跡は国東町南部に位置し、旧武蔵郷に属する。小領主の館跡と思われる遺跡からの出土土器には、金ウモンを含むものと含まないものがある。両者間には器形や製作技術に違いが認められる。国東町では旧国東郷にある遺跡では、金ウモン含有土器の占める割合は非常に低いが、町南部の旧武蔵郷地域では一定量を占めることが分かる。

・杵築市

杵築市では、八坂中遺跡、八坂本庄遺跡、八坂久保田遺跡（後藤一重他編 2003）で出土を確認することができる。時間的には12～14世紀のものに散見されるが、その割合は低く半数に遠く及ばない。

・杵築市大田村

杵築市大田村では、岡ノ前遺跡（小柳和宏編 1994）、ヒヨウ遺跡（村上久和編 1999）などで確認することができる。このうち岡ノ前遺跡は田原氏に係わる居館跡と考えられ、12～15世紀の土師質土器が出土している。金ウモンが含まれる土器は14世紀代に比定される土器の一部にみられるが、全体としてはその占める割合は低い。金ウモン含有土器は、国東市国東町の重藤遺跡出土の坏と形態的にも類似しており、旧武蔵郷周辺からの持ち込みである可能性が高い。また、ヒヨウ遺跡では14、15世紀に比定される土器が出土しており、すべてに金ウモンが含まれる。ヒヨウ遺跡のある俣水地区は、岡ノ前遺跡とは異なり旧安岐郷に属する地域である。水系的にも安岐川水系に位置づけられることから、土器についても国東市安岐町と同様な状況にあることが分かる。

・小結

以上のⅡ地域における金ウモン含有土器の状況をまとめると次のようになる。

- ①金ウモン含有土器が一定量以上使用されるのは、旧安岐郷と旧武蔵郷内にある遺跡である（註4）。
- ②両郷から外れるとその占める割合は極めて低くなる。この傾向は中世を通して変わらない。
- ③微量が出土する遺跡まで加えると、国東郡から速見郡にまたがる範囲に供給されていることが分かる。この範囲は東国東型瓦器棺の分布と概ね重なる。
- ④旧安岐郷・武蔵郷内においても、14、15世紀頃までは金ウモンを含まない土器も一定量伴することもある。
- ⑤旧安岐郷・武蔵郷内においては14、15世紀以降占める割合が増し、16世紀代には在地系土器のほぼすべてを占めるようになる。

（4）

Ⅲ地域で金ウモン含有土器の出土が確認できるのは、大分市に所在する中世大友府内町跡（坂本嘉弘他編2009



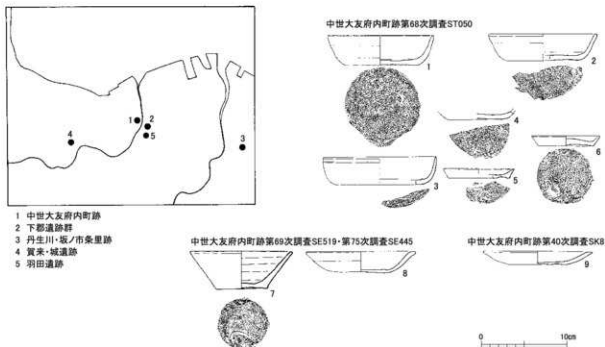
第108図 Ⅱ地域の金ウモン含有土器出土遺跡

ほか)、下部遺群(坪根伸也他編 2008ほか)、丹生川・坂ノ市条里跡(五十川雄也他編 2009)、賀来・城遺跡(小柳和宏編 1997)、羽田遺跡(長直信他編 2012)などである(第109図)。

以上の遺跡のうち、金ウモン含有土器が一定量を占めるのは下部遺跡群と賀来・城遺跡である。下部遺跡群では中世全般の土器が出土する中で、12~13世紀に比定される土器に金ウモン含有土器が顕著にみられる。その割合は遺構により異なるが、概ね3~5割程と思われる。また、賀来・城遺跡は13世紀代に比定される土器が出土しているが、金ウモン含有土器は半数を超える。中世大友府内町跡、丹生川・坂ノ市条里跡、羽田遺跡では金ウモン含有土器の占める割合は圧倒的に低い。中世大友府内町跡では、14~16世紀に及ぶ多くの遺物が出土している。土師質土器は、14世紀から15世紀中頃までは前代からの系譜を引くハコ型の坏と小皿がみられ、15世紀後半以降内外面にロクロ痕を残すロクロ目土師器が出現する。その後16世紀の前半に京都系土師器が導入され、以降土師質土器の主体となる。これらのうち、金ウモン含有土器は、ハコ型のものに確認することができる。以下、中世大友府内町跡における特徴的な事例を紹介する。

中世大友府内町跡第68次調査ST050出土の坏・小皿6個体(第109図1~6)すべてが金ウモン含有土器である(坂本嘉弘他編2009)。遺構は土坑墓で、14世紀代に比定されている。埋葬儀礼に使用された土器すべてが、府内町では極めて少数派の金ウモン含有土器であるというのは、偶然ではなく意図的なものを感じる。

中世大友府内町跡第69次SE519・第75次調査SE445から、多量の京都系土師器模倣土器や京都系土師器に混じり金ウモン含有土器が出土している(高橋信武他編 2010、後藤一重編 2010)。金ウモン含有土器のうち1点は、口径に比し器高が高く、体部が斜方向に直線的に伸びる坏(第109図7)で、安岐郷・武蔵郷産と思われる。国東半島は、豊後守護大友氏の有力庶家で同紋象筆頭格の田原氏とその庶流が勢力基盤とする地域である。田原氏は大友氏に次ぐ勢力をもち、大友氏が最も警戒する一族である。土師質土器についても、15世紀後半以降岡氏は明らかに異なるものを使用している。このような状況下において、田原氏の土器が混じる点は注目される。また、このほかにも本遺構出土土器には金ウモン含有土器がある。多数ある京都系土師器のうち1点(第109図8)に金ウモンが含まれる。このような金ウモン含有の京都系土師器の例は、中世大友府内町跡第40次SK8出土土器(高橋信武他編 2008)などにもみられる(第109図9)。京都系土師器は豊後国内で生産されたと考えられ、精製粘土を使用しあまり砂礫を含まないことで共通する。府内町周辺での一元的な生産を想定して



第109図 III地域の金ウモン含有土器出土遺跡と金ウモン含有土器

いたが、今後の検討課題となろう。

・小結

Ⅲ地域における金ウンモ含有土器の状況をまとめると次のようになる。

①13、14世紀代における確認例が顕著で、その割合が半数を超える遺跡もある。これに対し、15、16世紀代では極めて稀な存在となる。

②各時代を通し金ウンモ含有土器が100%近くを占めることはない。

(5)

金ウンモを含む土師質土器の検討から分かったことや問題点を整理する。

①金ウンモ含有土器の生産地について

I、II地域では16世紀代に金ウンモ含有土器をほぼ100%使用する地域があることから、地域内に金ウンモ含有土器の生産地があったと考えられる。I地域では、16世紀段階に在り土器のほぼ100%を金ウンモ含有土器が占める豊後大野市朝地町に土器生産地があったと推測することができる。豊後大野市朝地町は一万田氏の領する地域で、一万田氏がその生産に大きく係わった可能性が高い。II地域では旧安岐郷である国東市安岐町において、16世紀段階に在り土器のほぼ100%が金ウンモ含有土器となる。隣接する国東市武蔵町の状況が不明であるが、前段階の状況から安岐町と同様に金ウンモ含有土器を高い割合で使用していたと推測することができる。このことから、これらの地域内に金ウンモ含有土器生産地があったと考えられる。この地域は田原氏が領しており、土器生産に深く係わったと思われる。III地域については、中世前半段階で一定量が確認されるが、その後占める割合が激減する。現段階では他地域からの搬入である可能性が高いと考えられるが、今後の検討を要する。

②金ウンモ含有土器の供給範囲について

I、II地域の金ウンモ含有土器生産地から一定量の土器が供給される範囲は、現状で見ると最大で複数の旧郷程度の広さである。I地域については、15世紀後半以降その範囲は大きく縮小する。II地域については中世を通じてほぼ変化がないようである。ここで問題となるのはIII地域で出土する中世前半の金ウンモ含有土器の生産地である。I地域あるいはII地域のどちらから供給されたとしても、生産地からの一定量供給範囲は大きく広がることとなる。今回は確認できなかったが、生産地からIII地域までの間の地域においても同様な供給状況がみられるとすれば、郡を越える広さの供給圏を有することになる。一方、生産地から遠く離れた飛び地的な状況として供給されているのであれば、豊後国の政治・文化の中心である府内周辺にみられる特殊状況と捉えられる。今後の検討が必要となつてこよう。

③土師質土器生産・供給の時代的变化について

金ウンモ含有土器が一定量みられる地域においても、中世前半までは金ウンモを含まない他生産地の土器を一定量使用しており、一消費地に対し複数産地の土器が供給される状況にある。このような状況は領主館などでもみることができるところから、中世前半には複数の生産地の製品が自由に消費地まで届く状況であったことが分かる。ところが中世後半、特に15世紀後半以降、特定産地の限られた土器が大半を占める例が目立ってくる。I地域では、大友氏と同じロクロ目土器が府内町から遠く離れた朽網氏や田北氏などの領内で主体的に使用され、一万田氏の領内では金ウンモ含有土器が主力となる。また、II地域においても、田原氏が領する安岐町などでは金ウンモ含有土器がほぼ100%を占める。III地域でもロクロ目土器や京都系土器が主体となるなど、特定産地と消費地が強く結びついた状況が顕著になる。朽網氏や田北氏に比べより府内町に近い一万田氏の領内でロクロ目土器が全く使用されないことから、府内町からの距離では説明できない使用状況、即ち大友氏と在地領主の関係の深淺などを反映した政治的背景を考えざるを得ない。田原氏が強い影響力を有する国東半島地域でも15世紀後半以降、大友氏のロクロ目土器に対抗するように独自の形態の土器を使用し、ロクロ目土器は全く使用されない。この段階、国東半島地域では金ウンモ含有土器が田安岐郷・武蔵郷などに供給されるが、兩郷以外では金ウンモを含まない同様な形態の土器が生産される。複数の生産地にまたがり同一形態の土器が生

産されるのは、田原氏が自らの領内で使用する土師質土器生産に強く係わったためと考えられる。以上のように、中世後半には、土師質土器のものに政治的な状況が強く反映されるようになる。すなわち、各領主の土師質土器生産に対する関心が強まり、領主単位ごとに土器形態の統一化が図られるようになる。これには、土師質土器を使用し執り行われる各種儀礼に対する重要度が増し、各領主にとって欠かすことのできない重要なものになっていたことがその背景にあるものと思われる。

註

- 1 主としては調査報告書から金ウモン含有土器の存在を確認した。しかし、土器胎土についての記述がない報告書もあり、今回示した金ウモン含有土器の分布範囲は、将来的には多少変動する場合もある。
- 2 ここで取り上げる古市遺跡は1994年報告のものである。本文でも触れたが、1994年報告の古市遺跡は今回報告の古市下遺跡と位置的に重複するもので、同一遺跡である。
- 3 赤褐色を呈し内外面にロクロ痕を残す土器は15世紀後半から16世紀にかけ、形態変化をしながら存続する。大友氏館がある府内町でみられる土師質土器の中核をなし、府内町以外では大友氏を支えた南群衆が領する地域でも使用が確認されている。
- 4 旧武蔵郷の中心を占める国東市武蔵町での調査例がないため、旧武蔵郷の詳細な状況は不明である。しかし、武蔵町に隣接する国東市国東町重藤遺跡で一定量の金ウモン含有土器が出土していることから、重藤遺跡と一定量の出土が認められる国東市安岐町の間にある武蔵町も同様な状況であろうと想定することが可能である。

文献註

- 五十川雄也他編 2009『丹生川坂ノ市条里跡 丹生遺跡群』大分県教育委員会
 城戸誠他編 2011『上深迫遺跡 下坂田東遺跡、下坂田西遺跡』竹田市教育委員会
 後藤一重編 2000『小路遺跡 上屋敷遺跡』大分県久住町教育委員会
 後藤一重他編 2003『八坂の遺跡』大分県教育委員会
 後藤一重編 2010『豊後府内16』（第3分冊）大分県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第48集
 大分県埋蔵文化財センター
 小柳和宏編 1994『豊後国田原別符の調査』I 大田村教育委員会
 小柳和宏編 1997『ガラジ遺跡 植田遺跡 植田条里遺跡』大分県教育委員会
 坂本嘉弘編 1999『千人塚遺跡』緒方町教育委員会
 坂本嘉弘他編 2009『豊後府内12』大分県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第41集 大分県埋蔵文化財センター
 島田正浩他編 1991『重藤遺跡・下平遺跡』国東町教育委員会
 高橋信武編 2008『豊後府内10』大分県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第26集 大分県埋蔵文化財センター
 高橋信武他編 2010『豊後府内16』（第2分冊）大分県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第48集
 大分県埋蔵文化財センター
 玉水光洋編 1988『安岐城跡 下原古墳』大分県教育委員会
 長直信他編 2012『羽田遺跡3』大分県教育委員会
 坪根伸也他編 2008『下郡遺跡群VI』大分県教育委員会ほか
 横浦幸徳編 2002『上城遺跡』久住町教育委員会
 永松みゆき他編 1997『六田遺跡・前田遺跡・秋国遺跡・外園遺跡』国東町教育委員会
 橋本和彦編 1996『高畑遺跡』直入町教育委員会
 藤本啓二他編 1999『原遺跡七郎丸1地区・口寺遺跡』国東町教育委員会
 松本啓子編 1994『小野・大魔遺跡』安岐町文化財調査報告書第3集 安岐町教育委員会
 松本啓子編 1998①『光広遺跡（竿地区）』安岐町文化財調査報告書第7集 安岐町教育委員会
 松本啓子編 1998②『岡子寺閩遺跡』安岐町文化財調査報告書第8集 安岐町教育委員会
 松本啓子編 2001『塩屋糸里遺跡』安岐町文化財調査報告書第9集 安岐町教育委員会
 松本啓子編 2005『川べつ遺跡・トガリ遺跡・光広蔵所遺跡』安岐町文化財調査報告書第10集 安岐町教育委員会
 宮内克己他編 1994『田村遺跡・池在遺跡・古市遺跡・一万田館跡』朝地地区遺跡群発掘調査報告書Ⅱ
 朝地町教育委員会
 村上久和編 1999『ヒヨウ遺跡』大田村教育委員会
 綿貫俊一編 1996『横手遺跡群』大分県文化財調査報告書第93集 大分県教育委員会

第4章 古市上遺跡

第1節 調査の概要

1 調査の経緯

古市上遺跡は、大分県豊後大野市朝地町大字市万田字古市に所在する弥生時代後期から古墳時代前期前葉の遺跡である。古市上遺跡の発掘調査（本調査）は、一般国道57号大野竹田道路建設に伴い国土交通省九州地方建設局大分河川国道事務所からの委託を受け、大分県教育庁埋蔵文化財センターが実施した。

現地での調査期間は2010年（平成22年）1月12日から2月4日で、発掘調査面積は1,462㎡である。遺跡の表土剥ぎは道路工事の施工業者の重機を使用して2010年1月6日に実施し、本調査については、発掘作業員の雇用や労務管理・遺構検出や遺構掘削・実測や写真撮影・安全管理などの発掘支援業務を株式会社島田組に委託した。また、古市上遺跡の本調査と併行して、遺跡の北東約100mの地点で、「古市下遺跡」の発掘調査（調査期間2010年1月8日から2月15日）が実施されている。

発掘調査は道路建設工事と併行しながら実施し、工事工程と調整を図りながらの調査であった。また、調査期間中は厳寒期に当たり、霜柱や土の凍結など悪条件が重なったが、発掘作業員の皆さんの献身的な努力により、工期に遅れることなく調査を無事に完了することができた。

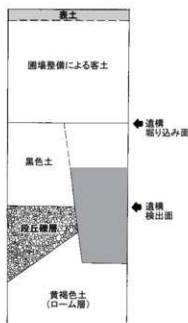
2 調査区の概要と基本層序

古市上遺跡の発掘調査では、調査対象地区を世界座標に乗せた10mの方眼で区画している。それぞれの区画には西から東へA～H、北から南へ12～16の番号を付し、アルファベットと数字の組み合わせで各々の区画を呼称することにした（第111図）。なお、調査区の区割りと区画の呼称法については、古市下遺跡でも共通の方法を採用している。

古市上遺跡は、市万田川北側に展開する河岸段丘上に立地する。調査区は北東から南西にかけて緩斜面をなし、調査区の南西側には人為的な遺構は分布していない。調査区の南側はさらに標高が低くなり、調査区南辺から約50m南には市万田川が流れている。建物・土坑墓などの遺構は、調査区の北側および東側に集中しているが、これらの遺構の分布する地点が集落の端部に相当することになる。

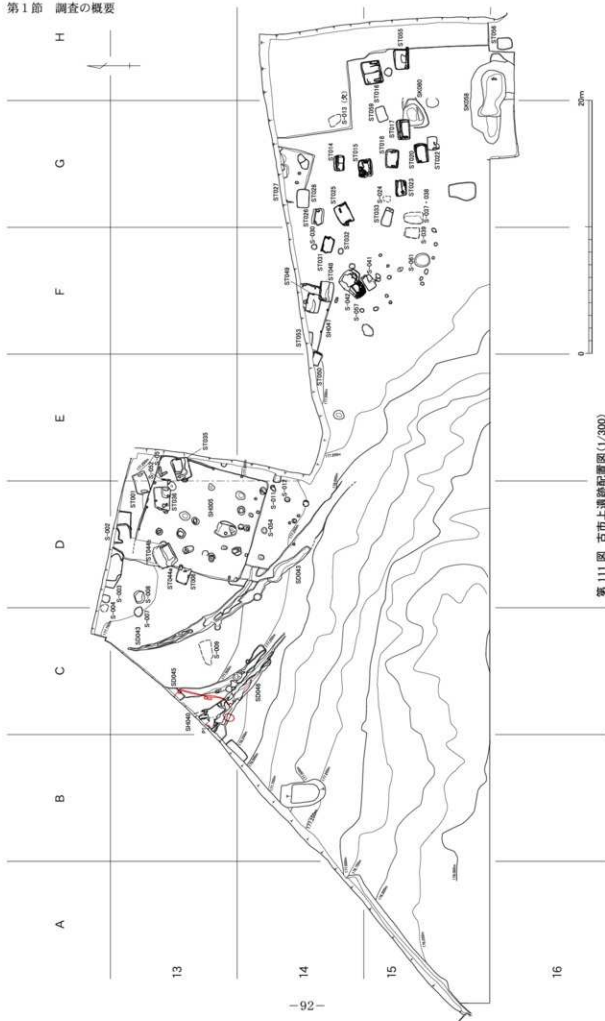
本調査区の基本層序（第110図）は、以下の通りである。まず、耕作土である表土下は昭和60年代に実施された大規模圃場整備の際に造成された客土である。客土の下位には黒色土が堆積し、黒色土の下位が黄褐色を呈するローム層である。建物・土坑墓などの遺構は黒色土中から掘り込まれていることを確認したが、黒色土中で遺構プランの識別を行うことは困難であったため、実際の遺構検出は地山であるローム層上面で行ったものが多い。また、調査区南側のA15～H15区付近には河岸段丘に由来する段丘礫層が露出していた。

本調査で確認した遺構は、堅穴建物跡4基、土坑墓（木棺墓）29基、土坑3基、溝3基、柱穴少数である。以下、遺構と出土遺物の詳細を報告する。その他、近世以降の掘り込みや自然の落ち込み、風倒木痕なども存在したが、これらについては詳細な記述を割愛する。



第110図 古市上遺跡土層模式図

第1節 調査の概要



第 111 図 古市上遺跡配置図(1/300)

第1表 古市上遺跡遺構一覧表

遺構名	遺構の位置	規模 (m)			出土遺物	備考
		長	軸	深さ		
ST001	D13~E13区	1.69	1.13	0.21	打製石器	土坑墓、S4005を切る
S-002	D13区	6.05	1.24	0.24	近世陶磁器	掘削の結果、攪乱と判断
S-003	D12区	0.60	0.60	0.24		掘削の結果、自然の落ち込みと判断
S-004	D12区	0.61	0.56	0.18		掘削の結果、自然の落ち込みと判断
SH005	D13~E14区	8.90	8.23	0.31	土器・磨製石鏡 (未成品含む)・台石	大型の竪穴住居跡 ST01・006-035・036-044に切られる
ST006	D13区	1.25	1.02	0.55	土器	土坑墓、S4005を切る
S-007	C13区	0.77	0.68	0.16		掘削の結果、自然の落ち込みと判断
S-008	D13区	0.97	0.82	0.20		掘削の結果、自然の落ち込みと判断
S-009	C13区	1.95	0.85	0.05		掘削の結果、自然の落ち込みと判断
S-010	—	—	—	—		欠番
S-011	D14区	0.55	0.37	0.11		掘削の結果、自然の落ち込みと判断
S-012	E14区	0.62	0.53	0.13		掘削の結果、自然の落ち込みと判断
S-013	G14区	0.50	0.40	0.30		掘削の結果、風倒木と判断
ST014	G14区	1.23	0.82	0.14	土器	土坑墓
ST015	G14~G15区	1.42	1.10	0.30	土器・土器片加工品	土坑墓、腰が多く検出される
ST016a	H15区	1.52	0.92	0.35	土器	土坑墓、土坑墓2基からなる
ST016b	H15区	1.52	0.88	0.40		
ST017	G15区	1.59	1.02	0.47		土坑墓、S4005を切る
ST018	G15区	1.46	1.04	0.59	土器	土坑墓、腰が多く検出される
S-019	—	—	—	—		欠番
ST020	G15区	1.53	1.04	0.57		土坑墓、腰が多く検出される
S-021	—	—	—	—		欠番
ST022	G15区	1.09	0.78	0.30		土坑墓
ST023	G15区	1.26	0.87	0.35		土坑墓
S-024	—	—	—	—		掘削の結果、自然の落ち込みと判断
ST025	G14区	1.54	1.14	0.14		土坑墓
ST026	G14区	1.35	0.91	0.32		土坑墓
SH027	G14区	4.29	(2.70)	0.66	土器・土器片加工品・磨製石鏡・打製石鏡	竪穴建物、ST028に切られる
ST028	G14区	1.48	1.00	0.13	土器	土坑墓、S4027を切る
S-029	—	—	—	—		欠番
SP030	F14区	0.44	0.40	0.23		ビット (柱穴?)
ST031	F14区	1.33	0.86	0.25		土坑墓
SP032	F14区	0.47	0.39	0.20		ビット (柱穴?)
ST033	G15区	1.48	0.70	0.22		土坑墓
S-034	—	—	—	—		欠番
ST035	E13区	1.81	1.30	0.73	土器	土坑墓、S4005を切る
ST036	D13区	1.82	1.26	0.40	土器	土坑墓、S4005を切る
S-037	G15区	0.80	0.60	0.44		掘削の結果、自然の落ち込みと判断
S-038	—	—	—	—		掘削の結果、自然の落ち込みと判断
S-039	F15区	0.60	0.40	0.20		掘削の結果、自然の落ち込みと判断
SH040	C13区	4.66	(2.32)	0.27	土器	竪穴建物、SD045・046に切られる
ST041	F15区	1.21	0.80	0.31		土坑墓
ST042	F14区	1.19	1.17	0.54	土器	土坑墓、腰が多く検出される
SD043	C13~D14区	22.18	2.29	0.18	土器・土器片加工品・磨製石鏡	溝
ST044a	D13区	1.84	0.88	0.44	土器・赤色顔料	土坑墓、赤色顔料遺布あり、 ST044b・SH005を切る
ST044b	D13区	1.82	0.77	0.37	土器	土坑墓、ST044aに切られる
SD045	C13~C14区	8.28	0.81	0.11	土器・土器片加工品	溝、SH040を切る。SD046に切られる
SD046	C13~C14区	9.44	2.11	0.25	土器・土器片加工品	溝、SH040・SD045を切る
SH047	E14~F14区	5.34	(2.64)	0.20	土器・磨製石鏡	竪穴建物、 ST048・049・050・053に切られる
ST048	F14区	1.60	1.10	0.35	土器	土坑墓、 SH047を切る。ST049に切られる
ST049	F14区	1.51	1.09	0.55	土器・磨製石鏡	土坑墓、SH047・ST048を切る
ST050	E14区	1.09	0.80	0.26		土坑墓、SH047を切る
S-051	—	0.74	0.62	0.18		欠番
S-052	—	0.71	0.41	0.20		欠番
ST053	F14区	(0.79)	(0.30)	0.38		土坑墓、SH047を切る
SP054	D14区	0.50	0.47	0.23		ビット (柱穴?)
ST055	H15区	1.55	0.82	0.24		土坑墓
ST056	H16区	1.19	0.91	0.08		土坑墓
SP057	F14区	0.30	0.30	0.25	土器	ビット (柱穴?)
SK058	G15~H16区	6.54	3.40	0.85	土器・打製石鏡	竪穴土坑
ST059	G15区	1.16	0.80	0.22		土坑墓
SK060	G15区	2.40	1.94	0.75		土坑、ST017に切られる
SK061	F15区	1.22	1.06	0.31		土坑、時期不明

*黄色は竪穴建物跡、青は溝・縦掘けは土坑墓

第2節 遺構と遺物

1 竪穴建物跡

SH005

SH005（第112図）はD13～E14区に位置する正方形プランの竪穴建物跡である。規模は南北（長軸）8.9m、東西（短軸）8.23m、深さ31cmで、古市上遺跡の中では大型の規模となる竪穴建物跡である。後述する土坑墓6基（ST001・ST006・ST035・ST036・ST044A・ST044B）と切り関係を有し、すべての土坑墓に切られている。また、確認調査実施の際のトレンチの掘り下げによって、建物跡西辺付近が一部破壊を被っている。

主柱穴は13基を敷え、その構成は四隅の柱穴が2基一対となり、それぞれ一対の柱穴間に別個の柱穴を1基ずつ、さらに竪穴のほぼ中央に1基の柱穴を配置している。柱穴の中でP8・P9・P12の付近には、柱の抜き取り土と推定されるローム層の橙褐色とクロボクの黒色土が混じる土がブロック状に堆積していた。また、P1の底面近くには炭化材が残存しており、P1とP18の間には台石が1個置かれていた。

建物床面の南側には柱穴と重複して、南北（長軸）1.6m、東西（短軸）1.3m、深さ25cmの皿状の土坑（P18）が設けられている。土坑の埋土には炭化物および焼土が含まれており、その内部からは磨製石鐮の未成品（第113・114図19～25）や流紋岩の破片が出土した。また、土坑の南西には大型の台石が1個置かれていた。当該土坑の存在によって、この竪穴建物跡で磨製石鐮の製作が行われていた可能性が考えられる。

北壁・西壁・南壁の壁際には、径10～20cm、深さ20～30cm前後の小柱穴が設けられている。壁際に貼られていた板材を固定または支えるための杭が設けられていたものであろうか。

出土遺物には、土器片と磨製石鐮および磨製石鐮の未成品がある。土器片には縄文時代後期のものと弥生時代後期のものがあり、前者は混入品と思われる。後者は土器の特徴から、弥生時代後期前葉から中葉のもので、これらが建物跡の時期を示唆する遺物である。また、前述したように、磨製石鐮未成品の大半は建物跡の施設のひとつである皿状の土坑の内部から出土している。

第113・114図は、SH005からの出土遺物である。

1～4・8・10は壺である。1は口縁部の破片で、垂下口縁の上端に平坦面を有する形態になる。口縁部上面に退化した勾玉状浮文、口縁部外面に「ハ」の字状の沈線文を施す。2は頸部付近の破片で、外面に4条（多条）の三角突帯をもつ。3は複合口縁を有するもので、二次口縁の外面に櫛波状文を施文している。4は胴部破片で、残存部の上端に小さなベルト状突帯をもつ。1・2は弥生時代後期前葉、3は弥生時代後期中葉、4は弥生時代後期後葉から末葉の所産である。4は他の多数を占める土器片と時期が合わないで、混入品であろう。8・10は底部である。

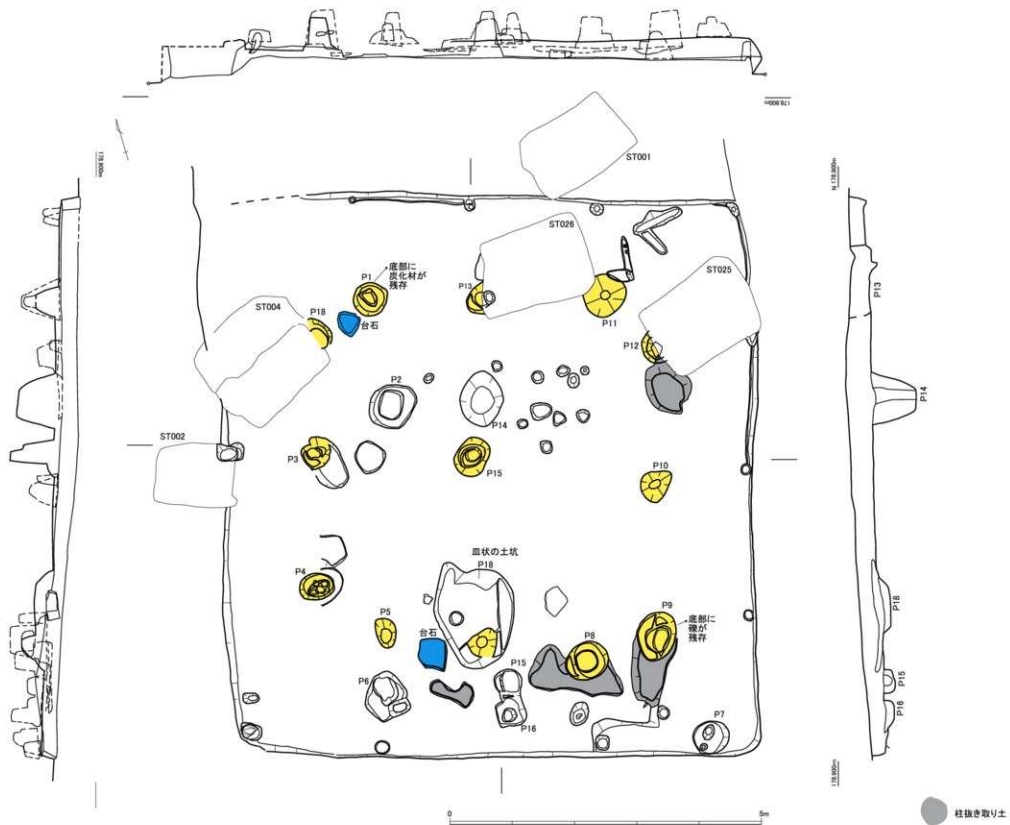
5～7・9・11～14は甕である。5～7は肩部外面に櫛横平行文または波状文を施文するもの。外面に刷毛目調整を行わず、ナデのみを施す「粗製甕」とよばれるものの一種である。9は底部で、粗製甕の底部である可能性がある。11～13は粗製甕とは異なる色調・胎土をもつ甕である。14は上底気味となる底部で、外面に刷毛目調整を施す。

15・16は小破片であるが、鉢などの器形に復元されるものである。

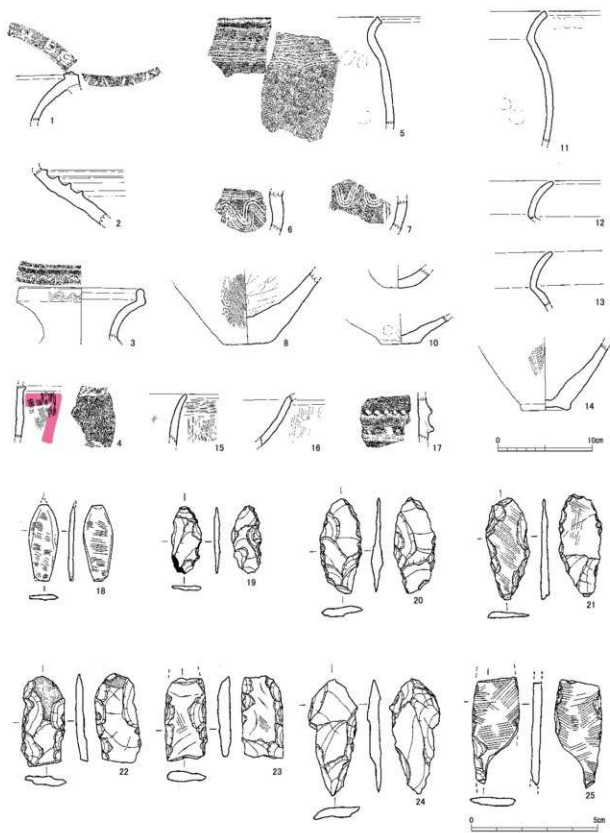
17は外面に2条の刻目突帯をもつ破片で、下城式の甕である。弥生時代中期に比定されるものであることから、混入品であろう。

18～29は石器である。このうち、18～28は磨製石鐮およびその未製品で、流紋岩を素材とする。前述したとおり、未製品である19～25は建物内南側の皿状土坑（P18）からまとまって出土した。28は姫島産黒曜石の剥片、29は安山岩を素材とする扁平打製石器である。

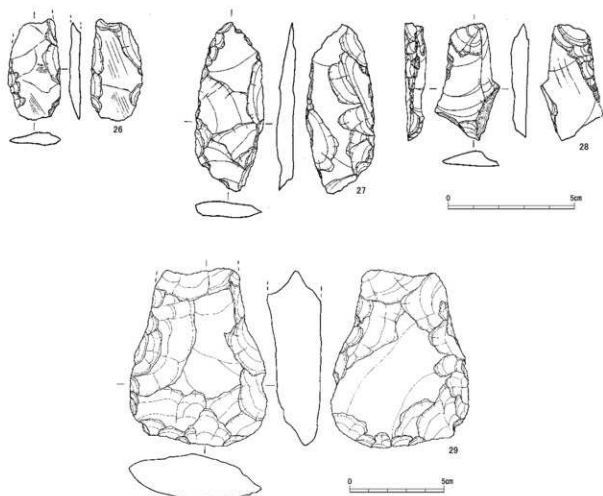
なお、混入品と思われる縄文時代後期の土器は、他の遺構や包含層から出土した縄文時代の遺物とまとめて、第138図で図示している。



第112 図 古市上遺跡SH005(1/60)



第113図 古市上遺跡 SH005 出土遺物①(土器は1/4、石器は2/3)



第114図 古市上遺跡 SH005 出土遺物②(2/3または1/2)

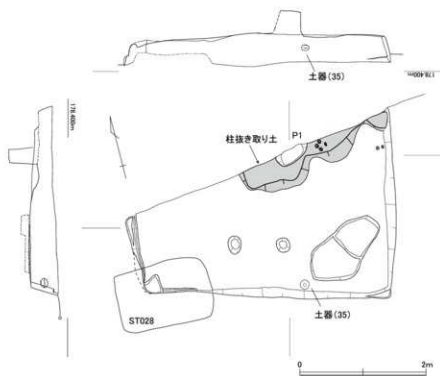
SH027

SH027 (第115図) は、G14区に位置する正方形プランの竪穴建物跡である。規模は南北3.0m以上、東西4.2m、深さ44cmで、北側は調査区外に伸びる。後述する土坑墓ST028に切られており、建物の南西隅付が破壊されている。

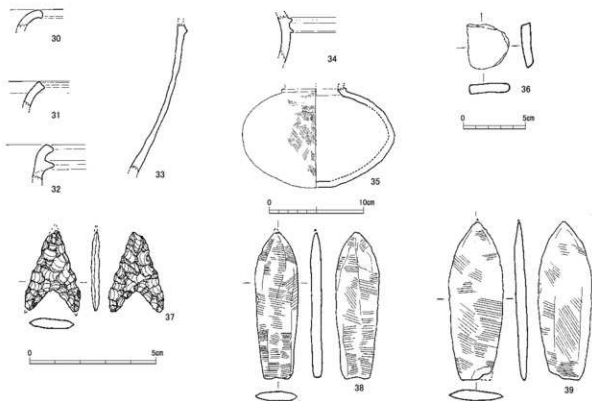
床面の南側に径20～25cm、深さ20cm程度の柱穴2基を検出したが、これらは主柱穴ではない。主柱穴と推定されるものは、調査区北壁近くで検出された柱穴(P1)1基のみで、柱穴の規模は径25～45cm、深さ40cmである。また、P1の周囲には、柱の抜き取り土と推定されるローム層の橙褐色とクロボクの黒色土が混じる土がブロック状に堆積していた。建物の南西隅付には浅い壁溝が設けられていたが、他の部位では検出できなかった。南壁中央やや東寄りの地点からは、頸部以上を欠失した長頸壺が底部を上にした状態で出土した。出土したレベルは埋土の中位、すなわち床面から20cm程度浮いた地点であった。出土状況から考えると、建物の廃絶儀礼に関連する遺物である可能性が考えられるが、それを断定することはできなかった。

その他の出土遺物として、土器片や土器片加工品、打製石鏃、磨製石鏃がある。建物の時期は長頸壺の特徴などから、弥生時代後期中葉であろう。

第116図は、SH027からの出土遺物である。30～32は弥生土器の甕の口縁部である。33は壺の胴部で、残存部の上端に断面三角形の突帯が貼付されている。34も壺の胴部と思われ、M字状突帯をもつ。35は長頸壺で、口縁部を欠損する。この口縁部は意図的に打ち欠かれた可能性がある。底部には僅かに平底を残し、外面には刷毛目調整が認められる。36は土器片加工品である。37は姫島産黒曜石を素材とする打製石鏃、38・39は流紋岩を素材とする磨製石鏃である。37の打製石鏃は縄文時代の所産である可能性が高く、混入品であろう。



第 115 図 古市上遺跡SH027(1/60)



第 116 図 古市上遺跡SH027出土遺物(土器は1/4、土製品は1/3、石器は2/3)

SH040

SH040 (第117図)は、C13区に位置する正方形プランの竪穴建物跡である。後述する溝SD045・SD046の構築によって、上面が削平を受けているため、平面形態が不明瞭であるが、隅丸方形プランであった可能性が高い。規模は南北5.2m以上、東西2.95m、深さ15cmで、北側と西側は調査区外に伸びる。溝SD045・SD046と切り合い関係を有し、遺構の上面および建物跡南壁が破壊されていた。

主柱穴と推定されるものは、調査区西壁に接して検出されたP1で、その周囲には柱の抜き取り土と推定されるローム層の橙褐色とクロボクの黒色土が混じる土がブロック状に堆積していた。また建物東壁に接して、径20～25cm、深さ30cm前後の柱穴が検出された。これらは壁際に貼られていた板材を固定または支えるために設けられた杭の痕跡と推定される。

また、床面に焼土が検出される部位があり、この部分は地床炉の一部であった可能性が高い。

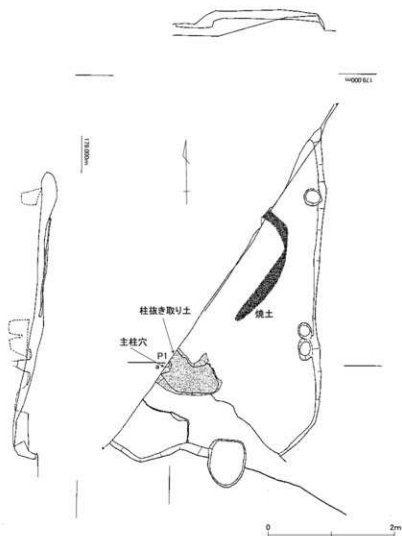
出土遺物には、土器片が少量認められたのみで、図示できるような資料は存在しない。従って、建物跡の詳細な時期は不明であるが、他の建物と同様に、その構築年代を弥生時代後期中葉前後に比定しておきたい。

SH047

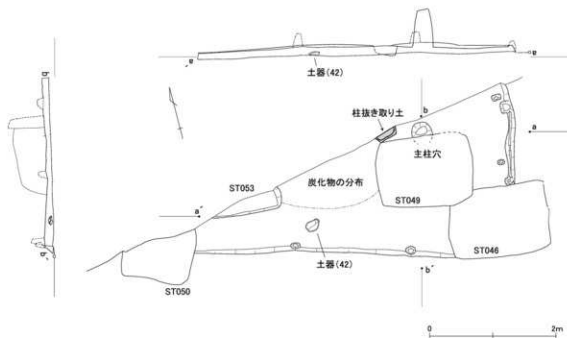
SH047 (第118図)は、E14～F14区に位置する正方形プランの竪穴建物跡である。規模は南北2.8m以上、東西4.8m以上、深さ10cmで、北側は調査区外に伸びる。後述する土坑墓4基 (ST048・ST049・ST050・ST053)と切り合い関係を有し、すべての土坑墓に切られている。

主柱穴と推定されるものはP1で、これも土坑墓ST049によって切られており、南側約半分を破壊されている。P1の西側には、柱の抜き取り土と推定されるローム層の橙褐色とクロボクの黒色土が混じる土がブロック状に堆積していた。

床面の中央部には、炭化物が薄く分布する範囲が認められた。また、建物跡東壁に沿って壁溝が設けられており、東壁と南壁に沿って、壁際に貼られていた板材を固定または支えるために設けられた杭の痕跡と推定される小柱穴が6基検出された。



第117図 古市上遺跡SH040(1/40)



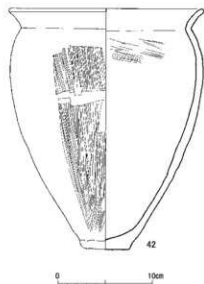
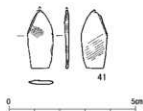
第118図 古市上遺跡SH047(1/60)

出土物には、弥生土器の甕と磨製石鎌がある。甕は建物跡の埋土上位に廃棄された状態で発見され、全形の1/3～1/2程度の大型破片であったが、図上復元が可能である資料である。磨製石鎌は完存品で埋土中からの出土であるが、不用意に取り上げてしまい、詳細な出土地点を記録することができなかった。

出土物の年代観から、建物の構築年代は弥生時代後期中葉に比定される。

第119図は、SH047からの出土遺物である。

41は完存品の磨製石鎌で、流紋岩を素材とする。42は弥生土器の甕で、口縁部は「く」の字状を呈し、底部は平底となる。弥生時代後期中葉の所産である。

第119図 古市上遺跡SH047出土遺物
(土器は1/4、石器は2/3)

2 土坑墓（木棺墓）

ST001（第120図）

D13E～13区に位置し、前述した竪穴建物跡SH005を切って構築されている。規模は長軸1.69m、短軸1.13m、深さ21cmで、墓坑の主軸はN-72°-Eである。墓坑底面の東西それぞれに木口板を設置するための掘り込みが残存していた。遺構の形態およびその規模から、成人用の木棺墓と推定される。

墓坑埋土中から、扁平打製石器（第131図56）が出土したが、当該遺物は縄文時代の所産と推定されるため、混入品と思われる。

ST006（第120図）

D13～E13区に位置し、前述した竪穴建物跡SH005を切って構築されている。規模は長軸1.25m、短軸1.02m、深さ55cmで、墓坑の主軸はS-73°-Eである。墓坑南辺に側板、墓坑底面の東に木口板を設置するための掘り込みが残存していた。遺構の形態およびその規模から、小児用の木棺墓である可能性が高い。

墓坑埋土中から、弥生土器片（第131図43）が出土したが、混入品と思われる。

ST014（第121図）

G14区に位置する。規模は長軸1.23m、短軸0.82m、深さ14cmで、墓坑の主軸はS-88°-Eである。墓坑底面の南北に側板を設置するための掘り込みが残存していた。木棺の痕跡から、木棺本体は墓坑の中央部ではなく、南側に片寄って設置されていたことが観察できる。遺構の形態およびその規模から、小児用の木棺墓である。

ST015（第121図）

G14～G15区に位置する。規模は長軸1.42m、短軸1.10m、深さ30cmで、墓坑の主軸はS-88°-Eである。墓坑南辺および底面北側に側板、墓坑底面の東に木口板を設置するための掘り込みが残存していた。側板に関しては、南側の側板が墓坑底面を掘り込み形で深く設置され、北側の側板は墓坑底面上にそのまま置かれたりまたは底面を僅かに掘り込み程度の深さで設置されたと推定される。木棺の痕跡から、木棺本体は墓坑の中央部ではなく、墓坑の南側に片寄って設置されていたことが観察できる。墓坑の北側には拳大の河原礫が多数出土しており、これらは北側の木棺側板を固定する機能を果たしたと推定される。遺構の形態およびその規模から、成人用の木棺墓と推定される。

墓坑埋土中から、土器片加工品（第131図55）が出土したが、副葬品ではなく、混入品と思われる。

ST016a・ST016b（第122図）

H15区に位置し、切り合い関係にある2基の土坑墓（木棺墓）である。2基が並んだような状態で、構築されていた。土層断面等の検討より、遺構の構築順序は、ST016b→ST016aであることが判明した。ST016aの規模は長軸1.52m、短軸0.92m、深さ35cm、ST016bの規模は長軸1.52m、短軸0.88m、深さ40cmで、墓坑の主軸はともにN-09°-Eである。ST016aの墓坑底面には、木棺の東側の側板を設置するための浅い掘り込みが認められた。同様に、ST016bの墓坑底面には、木棺の南側の木口板および西側の側板を設置するための浅い掘り込みを検出した。両者とも、遺構の形態およびその規模から、成人用の木棺墓と推定される。

古市上遺跡において、切り合い関係にある2基の墓坑は検出例が少なく、ST016a・ST016bのように2基が並んだような状態で構築される例は、他にST044a・ST044bを認めるのみである。

墓坑埋土中から弥生土器の破片が少量出土したが、図示可能なものは認められなかった。

ST017（第122図）

G15区に位置し、後述する土坑SK060を切って構築されている。規模は長軸1.59m、短軸1.02m、深さ47cm

で、墓坑の主軸はN-86°-Eである。墓坑底面北側と西辺には、木棺の木口板と北側の側板を固定させるための掘り込み、底面西側には木棺の西側木口板を固定するための掘り込みが検出された。これらの木棺の痕跡から、木棺本体は墓坑の中央部ではなく、墓坑の南側にやや片寄って設置されていたことが観察できる。遺構の形態およびその規模から、成人用の木棺墓と推定される。

ST018 (第123図)

G15区に位置する。規模は長軸1.46m、短軸1.04m、深さ59cmで、墓坑の主軸はS-85°-Eである。墓坑内部からは多量の河原礫が出土したが、出土位置は墓坑の北から西側に片寄っており、しかも墓坑底面に密着するものではなく、底面からやや浮いた位置から埋土上位までのレベルで出土した。河原礫を撤去すると、墓坑南辺に木棺の南側の側板を固定するための掘り込みと墓坑底面の東西に木棺の木口板を固定するための掘り込みが検出された。なお、墓坑底面を精査したが、木棺北側の側板を固定するための掘り込みは確認できなかった。以上のような木棺の痕跡と河原礫のあり方は、前述したST015の状況と同じであり、ST018の河原礫も木棺北側の側板を固定または支えるために充填されたと推定される。これらの木棺の痕跡から、木棺本体は墓坑の中央部ではなく、墓坑の南側に片寄って設置されていたことが観察できる。遺構の形態およびその規模から、成人用の木棺墓と推定される。残存状況が良好な遺構であるため、古市上遺跡を代表する土坑墓（木棺墓）のひとつであるといえるだろう。

墓坑埋土中から、柳播波状文をもつ壺の口縁部破片（弥生時代後期後葉以降）が出土したが、副葬品ではなく、混入品と思われる。

ST020 (第124図)

G15区に位置する。規模は長軸1.53m、短軸1.04m、深さ57cmで、墓坑の主軸はN-84°-Eである。墓坑内部からは多量の河原礫が出土したが、出土位置は墓坑の中央から北側に片寄っており、しかも墓坑底面に密着するものではなく、底面からやや浮いた位置から埋土上位までのレベルで出土した。このような礫の出土状況は前述したST018と同様である。河原礫を撤去すると、墓坑底面にL字状の浅い掘り込みが認められ、これは木棺の西側の木口板と南側の側板を固定するためのものと推定される。木棺の痕跡から、木棺本体は墓坑の中央部ではなく、墓坑の南側に片寄って設置されていたことが観察できる。遺構の形態およびその規模から、成人用の木棺墓と推定される。

ST022 (第123図)

G15区に位置する。規模は長軸1.09m、短軸0.78m、深さ30cmで、墓坑の主軸はS-88°-Eである。墓坑底面を精査したが、木口板や側板を固定するための掘り込みは認められなかった。また、墓坑内部からは拳大から頭大の河原礫が少数出土している。木棺の痕跡は認められなかったが、他の遺構の状況から当該遺構も木棺墓である可能性が高く、遺構の規模から小児用の木棺墓と考えておきたい。

ST023 (第124図)

G15区に位置する。規模は長軸1.26m、短軸0.87m、深さ35cmで、墓坑の主軸はN-86°-Eである。墓坑の北縁部に木棺北側の側板を固定する掘り込みが認められるとともに、墓坑の東辺のほぼ中央に木棺南側の側板の痕跡とみられる突出部が認められた。木口板を固定するための掘り込みは検出できなかった。木棺の痕跡から、木棺本体は墓坑の中央部ではなく、墓坑の北側に片寄って設置されていたことが観察できる。墓坑南側には黄褐色土が充填されており、これらは南側の側板を固定または支える役割を果たしたものとと思われる。また、埋土の上位からは拳大から頭大の河原礫が少数出土している。遺構の形態およびその規模から、小児用の木棺墓と推定される。

第2節 遺構と遺物

ST025 (第125図)

G14区に位置する。規模は長軸1.54m、短軸1.14m、深さ14cmで、墓坑の主軸はN-62°-Eである。墓坑底面から、木棺の木口板と側板を固定した掘り込みを検出した。木棺の痕跡から、木棺本体は墓坑の中央部ではなく、墓坑の北側に片寄って設置されていたことが観察できる。木棺の北側には、木棺を固定するための土が充填されていたと推定される。遺構の形態およびその規模から、成人用の木棺墓と推定される。

ST026 (第125図)

G14区に位置する。規模は長軸1.35m、短軸0.91m、深さ32cmで、墓坑の主軸はS-83°-Eである。墓坑の北縁部に木棺北側の側板を固定する掘り込み、墓坑底面に木棺の木口板を固定するための掘り込みが検出された。また、墓坑西辺中央には木棺南側の側板の痕跡と思われると突出部が確認された。木棺の痕跡から、木棺本体は墓坑の中央部ではなく、墓坑の北側に片寄って設置されていたことが観察できる。遺構の形態およびその規模から、小児用の木棺墓と推定される。

ST028 (第125図)

G14区に位置し、前述した竪穴建物跡SH027を切って構築されている。規模は長軸1.48m、短軸1.00m、深さ13cmで、墓坑の主軸はS-84°-Eである。墓坑底面の西側を不用意に5cmほど掘り過ぎているが、底面からは木棺墓の木口板や側板の痕跡は認められなかった。しかしながら、他の遺構の状況から当該遺構も木棺墓である可能性が高く、遺構の規模から成人用の木棺墓と考えておきたい。

墓坑底面近くから弥生土器の壺の口縁部破片(第131図45)が出土したが、副葬品でなく、混入品であろう。

ST031 (第126図)

F14区に位置する。規模は長軸1.33m、短軸0.86m、深さ25cmで、墓坑の主軸はS-73°-Eである。墓坑北辺および西辺に沿ってL字状の掘り込みが認められ、これらは木棺の北側の側板および東側の木口板を固定するための掘り込みと推定される。また、墓坑東辺および西辺の中央には木棺南側の側板の痕跡と思われると突出部が確認された。木棺の痕跡から、木棺本体は墓坑の中央部ではなく、墓坑の北側に片寄って設置されていたことが観察できる。遺構の形態およびその規模から、小児用の木棺墓と推定される。

ST033 (第126図)

G15区に位置する。規模は長軸1.48m、短軸0.70m、深さ22cmで、墓坑の主軸はS-72°-Eである。墓坑は2段掘りとなり、墓坑底面東側にテラスをもつ。墓坑の底面は段丘礫層に達しており、底面には層中に含まれていた小礫が現れていた。木棺の痕跡が確認できなかつたため、木棺墓とは断定できないが、当該遺構についても、他の遺構の状況や遺構の規模から、成人用の木棺墓と考えておきたい。

ST035 (第127図)

D13~E13区に位置し、前述した竪穴建物跡SH005を切って構築されている。規模は長軸1.81m、短軸1.30m、深さ73cmで、墓坑の主軸はN-73°-Eである。墓坑底面に木棺の木口板・側板を設置するための掘り込みが残存していた。木棺の痕跡から、木棺本体は墓坑の中央部ではなく、墓坑の北側に片寄って設置されていたことが観察できる。遺構の形態およびその規模から、成人用の木棺墓と推定される。

墓坑埋土中から、弥生土器の小破片(第131図46~49)が出土したが、副葬品ではなく、混入品と思われる。

ST036 (第127図)

D13区に位置し、前述した竪穴建物跡SH005を切って構築されている。規模は長軸1.82m、短軸1.26m、深

さ44cmで、墓坑の主軸はS-86°-Eである。墓坑底面からは明瞭な木棺の痕跡を検出することができなかった。しかしながら、土層の堆積状況は、墓坑の南側に緩やかな落ち込みの曲線が認められ、これらが木棺の痕跡である可能性が高い。遺構の形態およびその規模から、成人用の木棺墓と推定される。

墓坑埋土中から、弥生土器の小破片（第131図50～53）が出土したが、副葬品ではなく、混入品と思われる。

ST041（第126図）

F15区に位置する。規模は長軸1.21m、短軸0.80m、深さ31cmで、墓坑の主軸はN-60°-Eである。墓坑底面に木棺の木口板や側板を固定する掘り込みは検出されなかったが、墓坑北側から南西隅が一段深く掘られており、当該部位に木棺本体が安置されていた可能性が考えられる。遺構の形態およびその規模から、小児用の木棺墓と推定される。

ST042（第128図）

F14区に位置する。規模は長軸1.19m、短軸1.17m、深さ54cmで、墓坑の主軸はN-57°-Eである。検出当初は長軸2.36m、短軸1.75m程度の遺構を想定していたが、掘り下げの結果、東側は土坑もしくは風倒木痕であることが判明した。墓坑は2段掘りで、特に底面は一段低く掘られており、当該部分に木棺が据えられていた可能性がある。墓坑の南から西にかけては河原礫が多量に出土しており、木棺を固定する機能を果たしていたと思われる。遺構の形態およびその規模から、小児用の木棺墓と推定される。

ST044（第128図）

G13区に位置し、前述した竪穴建物跡SH005を切って構築されている。墓坑の規模や土層断面による切り合い関係から、2基の土坑墓（木棺墓）が切り合っている遺構と解釈した。2基のうち、東側に位置する遺構をST044a、西側に位置する遺構をST044bとする。遺構の構築順序はST044b→ST044aである。

ST044aの規模は長軸1.84m、短軸0.88m、深さ44cmで、墓坑の主軸はN-66°-Eである。墓坑底面には木棺の木口板・側板を固定するための掘り込みが認められた。また、木棺の痕跡の西端部から墓坑西辺にはやや空間があり、木棺本体は墓坑の中央部ではなく、墓坑の東側に片寄って設置されていたことが観察できる。墓坑底面よりやや上位のレベルからは赤色顔料の散布が認められた。発掘中に、不用意にも底面付近の西側を掘り下げ過ぎてしまっているが、本来は木棺床面全体に赤色顔料が分布していた可能性が高い。木棺の内面に塗られていたものであろう。墓坑内部の南西側からは、床面からやや浮いた状態で、弥生時代後期後葉頃の複合口縁壺の破片（第131図54）がほぼ水平に置かれた状態で出土した。破片ではあるが、一定の大きさが残る資料であり、混入品とは考え難いため、当該墓の副葬品である可能性が高い。赤色顔料や副葬品が検出された墓は、当該遺構が唯一のものである。

ST044b長軸1.82m、短軸0.77m、深さ37cmで、墓坑の主軸はN-66°-Eである。墓坑底面などに木棺を固定する掘り込みなどは認められなかった。また、墓坑内部北東隅付近の埋土上位より、河原礫が2点出土している。木棺の痕跡は認められなかったが、他の遺構の状況より、当該遺構も木棺墓である可能性が高いと考えている。

ST044a・ST044bとも、遺構の形態およびその規模から、成人用の木棺墓と推定される。

ST048・ST049（第129図）

切り合い関係にある2基の土坑墓（木棺墓）である。F14区に位置し、両者とも前述した竪穴建物跡SH047を切って構築されている。竪穴建物および2基の土坑墓の構築順序は、SH047→ST048→ST049となる。

ST048の規模は長軸1.60m、短軸1.10m、深さ35cmで、墓坑の主軸はS-82°-Eである。墓坑の北辺に沿って木棺北側の側板を固定する掘り込みが認められるとともに、墓坑底面の東西に木棺の木口板を固定する掘り込

第2節 遺構と遺物

みが認められた。木棺南側の側板を固定する掘り込みは認められなかったが、墓坑の北側が一段低く掘られており、当該部位に木棺が安置されていたと推定される。木棺の痕跡から、木棺本体は墓坑の中央部ではなく、墓坑の北側に片寄って設置されていたことが観察できる。また、墓坑の南西隅付近からは河原礫が1個出土した。墓坑埋土中から弥生土器の破片が少量出土したが、図示可能なものは認められなかった。

ST049の規模は長軸1.51m、短軸1.09m、深さ50cmで、墓坑の主軸はS-78°-Eである。墓坑の北辺に沿って木棺北側の側板を固定する浅い掘り込みが僅かに認められるとともに、墓坑底面の東西に木棺の木口板を固定する浅い掘り込みが認められた。また、墓坑底面の北西側のレベルが僅かに低くなっており、これは木棺を安置した痕跡である可能性が考えられる。当該遺構も木棺の痕跡から、木棺本体は墓坑の中央部ではなく、墓坑の北側に片寄って設置されていたことが観察できる。墓坑埋土中から弥生土器の破片が少量出土したが、図示可能なものは認められなかった。

両者とも遺構の形態およびその規模から、成人用の木棺墓と推定される。

ST050 (第130図)

E14区に位置し、前述した竪穴建物跡SH047を切って構築されている。規模は長軸1.09m、短軸0.80m、深さ26cmで、墓坑の主軸はS-69°-Eである。墓坑底面北側と東側に木棺の側板と木口板を固定するための掘り込みが認められた。遺構の形態および墓坑の規模が小さいことから、小児用の木棺墓と推定される。

ST053 (第130図)

F14区に位置し、前述した竪穴建物跡SH047を切って構築されている。遺構の南東隅付近を検出し、遺構の大部分は調査区外となる。掘り下げを行った範囲の規模は長軸1.10m、短軸0.30m、深さ38cmで、墓坑の主軸は未発掘の部分が多いため、判断していない。木棺の痕跡は確認できなかったが、他の遺構の状況より、当該遺構も木棺墓である可能性が高いと考える。調査区の制約から、墓坑全体の規模が不明であることから、小児用か成人用かの判断はできなかった。

ST055 (第130図)

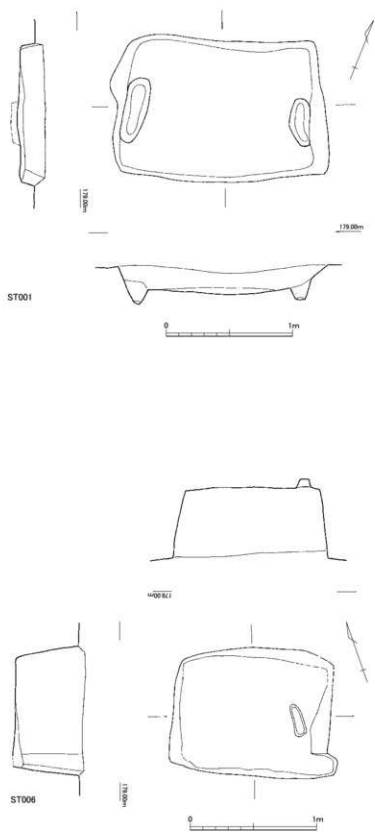
H15区に位置する。規模は長軸1.55m、短軸1.19m、深さ10cmで、墓坑の主軸はN-88°-Eである。墓坑の南辺に沿って幅12cm程度、深さ10cm程度の浅い掘り込みがあり、これが木棺南側の側板を固定するためのものである可能性が高い。遺構の形態およびその規模から、成人用の木棺墓と推定される。

ST056 (第130図)

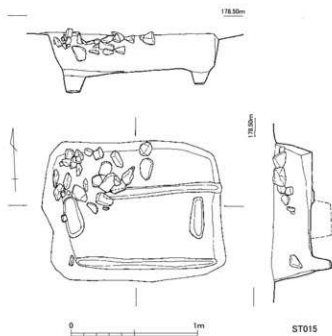
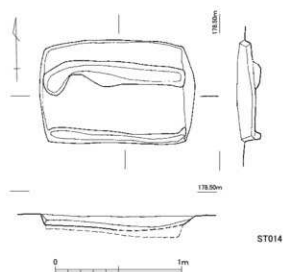
H16区に位置する。規模は長軸1.19m、短軸0.91m、深さ8cmで、墓坑の主軸はN-05°-Wである。遺構の残存状況が悪く、墓坑の底面からは明確な木棺の痕跡は検出できなかった。そのため、木棺墓であると断定できないが、他の遺構の状況や遺構の規模から、当該遺構についても小児用の木棺墓と考えておきたい。

ST059 (第130図)

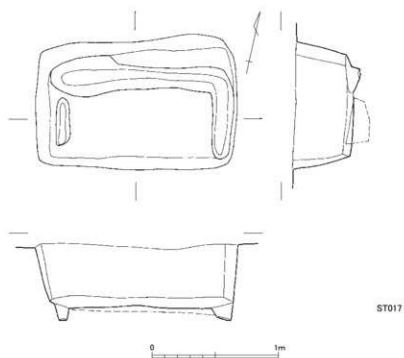
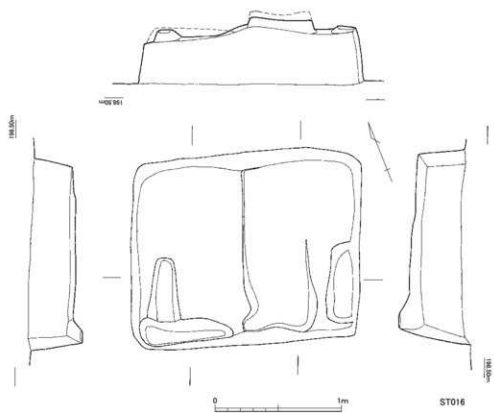
G15区に位置する。規模は長軸1.16m、短軸0.80m、深さ22cmで、墓坑の主軸はN-70°-Eである。ST056の周辺は地山の土壌に河原礫を含む部位が認められる。そのため、礫が入っていた部位の黒色土を墓坑埋土と誤認して掘り下げてしまった。そのため、本来の墓坑底面は平坦であったはずであるが、掘り過ぎによって、完掘時には底面に不自然な凸凹があるような状態となってしまった。以上のような、調査上の不手際から、木棺の痕跡を確認できなかったが、他の遺構の状況や遺構の規模から、当該遺構についても小児用の木棺墓と考えておきたい。



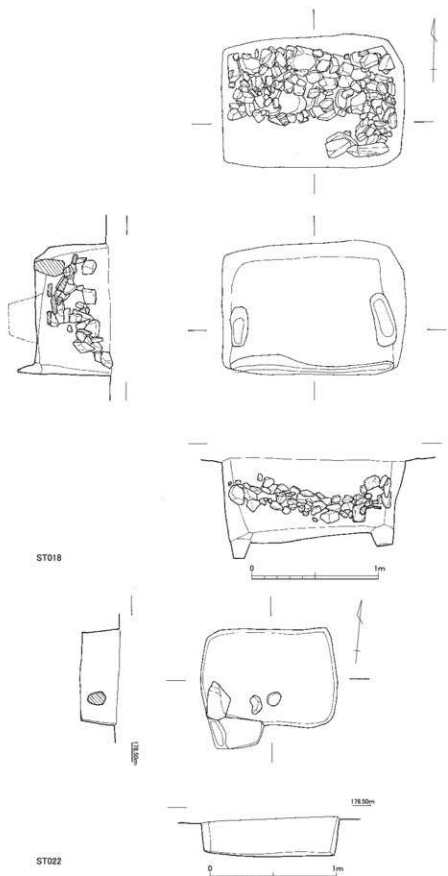
第120図 古市上遺跡土坑墓(木棺墓)①(1/30)



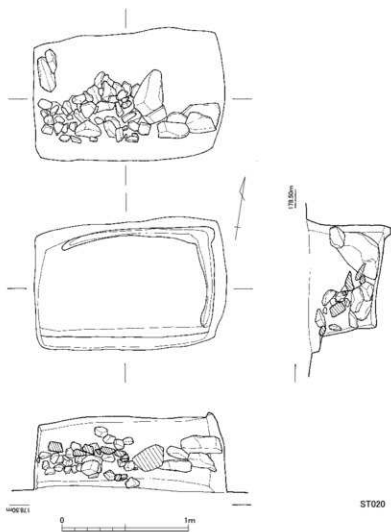
第121図 古市上遺跡土坑墓(木棺墓)②(1/30)



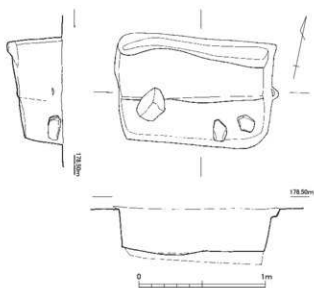
第122図 古市上遺跡土坑墓(木棺墓)③(1/30)



第123図 古市上遺跡土坑墓(木棺墓)④(1/30)

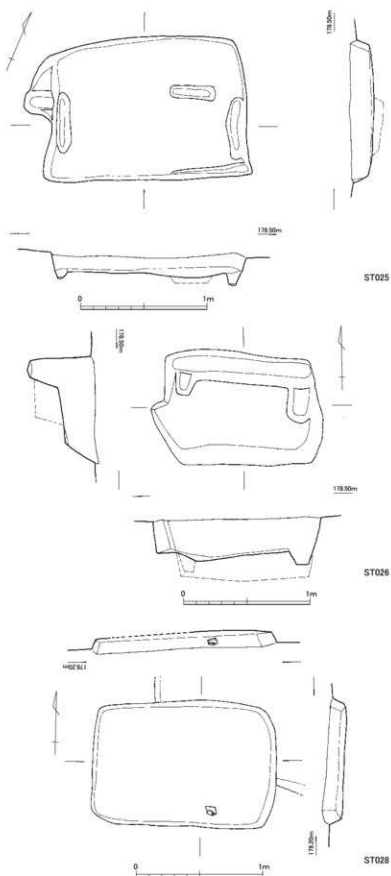


ST020

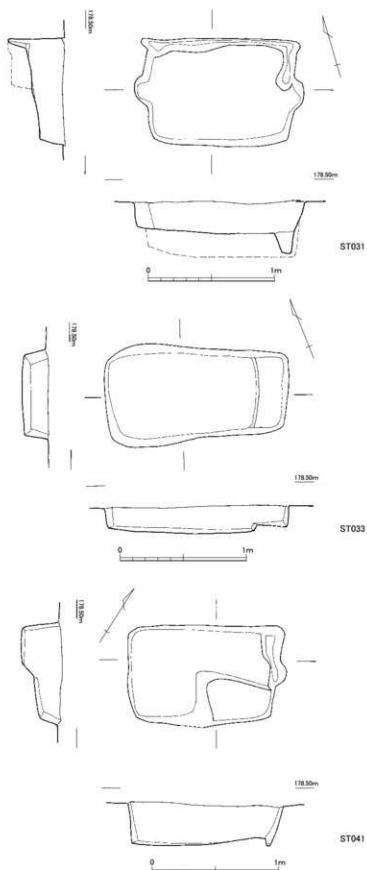


ST023

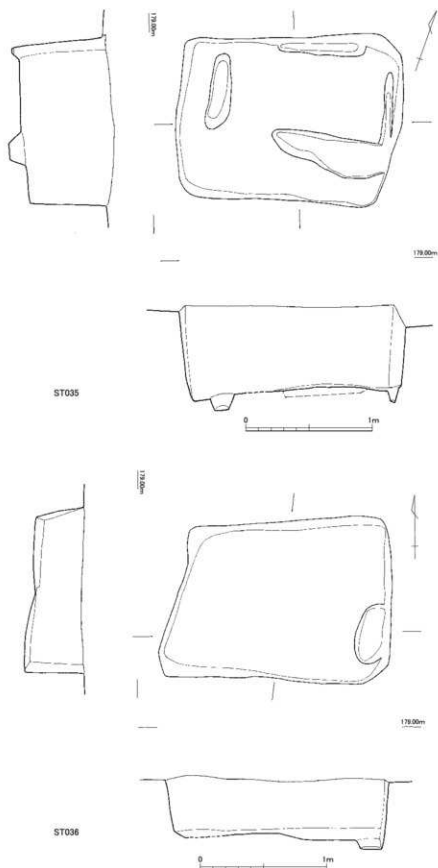
第124図 古市上遺跡土坑墓(木棺墓)⑤(1/30)



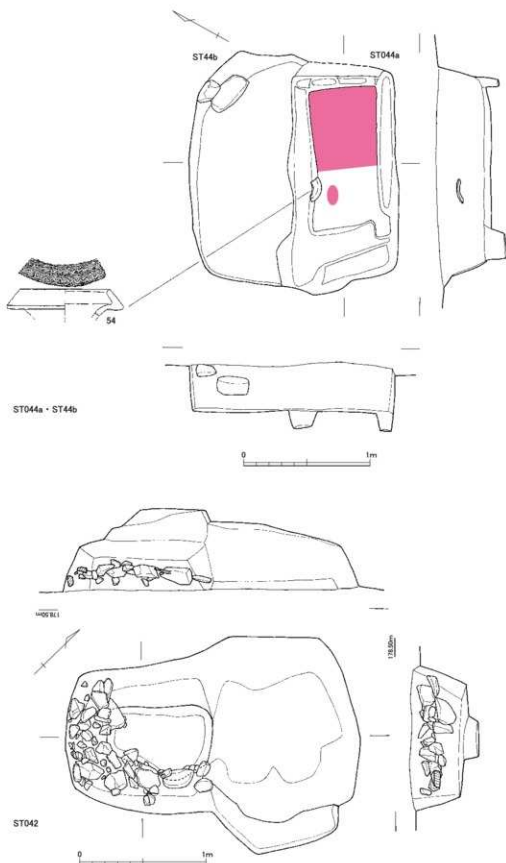
第125図 古市上遺跡土坑墓(木棺墓)⑥(1/30)



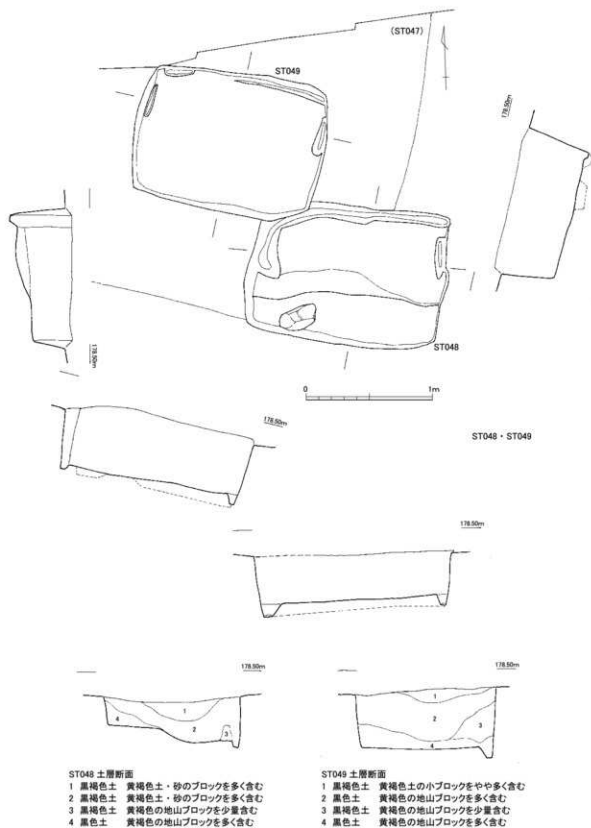
第126図 古市上遺跡土坑墓(木棺墓)⑦(1/30)



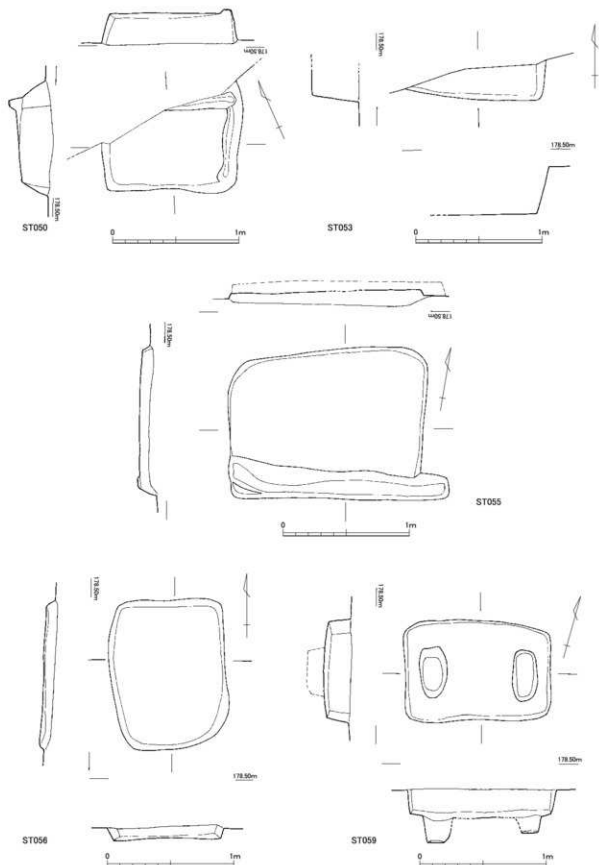
第127図 古市上遺跡土坑墓(木棺墓)⑧(1/30)



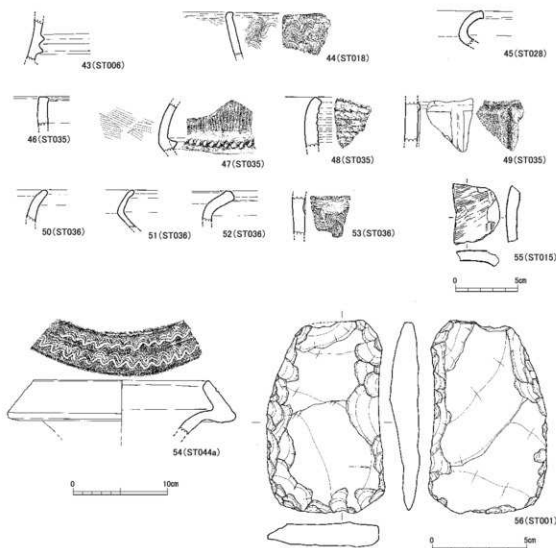
第128図 古市上遺跡土坑墓(木棺墓)⑨(1/30)



第129図 古市上遺跡土坑墓(木棺墓)⑩(1/30)



第130図 古市上遺跡土坑墓(木棺墓)①(1/30)

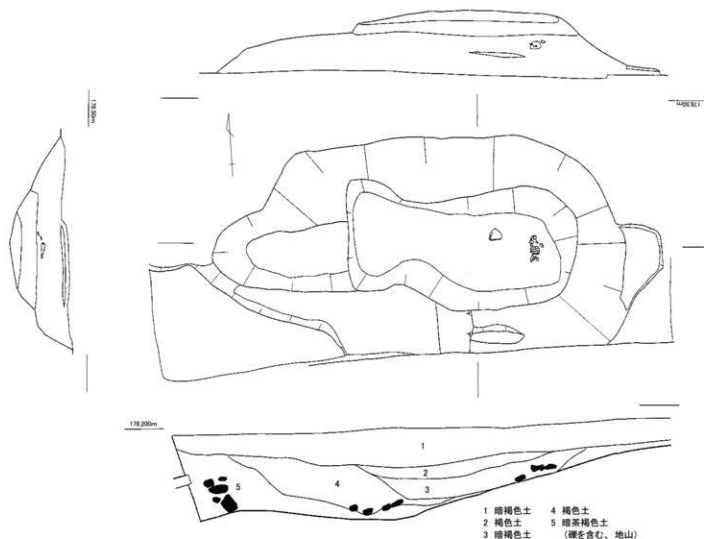


第131図 古市上遺跡土坑墓(木棺墓)出土遺物(土器は1/4, 土製品は1/3, 石器は1/2)

土坑墓(木棺墓)出土遺物(第131図)

土坑墓(木棺墓)から出土した遺物を第131図で、一括して図示した。54の複合口縁壺を除き、小破片であるが遺構の構築時期とかけ離れた時代の遺物であるため、その大多数は混入品であると想定される。

43はST006から出土した壺の胴部で、外面に断面三角形の突帯を2条巡らす。44はST018から出土した複合口縁壺の2次口縁で、外面に櫛描波状文を施す。45はST018から出土した鉢の口縁部である。46~49はST035からの出土遺物で、いずれも遺構埋土中から出土した小破片である。46は壺または鉢の口縁部の先端部である。47は壺の頸部で、頸部と肩部の境に刻目突帯を施す。48・49は粗製甕で、48は絡状(ミミズ腫れ状)突帯、49は工字状突帯をもつ。50~53はST036からの出土遺物で、これらも遺構の埋土中から出土した小破片である。50は壺、51は甕の口縁部である。52は甕の口縁部で、端部を跳ね上げ状につまみ上げている。53は粗製甕の胴部と思われ、外面に櫛描平行文と波状文を施している。54はST044a出土の複合口縁壺で、一定の大きさの破片であることや出土位置から、混入品ではなく、副葬品と判断した遺物である。遺構埋土中位から水平に置かれた状態で出土した(遺構図は第128図参照)。遺物は複合口縁壺で、2次口縁の外面に2段に渡って櫛描波状文を施す。また、2次口縁の外部に赤色顔料の塗布が認められる。55はST015出土の土器片加工品、56はST001出土の扁平打製石器である。56の扁平打製石器は安山岩を素材とする。



第132図 古市上遺跡SK058(1/60)

3 土坑

SK058

SK058(第132図)は調査区東南隅であるG15~H16区に位置する大型の土坑で、規模は長軸6.54m、短軸3.40m、深さ0.85mである。土坑の平面形態や土層から、少なくとも1回の掘り直しがあったと考えられる。土坑内部からの出土遺物は僅少であるが、埋土中位付近から頭大の礫1個と複合口縁壺1個体出土した。他に、混入と思われる扁平打製石器がある。遺構の北側には土坑墓(木棺墓)が点在することから、遺構の性格は「祭祀土坑」である可能性が高いと考える。出土遺物の特徴から、遺構の年代は古墳時代前期前葉と推定される。

第133図は、SK058からの出土遺物である。57は複合口縁壺である。二次口縁は大きく発達し、上方に伸びるが、外面に櫛波状文は施されていない。頸部には短沈線が施された突帯があるが、突帯の高さがほとんど認められないほどに退化している。底部は丸底状となる。口縁部から胴部上半部にかけての大型破片と同一個体である底部の大型破片が存在するが、接合していない。古墳時代前期前葉の布置式併行期まで降る時期の資料であろう。58は安山岩を素材とする扁平打製石器である。縄文時代の所産と思われる、混入品であろう。

第2節 遺構と遺物

SK060

G15区に位置する土坑で、規模は長軸2.40m、短軸1.94m、深さ0.75mである。土坑墓(木棺墓)ST017と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSK060→ST017である。遺構の位置関係から、祭祀土坑である可能性が考えられるが、土坑内からの出土遺物は認められず、不明である。

SK061

F15区に位置する小型の土坑で、遺構の平面形態は略円形となる。規模は長軸1.22m、短軸1.06m、深さ0.31mである。出土遺物はなく、時期・性格ともに不明である。

4 溝

SD043

SD043(第134図)はC14~D15区で検出された溝である。建物跡SH005に西南側に位置し、遺構の全景は弧状を呈する。遺構の規模は長さ22.18m、最大幅2.29m、深さ18cmである。SD043の西南側は調査区の西南隅付近に向かって徐々に標高が低くなり、明瞭な遺構も検出できていない。従って、集落を区画する溝の一部である可能性が考えられる。溝の底面は凸凹しており、部分的に数度の掘り返しが行われたことがわかる。溝の埋土からは礫や土器片・土器片加工品・磨製石鏃などが出土した。出土遺物から、遺構の年代は古墳時代前期前葉に比定される。

溝の底面は凸凹しており、部分的に数度の掘り返しが行われたことがわかる。溝の埋土からは礫や土器片・土器片加工品・磨製石鏃などが出土した。出土遺物から、遺構の年代は古墳時代前期前葉に比定される。

出土遺物は第135図で示した。59~68は壺で、59・60は二次口縁の外面に櫛描き波状文を有するもの、61~63・65・66は胴部にベルト状突帯、64は押圧突帯、67・68は三角突帯を有するものである。69~72は壺の口縁部あるいは口縁部から胴部上半部の破片である。

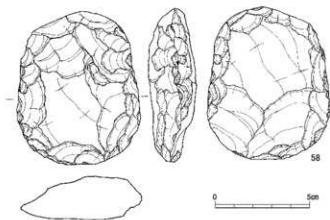
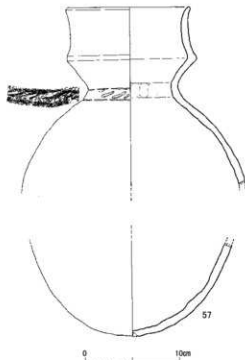
73~76は粗製甕で、75は工字状突帯をもつ胴部から頭部にかけての小片、76は尖底状の底部である。弥生時代後期中葉から末葉に比定され、他の土器よりやや古い時期の所産である。

77~86は土器片加工品、87は流紋岩を素材とする磨製石鏃である。

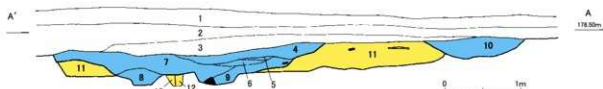
59~66・69~72などが遺構の時期を示唆する遺物である。

SD045

SD045(第134図)はC14~D15区で検出された溝である。竪穴建物跡SH040を切って構築されており、南側に隣接する溝SD046に切られている。各遺構の切り合い関係をまとめると、SH040→SD045→SD046となる。



第133図 古市上遺跡SK058出土遺物(土器は1/4、石器は1/2)



SD045・SD046・SH040土層

- | | |
|--------------|----------------------|
| 1 褐色土(表土) | 6 灰黄褐色土 |
| 2 明褐色土 | 7 黒褐色土 |
| 3 黒色土(遺物包含層) | 8 黒色土 |
| 4 黒褐色土 | 9 黒褐色土(*4~9・SD046埋土) |
| 5 にぶい黄褐色土 | 10 黒色土(SD045埋土) |

- | |
|------------|
| 11 黒色土 |
| 12 黒色土 |
| 13 にぶい黄褐色土 |

(*11~13・SH040土層、12・13は柱穴埋土)



SD045・SD046土層

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1 黒褐色土 | 4 黒褐色土(硬・遺物を含む) |
| 2 黒褐色土 | 5 黒褐色土 |
| 3 黒褐色土(遺物を多く含む) | |
| *1~3 SD046埋土 | *4~5 SD045埋土 |

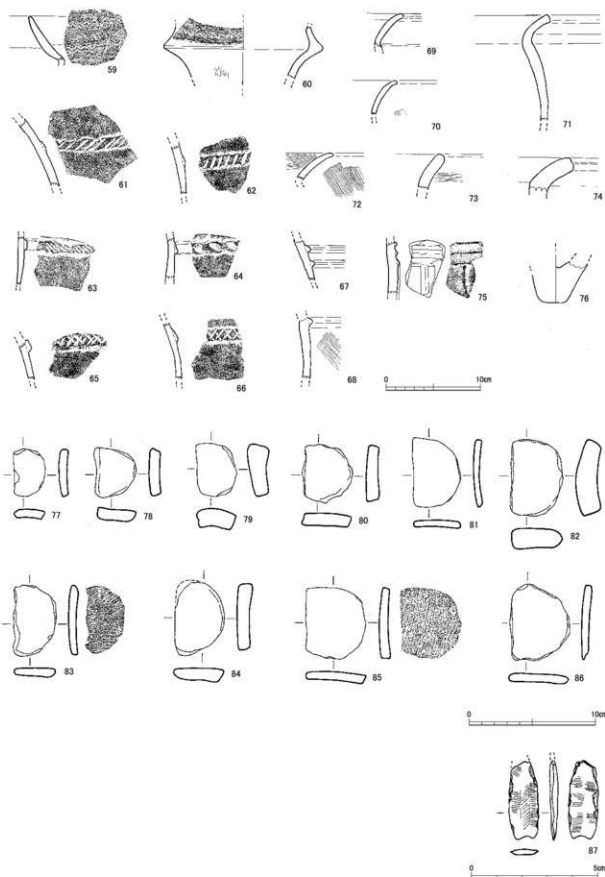


SD043土層

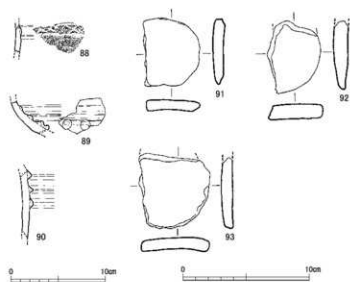
- | |
|-------------------|
| 1 黒褐色土 |
| 2 黒褐色土(遺物・硬を多く含む) |

第134図 古市上遺跡SD043・SD045・SD046(遺構図は1/150、土層図は1/50)

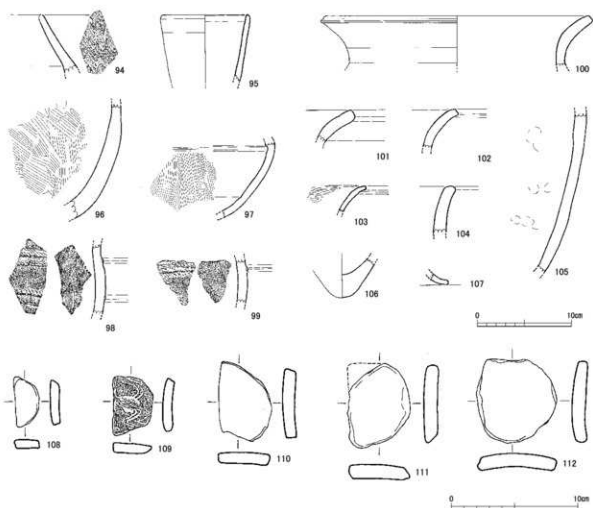
第2節 遺構と遺物



第 135 図 古市上遺跡SD043出土遺物(土器は1/4、土製品は1/3、石器は2/3)



第 136 図 古市上遺跡SD045出土遺物(土器は1/4、土製品は1/3)



第 137 図 古市上遺跡SD046出土遺物(土器は1/4、石器は2/3)

第2節 遺構と遺物

遺構の規模は長さ8.28m、最大幅2.11m、深さ11cmである。遺構の全景は緩やかな弧状を呈し、前述のSD043と同様、集落を区画する遺構である可能性が考えられる。溝の埋土から、礫・土器片・土器片加工品が出土した。出土遺物から、遺構の年代は古墳時代前期前葉に比定される。

出土遺物は第135図で示した。88はベルト状突帯をもつ壺の胴部で、古墳時代前期前葉に比定される。89・90も壺で、89は三角突帯と勾玉状浮文をもつ肩部、90は3条以上の三角突帯をもつ胴部である。89・90は弥生時代後期前葉から中葉の所産である。91～93は土器片加工品である。

88などが遺構の時期を示唆する遺物である。

SD046

SD046（第134図）はC14～D15区で検出された溝である。前述したように、竪穴建物跡SH040および溝SD045と切り合い関係を有し、すべての遺構を切って構築されている。遺構の規模は、長さ9.44m、幅2.11m、深さ25cmである。遺構の状況は前述したSD043およびSD045と類似しており、集落を区画する遺構である可能性が考えられる。溝の埋土から、礫・土器片・土器片加工品が出土した。遺構の切り合い関係や出土遺物から、遺構の年代は古墳時代前期前葉に比定される。

出土遺物は第138図で示した。94は複合口縁壺の二次口縁で、外面に櫛描き波状文を施す。95は長頸壺の口縁部である。96・97は壺の胴部で、97の内面には粘土継ぎ目が認められる。98・99は粗製甕で、外面に絡状（ミミズ腫れ状）突帯を巡らすもの。弥生時代後期前葉から中葉の所産であろう。100～106は甕で、100～104は口縁部、105は胴部、106は底部である。このうち、106の尖底状の底部は粗製甕のものであろう。107は小片であるが、脚台部の端部であろうか。108～112は土器片加工品で、特に109の外面には櫛描き波状文が認められる。

94などが遺構の時期を示唆する遺物と考えられる。

5 遺構に伴わない遺物

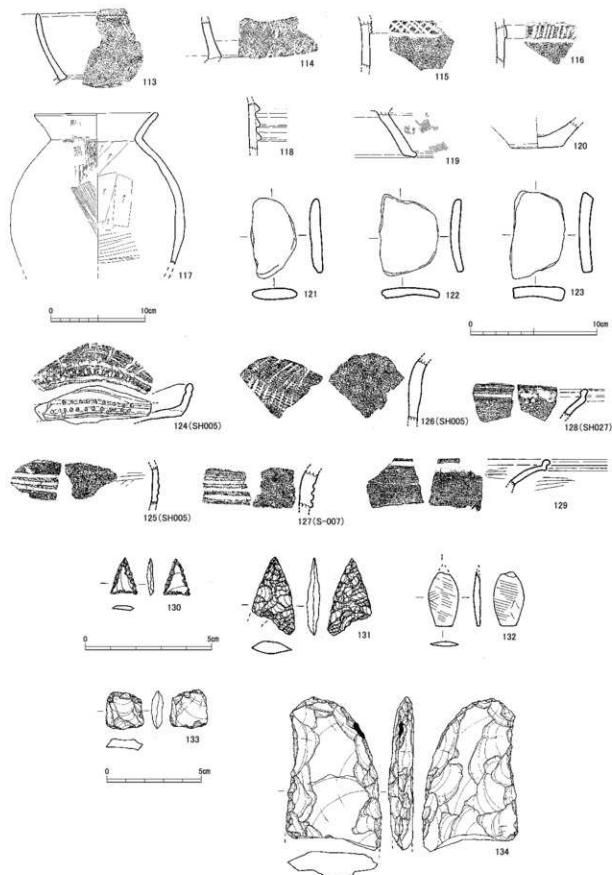
第138図で図示した遺物は、遺構検出中に出土したものや廃土中から採集したもの、または異なる時期の遺構に混入したものである。

113・114は複合口縁壺の二次口縁で、外面に櫛描波状文が施される。115・116は壺の胴部で、外面にベルト状突帯を有する。117は甕で、肩の張らない球形状の胴部をもち、口縁部から胴部の外面には刷毛目調整が認められる。胴部内面上半部には削り、下半部には荒いミガキ状の調整がなされている。113～117は古墳時代前期前葉に比定される。118は壺の胴部で、断面三角形の突帯を3条以上有している。弥生時代後期前葉から中葉に比定される遺物である。119は脚台部の破片である。120は壺の底部で、レンズ状の平底となる。弥生時代後期中葉から後葉に比定される。121～123は土器片加工品である。

124～129は縄文土器である。このうち、124～126は竪穴建物SH005、127は竪穴建物S027の埋土中に混入したもので、127は掘削の結果、自然の落ち込みと判断されたS-007とした掘り込み内、129は遺構検出作業中に出土した。

124・125は縄文時代後期後葉の西平式の浅鉢である。124は口縁部で、口縁外面に3条の沈線と上下2列の列点文を施す。縄文は認められず、列点文が磨消縄文の代用となっているような印象を受ける。125は胴部で、2本の沈線間に磨消縄文を施している。126は深鉢で外面に貝殻腹縁の押し引き文が認められる。127は外面に3本の沈線文のみが認められ、縄文は施されていない。128・129は縄文時代晩期前葉の浅鉢の口縁部である。内外面とも丁寧なミガキを施す黒色磨研土器である。

130～134は石器である。130・131は姫島産黒耀石を素材とする打製石鏃、132は流紋岩を素材とする磨製石鏃、133は姫島産黒耀石の剥片、134は安山岩を素材とする扁平打製石器である。



第 138 図 その他の遺物(土器は1/4または1/3、土製品は1/3、石器は2/3または1/2)

第3節 小 結

1 遺構の変遷～集落から墓域へ～

古市上遺跡で検出されたすべての遺構は、弥生時代後期から古墳時代前期前葉の時間幅の中に収まる。出土遺物や遺構の切り合い関係を検討すると、これらの遺構はさらに「弥生時代後期前葉～中葉」・「弥生時代後期後葉～古墳時代前期前葉」の2時期に大別できる(第139図)。以下、各時期ごとの遺構の特徴について記す。

弥生時代後期前葉～中葉

竪穴建物跡4基がこの時期に属し、大型のSH005は後期前葉、その他のSH027・SH040・SH047は後期中葉に属する。この時期の遺構は竪穴建物跡のみで構成され、墓の構築はまだ開始されていないようだ。

後期前葉に比定されるSH005は一辺が8mを超える大型の竪穴建物跡である。このような規模の竪穴建物跡は古市上遺跡では唯一のものであり、隣接する古市下遺跡でも確認例はない。加えて、竪穴内に付属する土坑からは磨製石鎌の未製品が多量に出土していることが注目される。以上のことから、当該建物跡は一般的な住居としての機能を持つ家屋と考えるよりは、磨製石鎌の製作を目的とした共同の作業場と解釈するのが穏当ではなかろうか。この建物跡が弥生時代後期における集落領域の南西端に立地しているらしいことにも注意を払っておきたい。

弥生時代後期後葉～古墳時代前期前葉

土坑墓(木棺墓)・祭祀土坑・溝が、この時期に属する。この時期における大きな変化は、調査区の領域内に竪穴建物跡が認められなくなり、土坑墓(木棺墓)の構築が開始されることである。墓は布留式段階の古墳時代前期前葉まで継続して造られ、集落の領域を区画すると思われる小規模な溝や墓に伴う祭祀土坑も構築される。墓のほとんどは副葬品をもたないが、主軸の方向から4つのグループに細分することができ(これについては後述)、これらのグループが時期差である可能性も考えられる。

また、遺跡西側の傾斜変換点付近に小規模な溝が掘削される。これらの溝は「環濠」と呼ぶにはあまりにも規模が小さいものではあるが、古市上遺跡のみならず古市下遺跡の領域をも含めた、当該時期の集落領域を限る施設である可能性がある。

以上のことから、古市上遺跡では弥生時代後期後葉を境に、遺跡の空間利用が集落から墓地へと変遷することが確認された。

2 土坑墓(木棺墓)についての分析

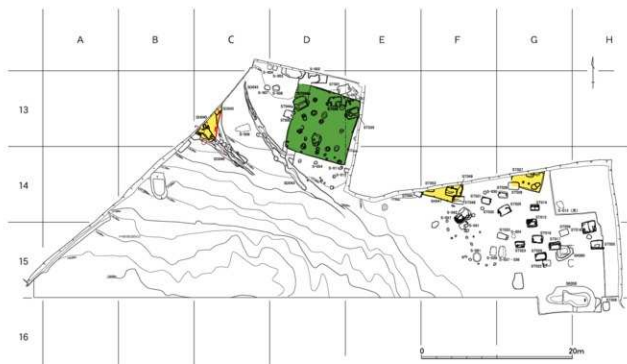
(1) 土坑墓(木棺墓)の構造

古市上遺跡で検出された墓は、そのすべてが「木棺墓」である。遺構検出の時点では「土坑墓」と想定して調査に着手したが、埋土の掘り下げを行うとほとんどの遺構で木棺の痕跡が確認され、木棺痕跡が明確に認められなかったものについても、遺跡の総合的な状況から「木棺墓」と判断した。

古市上遺跡の木棺墓には、ある特徴がある。それは墓坑底面に残存する木棺の側板や小口板の痕跡が、墓坑の一方に片寄って検出されることである。木棺墓の木棺本体は墓坑の中央に構築されるのが通常であるのに対し、古市上遺跡の木棺墓ではほぼすべての墓で木棺本体が墓坑の一方に片寄って構築されているのである。

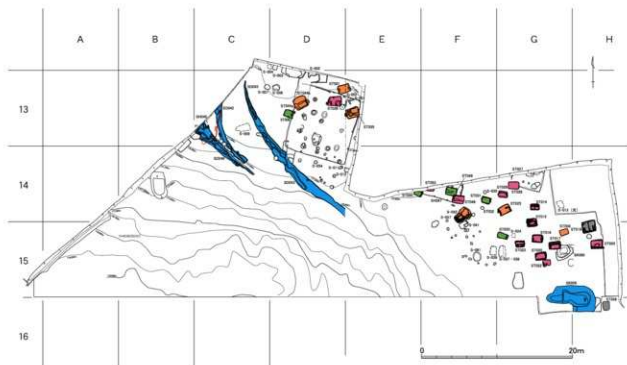
例えば、ST031を例に掲げてみよう。ST031では墓坑底面に木棺の北側板と東木口板、墓坑東西の壁面に南側板の痕跡が残存していた。遺構の状況から、墓の構築手順を復元想定したものが第140図で、以下の手順で木棺墓が構築されたと考える。

①墓坑を掘る。→②墓坑北壁に沿って底面に溝を掘り、木棺の北側板を固定する(東の木口板も同様に固定)。南側板を設置するが、墓坑底面には固定のための掘り込みを設けない(西の木口板も同様)。墓坑の壁面に南側板を固定した痕跡が残る。→③南側板と墓坑の間に土または礫を充填し、墓坑を埋設する。



弥生時代後期前葉～中葉

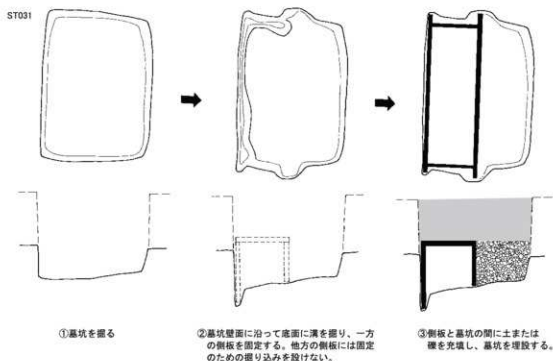
- ・大型の竪穴建物の存在
(内部で磨製石鏃の製作)
- ・墓や溝は構築されていない



弥生時代後期後葉

- 古墳時代前期前葉
- ・竪穴建物が造られなくなる。
- ・墓が造られ始める
- ・西側の傾斜変換点付近に
小規模な溝が掘られる。

第139図 古市上遺跡における遺構の変遷(1/500)



第140図 古市上遺跡の木棺墓構築手順(模式図)

側板と墓坑の間には土のほか、礫が充填されるもの(ST015・ST018・ST020・ST042)がある。礫が充填されているものは、川に近いか段丘礫層を掘り込んである地点に位置しているものが多く、墓の埋設に当たって礫を使用しやすい状況にあったのであろう。

上記のような木棺墓の構造は、現状では古市上遺跡以外に類例が認められない。このような木棺墓の構造上の利点としては、木棺本体の一方の側板や木口板を墓坑底面に固定し、他方の側板や木口板については、遺体の大きさに合わせて固定位置を調節できることが挙げられる。今後、類例の探索や系譜の追求が検討課題となろう。

(2) 土坑墓(木棺墓)の大きさ～成人墓と小児墓～

木棺墓の墓坑の規模については、長軸が約1.5m程度を測るものが多いが、長軸が約1.2m前後となる明らかに小型であるものも存在する。このことは発掘調査を行っている時から認識しており、調査中は大型の墓坑を「成人墓」、小型の墓坑を「小児墓」と判断していた。

今回の分析に当たり、検出された木棺墓29基を対象に墓坑の長軸(長さ)を横軸に、短軸(幅)を縦軸にして、それぞれの数値を図上にプロットしたものが第2表である。図化の結果、相対的に大型であるといえる墓坑と小型であるといえる墓坑の2つのグループを弁別することが可能であり、前者が「成人墓」、後者が「小児墓」とであると解釈できる可能性を考えた。

さらに、墓坑長軸の長さを基準として小さいものから大きいものへと並び替えを行い、その結果を棒グラフにしたものが第3表である。全体的には墓坑長軸の大きさの変化については漸移的なものといえるが、第2表の結果と併せて考えると長軸1.35mを境にグラフのピークが変化するのを読み取ることが可能である。

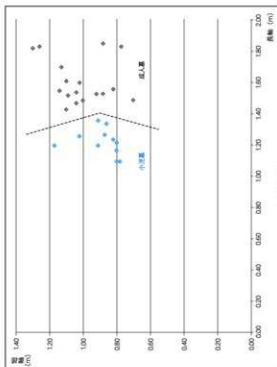
以上のことより、今回の分析では墓坑の長軸が1.35m以上のものを「成人墓」、以下のものを「小児墓」と解釈していきたい。

古市上遺跡では成人墓と小児墓は混在しており、他の遺跡で認められるように、小児墓のみが墓地あるいは集落の一面にまとまって構築されることはない。これも古市上遺跡の墓の特徴のひとつとして挙げられよう。

第2表 古市上遺跡土坑墓(木棺墓)一覽表①

遺跡名	溝槽の位置	長さ(m)		出土遺物	備考
		前後	幅		
ST300	D10E-C10E	1.89	1.13	打製石器	9400年代前半
ST301	D10E	1.25	1.02	土器	9400年代前半
ST314	D14E	1.23	0.85	土器	9400年代前半
ST315	D14-C10E	1.42	1.33	土器・土製針・土器	墓が多く確認される
ST316	D10E	1.22	0.92	土器	2次土器の多い存在
ST317	D10E	1.59	1.02	土器	9400年代前半
ST318	D10E	1.46	1.04	土器	墓が多く確認される
ST320	D10E	1.53	1.04	土器	墓が多く確認される
ST322	D10E	1.09	0.78	土器	9400年代前半
ST323	D10E	1.26	0.87	土器	9400年代前半
ST328	D14E	1.54	1.14	土器	9400年代前半
ST329	D14E	1.35	0.91	土器	9400年代前半
ST331	F14E	1.33	0.86	土器	9400年代前半
ST333	D10E	1.48	0.70	土器	9400年代前半
ST335	D10E	1.81	1.30	土器	9400年代前半
ST336	D10E	1.82	1.38	土器	9400年代前半
ST341	F10E	1.21	0.80	土器	墓が多く確認される
ST342	D10E	1.19	1.17	土器	9400年代前半
ST344	D10E	1.34	0.88	土器・灰色土器片	9400年代前半
ST345	D10E	1.82	0.77	土器	9400年代前半
ST348	F10E	1.50	1.33	土器	9400年代前半
ST349	D14E	1.51	1.11	土器	9400年代前半
ST350	F14E	1.59	0.80	土器・土製針	9400年代前半
ST355	H10E	1.06	0.82	土器	9400年代前半
ST356	H10E	1.19	0.81	土器	9400年代前半
ST359	D10E	1.16	0.80	土器	9400年代前半

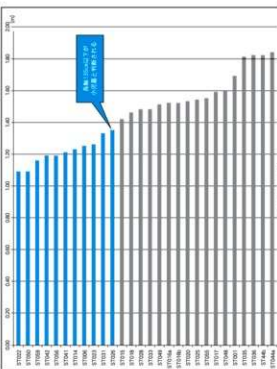
* 墓中の位置 ST102は部分の位置のみの表示



第3表 古市上遺跡土坑墓(木棺墓)一覽表②

遺跡名	溝槽の位置	長さ(m)		出土遺物	備考
		前後	幅		
ST322	D10E	1.29	0.78	土器	9400年代前半
ST325	D14E	1.29	0.80	土器	9400年代前半
ST326	D10E	1.16	0.80	土器	9400年代前半
ST327	F10E	1.19	1.17	土器	墓が多く確認される
ST328	F10E	1.19	0.91	土器	2次土器の多い存在
ST344	D14E	1.23	0.82	土器	9400年代前半
ST356	D10E	1.26	1.02	土器	9400年代前半
ST323	F14E	1.33	0.86	土器	9400年代前半
ST325	D14E	1.35	0.91	土器	9400年代前半
ST315	D14-C10E	1.42	1.30	土器・土製針・土器	墓が多く確認される
ST316	D10E	1.46	1.04	土器	墓が多く確認される
ST328	D14E	1.48	1.00	土器	9400年代前半
ST333	D10E	1.48	0.70	土器	9400年代前半
ST349	F14E	1.51	1.09	土器・土製針	9400年代前半
ST356	H10E	1.52	0.82	土器	2次土器の多い存在
ST316	H10E	1.52	0.88	土器	9400年代前半
ST320	D10E	1.53	1.04	土器	9400年代前半
ST325	H10E	1.54	1.14	土器	9400年代前半
ST317	D10E	1.59	1.02	土器	9400年代前半
ST348	F14E	1.60	1.33	土器	9400年代前半
ST349	D10E	1.61	1.33	土器・土製針	9400年代前半
ST350	D10E	1.81	1.30	土器	9400年代前半
ST356	D10E	1.82	1.36	土器	9400年代前半
ST346	D10E	1.82	0.77	土器	9400年代前半
ST344	D10E	1.84	0.88	土器・灰色土器片	9400年代前半
ST345	D10E	1.84	0.88	土器・灰色土器片	9400年代前半

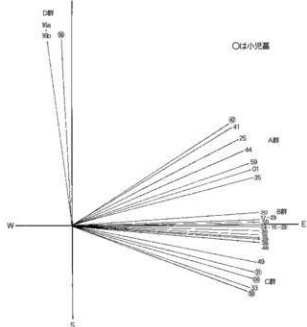
* 墓中の位置 ST102は部分の位置のみの表示



第4表 古市上遺跡土坑墓(木棺墓)一覽表③

遺構名	遺構の位置	直 径 (m)			主軸 (長軸) 方位	備考
		長軸	短軸	深さ		
ST001	D13-E13区	1.69	1.33	0.21	N77° E	A群
ST006	D13区	1.25	1.02	0.55	S72° E	C群
ST014	G14区	1.23	0.82	0.14	S68° E	B群
ST015	G14-G15区	1.42	1.10	0.30	S88° E	B群
ST019a	H15区	1.52	0.92	0.35	N09° W	D群
ST019b	H15区	1.52	0.88	0.40	N09° W	D群
ST017	G15区	1.59	1.02	0.47	N66° E	B群
ST016	G15区	1.46	1.04	0.59	S85° E	B群
ST020	G15区	1.53	1.04	0.57	N94° E	B群
ST022	G15区	1.09	0.78	0.30	S88° E	B群
ST023	G15区	1.26	0.87	0.35	N66° E	B群
ST025	G14区	1.54	1.14	0.14	N62° E	A群
ST026	G14区	1.35	0.91	0.32	S83° E	B群
ST028	G14区	1.48	1.00	0.13	S64° E	B群
ST031	F14区	1.33	0.86	0.25	S72° E	C群
ST033	G15区	1.48	0.70	0.22	S72° E	C群
ST035	E13区	1.81	1.30	0.73	N72° E	A群
ST036	D13区	1.62	1.26	0.40	S86° E	B群
ST041	F15区	1.21	0.80	0.31	N67° E	A群
ST042	F14区	1.19	1.17	0.54	N57° E	A群
ST044a	D13区	1.84	0.88	0.44	N66° E	A群
ST044b	D13区	1.82	0.77	0.37	N66° E	A群
ST048	F14区	1.60	1.10	0.35	S82° E	C群
ST049	F14区	1.51	1.09	0.55	S78° E	C群
ST050	E14区	1.09	0.80	0.28	S69° E	C群
ST055	H15区	1.55	0.82	0.24	N68° E	B群
ST056	H15区	1.19	0.91	0.08	N05° W	D群
ST059	G15区	1.16	0.80	0.22	N70° E	A群

* 青が小児墓 (ST053は部分的な調査のため除外)



(3) 主軸によるグルーピングと変遷

次に、墓坑の主軸方向を計測し、図化したものが第4表である。図化の結果、古市上遺跡の土坑墓(木棺墓)は、下記のA~D群の4群にグルーピングすることが可能である。

A群：墓坑の長軸を北東に向ける一群 B群：墓坑の長軸を東に向ける一群

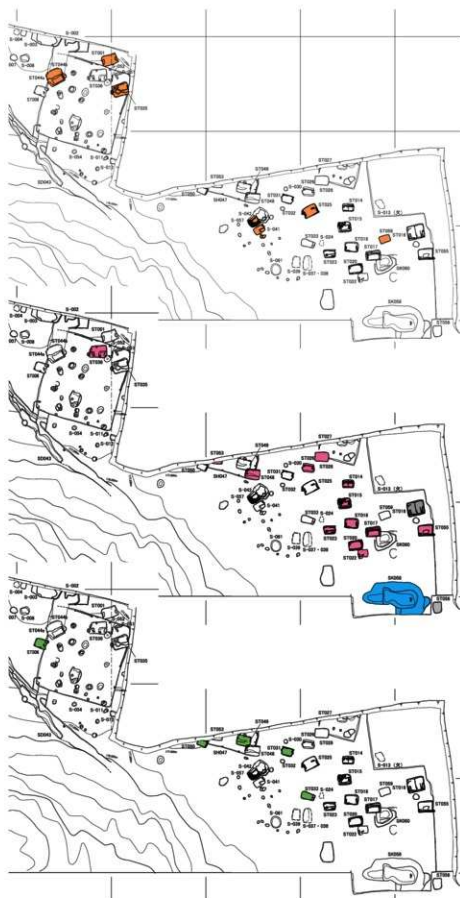
C群：墓坑の長軸を南東に向ける一群 D群：墓坑の長軸を北西に向ける一群

本来、ここで指摘したような主軸方向の差が、何に起因するものであるかを解釈するのは難しい問題であるが、弥生時代の墓地の分析で行われているように、上記のような差が「時期差」を反映するものと仮定してみよう。

遺構の切り合い関係や出土遺物を考慮して、古市上遺跡の木棺墓の変遷を推定したものが、第141図である。

まず、主軸方向を北東に向けるA群が構築される。A群に属するST044aからは副葬品と推定される複合口縁壺の破片が出土しており、弥生時代後期後葉から末葉に位置づけられる。次に、主軸方向を東に向けるB群と北西に向けるD群が構築される。B群とD群の主軸方向はほぼ直交する関係にあるため、同時期に位置づけた。また、切り合い関係にある土坑墓 (ST048 [B群] → ST049 [C群]) の存在から、B群はC群より先行すると考えた。さらに、布留式段階の壺が出土した土坑(祭祀土坑?) SK048の主軸方向もB群と同じであるため、この時期の遺構とした。以上の事象より、当該時期を古墳時代前期前葉に比定できると考える。最後に、主軸方向を南東に向けるC群が構築される。切り合い関係にある土坑墓 (ST048 [B群] → ST049 [C群]) の存在から、C群はB群に後出し、古墳時代前期前葉以降に比定される。

以上、墓坑の主軸方向の分析から、古市上遺跡の土坑墓(木棺墓)の変遷を3段階に分けて考えてみた。今回の分析は主軸方向の差が遺構の時期差を反映しているという仮定の上で考察されたものであるため、この結果が妥当かどうかはさらに検討を要する。しかしながら、提示できた結論は遺構の切り合い関係や出土遺物の年代観とも矛盾していないため、現状では妥当なものと考えておきたい。

**A群**

長軸を北東に向ける一群。土坑墓（木棺墓）群の中で最も古く位置づけられる可能性がある。

ST044aから弥生時代後期後葉に比定される複合口縁壺片が出土。

B群・D群

長軸を東に向ける一群（B群）と北西に向ける一群（D群）。B群とD群の方位はほぼ直行する。切り合い関係のある土坑墓（ST048→ST049）から、C群より遅る時期に位置づけられる。

布疋式段階の壺が出土したSK048の主軸もB群とほぼ同じであることから、同時期か。

C群

長軸を南東に向ける一群。切り合い関係のある土坑墓（ST048→ST049）から、B群より後出する時期に位置づけられる。

第141図 土坑墓（木棺墓）のグルーピングと時期(1/400)

第5章 総括

今回の調査地点は「古市遺跡」として周知されている範囲の一面に位置しているが、本書に収録した「一般国道57号大野竹田道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査」では工事との兼ね合いや調査行程の都合上、道路建設工事対象地区の北側を「古市下遺跡」、南側を「古市上遺跡」と仮称して発掘調査を実施した。発掘調査の成果や内容からも「古市下遺跡」と「古市上遺跡」は一連の遺跡であり、両者とも「古市遺跡」の一部を構成する遺跡である。ここでは古市下遺跡・古市上遺跡の調査成果を、昭和63年度に実施された古市遺跡の調査成果とともに概観して、総括したい（第5表参照）。

縄文時代では、古市下遺跡で縄文時代後期の石町式新段階の遺物集中箇所が検出された。遺物集中箇所から出土した土器は、この地域における後期後葉の良好な一括資料である。その他、後期後葉以降の土器についても、少量が出土している。また、古市上遺跡でも後期・晩期の遺物が少量出土しており、周辺に当該時期の集落や遺物包含層が存在している可能性がある。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけては、竪穴建物跡と墓が検出された。古市下遺跡では弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴建物跡が16基、古市下遺跡では同時期の竪穴建物跡4基・木棺墓29が調査されている。当該時期における大野川流域の遺跡の中で、墓が発見される事例は僅少であり、今回の調査は竪穴建物跡と墓がセットで調査できた集落として貴重な成果を収めることができた。

古代（9世紀代）については、今回の調査では古市下遺跡で少数の遺構が検出されたに過ぎないが、昭和63年度の調査で土師器の一括埋納遺構が検出されている。調査区の周辺にさらに重要な遺構・遺物の分布が予測されよう。

中世については、古市下遺跡で14世紀代を主体とする掘立柱建物・溝等の遺構で構成される館跡が検出された。吉備系土師器椀や常滑焼大甕など、豊後以外の地で生産された搬入遺物の存在も特筆される。昭和63年度の調査でも、永楽通寶（初铸造年1408年）を含む57枚の銅銭が埋納された柱穴などが調査されており、館跡の時期は15世紀代まで存続する。遺構や出土遺物の様相から、一万田氏に關係する武士または土豪の館跡であろう。

以上のように、古市遺跡は縄文時代・弥生時代後期～古墳時代前期・古代（9世紀）・中世（14～15世紀）の遺構・遺物が存在する複合遺跡であることが、今回の発掘調査によって明らかとなった。

第5表 古市遺跡の調査成果

	縄文時代 後期・晩期	弥生時代後期 前葉～中葉	弥生時代 後期後葉 ～ 古墳時代前期	古代 (9世紀)	中世 (14～15世紀)
古市遺跡 (S63 園場整備)				土器の一括埋納遺構	銅銭57枚を柱穴内に埋納
古市下遺跡 (H21 道路建設)	石町式の遺物集中箇所		竪穴建物跡16基	土坑1基	溝・掘立柱建物跡・土坑 吉備系土師器椀・常滑焼
古市上遺跡 (H21 道路建設)	(遺物少量)	竪穴建物跡4基 磨製石版を制作した 大型建物跡	木棺墓29基		

竪穴建物跡と墓が
セットとなる集落

一万田氏
關係の館跡

遺物一覽表

古市下遺跡遺物一覽表(土器)

探検 番号	遺物 番号	遺物名	器種	経路 (m) () 経度			器形・文様	出土			備考	写真 掲載	
				口徑	器高	底徑		高	打	本			
	1	5層遺物集中箇所	縄文土器	深鉢	(36.0)		縦位の浅き器に付け、肩文、沈線、ナデ	にぶい褐色	ココナデ、ナデ	〇	〇	〇	19
	2	5層遺物集中箇所	縄文土器	深鉢	(39.8)		縦位の浅き器に付け、肩文、沈線、ナデ	褐色	ミヅキ	△	△	〇	19
	3	5層遺物集中箇所	縄文土器	深鉢	(26.3)		縄文、沈線、ミヅキ、ナデ	褐色	ミヅキ	△	△	〇	19
	4	5層遺物集中箇所	縄文土器	深鉢			縄文、沈線、ナデ	にぶい赤褐色	ミヅキ	〇	〇	△	19
9	5	5層遺物集中箇所	縄文土器	深鉢			口縁部縮み縮文、ナデ	にぶい褐色	ナデ	△	△	〇	穿孔
	6	5層遺物集中箇所	縄文土器	深鉢			縄文、ナデ	褐色	ナデ	〇	△	〇	
	7	5層遺物集中箇所	縄文土器	深鉢			縄文	にぶい赤褐色	ナデ	〇	△	〇	
	8	5層遺物集中箇所	縄文土器	深鉢			縄文、ナデ	褐色	ナデ	△	△	〇	
	9	5層遺物集中箇所	縄文土器	深鉢			斜紋文、ナデ	にぶい赤褐色	ナデ	△	△	〇	19
	10	5層遺物集中箇所	縄文土器	深鉢			赤色	にぶい赤褐色	ナデ	〇	〇	〇	底面厚上5mm状文
	11	5層遺物集中箇所	縄文土器	浅鉢	(41.2)		縄文、沈線、ナデ、ミヅキ	にぶい赤褐色	ナデ、磨圧痕	△	〇	〇	19
	12	5層遺物集中箇所	縄文土器	深鉢			縄文、ナデ	にぶい褐色	ヘラ工具によるナデ	〇	〇	△	19
	13	5層遺物集中箇所	縄文土器	深鉢			縄文、ナデ	にぶい褐色	ナデ	〇	〇	〇	
10	14	5層遺物集中箇所	縄文土器	深鉢			縄文、ミヅキ	褐色	ミヅキ	△	△	〇	
	15	5層遺物集中箇所	縄文土器	深鉢		8.6	ナデ	褐色	ナデ	〇	〇	〇	
	16	5層遺物集中箇所	縄文土器	深鉢		(6.3)	ナデ	にぶい褐色	ナデ		〇	〇	
	17	5層包含層	縄文土器	深鉢			ナデ、口縁上面全体至ス底位に	にぶい褐色	ナデ	〇	〇	〇	
	18	5層包含層	縄文土器	深鉢			沈線、赤色	にぶい褐色	赤線、ナデ	〇	〇	〇	
	19	5層包含層	縄文土器	深鉢			縄文、沈線	褐色	ミヅキ	△	〇	〇	
	20	5層包含層	縄文土器	深鉢			縄文、沈線	赤褐色	ナデ	〇	〇	〇	
	21	5層包含層	縄文土器	深鉢			縄文、沈線、ミヅキ	にぶい褐色	ミヅキ	〇	〇	〇	
	22	5層包含層	縄文土器	深鉢			口縁部縮み縮文、ナデ	にぶい褐色	ナデ	〇	〇	〇	
	11	23	5層包含層	縄文土器	深鉢			口縁部縮み縮文、ナデ	褐色	ナデ	〇	〇	〇
24		5層包含層	縄文土器	深鉢			口縁部縮み縮文、縄文、ナデ	にぶい褐色	ナデ	〇	〇	〇	
25		5層包含層	縄文土器	深鉢			縄文、沈線、ナデ	褐色	ナデ	〇	〇	〇	
26		5層包含層	縄文土器	深鉢			縄文、沈線	褐色	ナデ	〇	〇	〇	
27		5層包含層	縄文土器	深鉢			縄文、沈線	にぶい褐色	ナデ			△	〇
28		5層包含層	縄文土器	深鉢			縄文	にぶい赤褐色	ナデ	〇	△	〇	
29		5層包含層	縄文土器	深鉢			沈線、波状沈線、列点	にぶい褐色	ナデ	〇	〇	〇	
33		SH350	弥生土器	甕	18.8		磨製文、底面下突部、磨製沈線、磨製ナデ、底面下突部、磨製波状文、底面下突部、磨製ハケ	褐色(赤褐色)	ナデ、磨ハケ、磨圧痕	〇	〇	〇	外周及び内口縁下赤褐色磨製痕
34		SH350	弥生土器	甕	16.0		磨製波状文、底面下突部、磨製ハケ	褐色～黒褐色	磨製	〇	〇	△	底面：黒褐色
14		35	SH350	弥生土器	甕		35.5	磨ハケ、底面二条三角突部、及び沈線文	褐色	磨ハケ後ココナデ、磨圧痕ナデ	〇	〇	〇
	36	SH350	弥生土器	甕	12.4		磨ハケ、ココナデ、磨製波状文	褐色褐色	磨圧痕、ココナデ	〇	〇	〇	20
	37	SH350	弥生土器	甕			ココナデ後磨製波状文、磨製ハケ	褐色褐色	磨製	〇	〇	△	〇
	38	SH350	弥生土器	甕		3.0	底面下磨製波状文、ナデ	工具ナデ	ナデ	〇	〇	〇	外周：スス付着
	39	SH350	弥生土器	甕	(17.4)		磨製ハケ、底面工具による磨製ナデ	褐色褐色	磨製ハケ、ココナデ、底面工具による磨製ナデ	〇	〇	〇	〇
	44	SH001	弥生土器	甕			磨製波状文、口縁上面磨製ハケ	褐色褐色	磨ハケ、ナデ	〇	〇	〇	
	45	SH001	弥生土器	甕			磨製波状文	褐色	ナデ	〇	〇	〇	
17	46	SH001	弥生土器	甕			ナデ	褐色	ナデ	〇	〇	〇	
	47	SH001	弥生土器	甕			口縁部磨製波状文、ナデ	褐色	磨ハケ	〇	〇	〇	内周：赤褐色磨製痕
22	48	SH001	弥生土器	甕	(34.4)		口縁部磨製波状文、ナデ	褐色	ナデ	〇	〇	〇	
	59	SH003	弥生土器	甕			底面下・磨製波状文、磨製ハケ後磨製ナデ	不明	不明	〇	〇	〇	内周及びスス付着
	60	SH003	弥生土器	甕			底面下・磨製波状文、磨製ハケ後磨製ナデ	褐色褐色、褐色褐色	磨製ハケ、磨製ハケ後ココナデ	〇	〇	〇	内周：スス付着
	61	SH003	弥生土器	甕	23.0		ココナデ、磨製ハケ後ナデ	にぶい褐色	ココナデ、ナデ、磨圧痕	〇	〇	△	外周：スス付着
	62	SH003	弥生土器	甕	(21.2)		ココナデ、底面工具によるナデ	褐色褐色	ココナデ、磨製ハケ、底面工具によるナデ	△	△	〇	外周：底面内周縁部付着正副赤褐色
25	65	SH002	弥生土器	甕	(21.3)		後磨製波状文、磨ハケ、底面下突部、磨製目録文	褐色褐色	磨製ハケ後ココナデ、磨製ハケ後ココナデ	△	△	△	〇
	71	SH005	弥生土器	甕			底面下突部、ナデ	褐色	磨ハケ後ナデ	〇	〇	〇	
30	72	SH005	弥生土器	甕			ココナデ、ハラナデ	褐色～褐色	ココナデ、磨製ハケ、工具ナデ	△	〇	〇	22
	73	SH005	弥生土器	甕	(13.0)		ナデ	にぶい褐色～褐色	ナデ、工具ナデ	△	〇	△	22
	74	SH005	弥生土器	甕	(17.9)		ナデ	褐色褐色	磨ハケ後ナデ	〇	〇	〇	
31	75	SH005	弥生土器	鉢		(8.1)	ナデ	褐色	ナデ	〇	△	〇	
	76	SH015	弥生土器	甕			ナデ、底面下磨製波状文、及び沈線文	褐色褐色	ナデ	〇	〇	〇	22
	79	SH016	弥生土器	甕			ナデ、底面下のハケ	褐色	ナデ	〇	〇	〇	22
	81	SH017	土師器	甕	(11.4)		波状文、ナデ、磨ハケ	褐色	磨ハケ後ナデ	〇	〇	〇	
	82	SH017	弥生土器	甕			磨製波状文、磨ハケ	褐色褐色	磨ハケ	△	△	△	

遺物一覧表2 (古市下遺跡)

探検 番号	遺物 番号	遺物名	品類	経路 (m) () 経緯度			調査・文様			出土 状況	備考	写真 記録 番号		
				口徑	高さ	直径	外面	内面	発見 年月				打 本 数	
	83	SH017	土師器 壺				帯状突起付. 縦ハケ	黄褐色	ナデ	○	○		外面: 赤色顔料塗布	23
	84	SH017	土師器 壺	(28.8)			ナデ	暗褐色	ナデ	○	○			
	85	SH017	土師器 壺	(34.6)			ナデ	暗褐色	ナデ	○	○			
	86	SH017	土師器 壺	(16.6)			斜めハケ後ヨコナデ. 縦ハケ	黄褐色~灰褐色	斜めハケ縦ハケナデ. 肩凹線ハケ	○	○	△	外面: スス付着. 二次焼成あり	23
	87	SH017	土師器 壺	(15.7)			ナデ	褐色	ナデ	○	○			
	88	SH017	土師器 壺	(15.9)			縦ハケ後ナデ. ヨコナデ	黄褐色	縦ハケナデ. 縦ハケ後ナデ.	○	○	○		
	89	SH017	土師器 壺	(15.1)			ヨコナデ. 縦ハケ	黄褐色	斜めハケ後ナデ. 縦・斜めハケ後ヘラケズリ	○	○	○	外面: スス付着	
	90	SH017	土師器 壺	(16.8)			ヨコナデ. 縦ハケ後ナデ	にぶい暗褐色	にぶい暗褐色. 縦ハケ	△	○	△		
	91	SH017	土師器 鉢	(10.9)	10.7		ナデヘラミガキ	黄褐色~灰黄褐色	ヨコナデ. 肩凹線・縦ハケナデ	△	○	○	底部付着に黄泥あり	23
	92	SH017	土師器 長頸壺	12.9	16.2		斜め・縦ハケ後ナデ	暗褐色	ヨコナデ. ナデ. 肩凹線ナデ	○	○	○	外面: 黒泥. 赤泥あり	23
	93	SH017	土師器 長頸壺				ヨコナデ	黄褐色	ナデ	○	○	△		
	94	SH017	土師器 小型丸底壺				縦ヘラミガキ	褐色	縦ヘラミガキ	○	○			
	95	SH017	土師器 鉢				縦ヘラミガキ		ナデ	○	○			
	96	SH017	土師器 鉢	(14.2)			縦・斜めヘラミガキ	暗褐色	縦ヘラミガキ	○	○			
	97	SH017	赤生土器 壺		3.2		ナデ	暗褐色	ナデ	○	○		わずかに平底	
	117	SH008	赤生土器 壺	12.4			ヨコナデ. 縦溝状文. 縦ハケ. 底部付着状突起. 縦溝状文. 斜めハケ. 底部下駄付突起	黄褐色. 黄褐色 黄褐色. 黄褐色	ヨコナデ. ナデ	○	○	○	外面: 赤色顔料塗布	23
	118	SH008	赤生土器 壺				縦溝状文. 斜めハケ. 底部下駄付突起	黄褐色. 黄褐色	肩凹線後ナデ. ナデ	○	○	○		23
	119	SH008	赤生土器 壺				ヨコナデ. 斜めハケ後ナデ	黄褐色. 黄褐色	ヨコナデ. 縦ハケ	○	○	○		
	120	SH008	赤生土器 壺				ヨコナデ. ナデ	暗褐色	ヨコナデ. ナデ. 肩凹線	○	○	○		
	121	SH008	赤生土器 壺		4.5		飯炊工具ナデ	にぶい暗褐色	ナデ	○	○	○		
	122	SH008	赤生土器 壺				ナデ	にぶい暗褐色. 暗褐色	ナデ	○	○	○	内面: スス付着	
	123	SH008	赤生土器 壺				肩凹線ナデ	黄褐色	ナデ	○	△	○		
	142	SH018	土師器 壺	(21.3)			縦溝状文. 底付突起 器. 斜めハケ	黄褐色	肩凹線. 工具によるナデ	△	△	○		24
	143	SH018	土師器 壺	(14.0)			縦溝状文. ナデ方向のハケ目. 底部下駄付突起	黄褐色	斜め・縦ハケ	○	○	△		
	144	SH018	土師器 壺	(17.0)			縦溝状文	黄褐色	ヨコナデ. 一帯縦ハケ	△	△	△		
	145	SH018	土師器 壺				縦・斜めハケ後ナデ. 帯状突起	にぶい黄褐色	斜めハケ後ナデ	○	○	○		24
	146	SH018	土師器 壺	(34.6)			ヨコナデ. 飯炊工具ナデ	黄褐色	ヨコナデ. ナデ	△	△	△		
	147	SH018	土師器 壺	16.4			縦・縦ハケ	にぶい褐色	斜めハケ	△	△	○		24
	148	SH018	土師器 高坪	(22.7)	16.0	(13.8)	縦ヘラミガキ. 器内凹線 褐色シラ	黄褐色~にぶい褐色	斜めハケ後ナデ. ヘラミガキ. 器内凹線ナデ	△	△	△	凹線部 黒泥あり	24
	149	SH018	土師器 高坪				斜めハケ後ナデ. 凹線溝かしら	黄褐色	工具による縦ケズリ	○	○			
	150	SH018	土師器 壺?				斜めハケ後ナデ	褐色	斜めハケ	△	△	△		
	151	SH018	土師器 壺?				工具ナデ. ナデ	黄褐色	縦溝	△	△	△		
	155	SH031	土師器 壺				縦ハケ後ナデ. 底部下駄付突起	黄褐色	縦・斜めハケ後ナデ	△	△	○		
	156	SH031	土師器 壺				斜めハケ. 底付突起突起	黄褐色	縦溝	△	○	○	外面: 黒泥あり	
	157	SH031	土師器 壺	(15.0)			ハケ後ヨコナデ. タテハケ	暗褐色	ハケ後ヨコナデ	○	○	△	外面: スス付着	
	158	SH031	土師器 壺	(16.5)			ナデ	にぶい褐色	ナデ. 縦ハケ後ナデ	○	○	○		
	159	SH031	土師器 壺	(29.2)			ヨコナデ. 飯炊工具による 縦溝状文ナデ	にぶい褐色	ヨコナデ. 縦方向のナデ	○	△	△		
	160	SH031	土師器 壺	(32.4)			飯炊工具によるナデ. ナデ	黄褐色	飯炊工具によるナデ. ナデ	○	○	○	外面: スス付着	
	161	SH031	土師器 壺	(29.2)			不定方向の平縁凸ナデ	にぶい暗褐色. 黄褐色 褐色. 暗褐色. 黒色	不定方向の平縁凸ナデ	○	○	○	内面: スス付着	24
	162	SH031	土師器 壺				斜めハケ後ナデ	褐色	ナデ. 肩凹線			△		
	163	SH031	土師器 高坪				縦ハケ後横ヘラミガキ	黄褐色	平縁: ナデ後横ヘラミガキ. 側面: シシテリ	△	△	△		
	164	SH031	土師器 小型丸底壺	11.0	7.5		ヨコナデ. 斜めハケ. ヘラミガキ	にぶい褐色	縦・斜めハケ. ナデ	△	△	△		24
	165	SH031	土師器 長頸壺	11.8			ヨコナデ. 縦ヘラミガキ	にぶい褐色	ナデ. ヨコナデ	○	○	○		24
	166	SH031	土師器 壺	(13.0)			ナデ縦ヘラミガキ	白褐色	ナデ縦ヘラミガキ	△	△	△		
	167	SH031	土師器 壺	15.4			縦ハケ後ナデ. ミガキ	黄褐色	ヘラミガキ後ナデ	△	△	○		
	168	SH031	土師器 壺	(13.2)	6.1		縦ハケ後ナデ	黄褐色	ナデ	○	○	△	内面付着: 黒泥あり	
	169	SH031	新瓦土器		(4.6)		押さえ. ナデ. タタキ	暗褐色	ナデ	○	△	○		25
	170	SH031	新瓦土器		4.9		押さえ. ナデ	ナデ	ナデ	△	△	○		25
	186	SH011	赤生土器 壺	(18.3)			ヘラ置き. 口縁上面底付 付文. 縦ハケ	にぶい黄褐色	縦ハケ. ナデ	○	○	○		
	187	SH011	赤生土器 壺				ナデ	黄褐色	ナデ	○	△	○		
	188	SH011	赤生土器 壺	(18.0~18.5)			底付文. 縦ハケ後ナデ. 器内凹線突起	黄褐色	ヨコナデ. 押さえ後ナデ	○	○	○	二重口縁部にひずみあり	
	189	SH011	赤生土器 壺	(19.5)			ヨコナデ. ナデ	褐色. 黄褐色	ヨコナデ. ナデ	○	○	○		
	190	SH011	赤生土器 壺	(20.0)			縦ハケ. ナデ	褐色	斜めハケ. ナデ	△	△	△		
	192	IKCN 3区	土師器 壺				ヘラミガキ	にぶい黄褐色	ナデ	△	△	○		
	193	IKCN 3区	土師器 長頸壺				沈積. ナデ	にぶい黄褐色	ナデ	△	△	○	外面: 赤色顔料塗布	

発掘 番号	遺物 番号	遺物名	品類	経路 (m) () 経緯度			形状・文様			出土			備考	写真 撮影 番号	
				口径	器高	底径	外面	内面	形状	方向	土 層				
66	200	SK150	土師質土器 杯	(11.2)	3.0	7.4	回転ナズ、回転糸切り	黄褐色	回転ナズ、網縵	○	○	○	金ウシも多く含む		
	201	SK150	須恵質土器 土師鉢 (28.0)				ヨコナズ		ヨコナズ	△	△	△			
	202	SK087	白磁系土師器 鉢	10.8	2.95	4.8	ヨコナズ、ナズ	黄褐色	ヨコナズ、ナズ			△	△		
68	203	SK087	常滑焼 甕				ナズ		磨研さえ、ナズ、鎌板						
	204	SK087	常滑焼 甕				ヨコナズ	オリーブ褐色	ヨコナズ	○	○	○		25	
	205	SK087	瓦質土器 鉢				ナズ	黄褐色	横ハケ	△	△	△	△		
	207	SK279	中国産青磁 碗 (12.8)				黒釉、蓮弁文	灰緑色	黒釉						
69	208	SK279	瓦質土器 鉢				ナズ		明赤褐色	横・斜めハケ、磨目	△	△	△		
	209	SK279	瓦質土器 土師鉢 (17.6)				ヨコナズ、スタンプ文	黄褐色	ヨコナズ、ナズ	△	△	△	○		
	210	SK279	常滑焼 甕	(12.7)			ヨコナズ、ナズ	赤褐色	ナズ					△	
	211	SK279	常滑焼 甕				ヨコナズ	赤褐色	ヨコナズ					○	25
72	212	SK425	瓦質土器 鉢 (25.0)				ヨコナズ、斜行交差、磨研さえ接ナズ、タタキ	暗褐色、暗褐色、黄褐色	横ハケ一部斜めハケ	○	○	○	外側：スス付着	25	
	213	SK425	常滑焼 甕 (36.4)				ヨコナズ	暗褐色	ヨコナズ					△	
	214	SK423	土師質土器 小皿 (7.0)	1.5	(8.8)		回転ナズ、回転糸切り	灰白色	回転ナズ、ナズ	○	○	○			
76	215	SK013	常滑焼 鉢	(27.5)			ナズ	赤褐色	ナズ	△	△	△			
78	216	SE010	土師質土器 杯 (11.8)	3.3	6.0		回転ナズ、回転糸切り?	灰色	回転ナズ	△	△	○	金ウシも多く含む		
82	218	SD007	常滑焼 甕				平打タタキ	灰色	磨研ハケ、ナズ	△	△				
	219	SD007	常滑焼 甕				ヨコナズ、蓋状文	黄褐色	ヨコナズ	△	△				
	220	SD007	常滑焼 甕				ヨコナズ、蓋状文	暗褐色、灰白色	横ハケ	△	△				
	221	SD007	土師器 杯 13.0				回転ナズ	褐色	回転ナズ	△	△				
	222	SD007	土師器 杯 4.0				回転ナズ、ナズ	にぶい褐色	回転ナズ	△	△				
	223	SD007	土師器 甕				ヨコナズ、斜めハケ	にぶい褐色	斜めハケ、ヨコナズ	△	△				
	224	SD007	土師器 甕				ヨコナズ、斜めハケ	にぶい褐色	横ハケ、ヨコナズ	△	△				
	225	SD007	瓦質土器 鉢				押さえ、ナズ	にぶい褐色		○	○	○			
	226	SD007	土師器 不明			12.4	ナズ、ケズリ、磨研さえ	にぶい褐色	ナズ	△	△				
	227	SD007	青磁 鉢			6.0	黒釉、蓮葉守文	明緑褐色	黒釉						
	228	SB502	土師質土器 杯 (13.8)	3.5	(19.6)		回転ナズ、回転糸切り	黄褐色	回転ナズ、網縵	○	○	○	外側：スス付着 金ウシも多く含む		
	90	231	SB502	土師質土器 杯 (13.0)	3.2	(8.4)		回転ナズ、回転糸切り	暗褐色	回転ナズ				内側：スス付着 金ウシも多く含む	
232		SB502	土師質土器 杯 (12.8)	3.7	8.0		回転ナズ、回転糸切り後 灰状底	褐色	回転ナズ、ナズ	△	△	○	内側：黒釉?		
233		SB502	中国産白磁 鉢 (14.4)				黒釉、口縁部玉縁	白色	黒釉						
234		SB504	土師質土器 杯 (11.1)	3.8	8.4		回転ナズ、回転糸切り後 灰状底	暗褐色	回転ナズ、ナズ	○	○	○	金ウシも多く含む		
235		SB504	土師質土器 杯 12	3.6	8.4		回転ナズ、回転糸切り後 灰状底	暗褐色	回転ナズ、ナズ	○	○	○	金ウシも多く含む	25	
236		SB504	土師質土器 小皿 7.2	1.5	5.8		回転ナズ、一定方向のナズ、 回転糸切り	褐色	回転ナズ、ナズ	○	○	○	金ウシも多く含む	26	
237		SB504	土師質土器 小皿 8.1	1.4	7.5		回転ナズ、回転糸切り	褐色	回転ナズ	○	○	○			
238		SB504	中国産青磁 青磁碗 (4.0)				黒釉、蓮動	明緑灰色	黒釉						
239		SB504	瓦質土器 鉢 (33.7)				ナズ	褐色	横ハケ、ヨコナズ、ナズ	○	○	○		25	
240		SB507	中国産白磁 笠 (10.9)				黒釉	白色	黒釉				△	口先	
91		241	SB040	土師質土器 杯 (15.6)	5.4	11.5		回転ナズ、回転糸切り	褐色	回転ナズ	○	○	○	外側：黒釉あり 金ウシも多く含む	
		242	SB043	土師質土器 杯 11.5	3.2	8.0		回転ナズ、回転糸切り	褐色	回転ナズ	△	△	△		26
	243	SB160	土師質土器 杯 (11.9)	3.4	(8.0)		回転ナズ、回転糸切り	褐色	回転ナズ	△	△	△		口縁部：スス付着	
	244	SB089	土師質土器 杯 (12.2)	2.9	(7.8)		回転ナズ、回転糸切り後 灰状底	黄褐色	回転ナズ、磨ナズ					○	金ウシも多く含む
	245	SB108	土師質土器 杯 (13.2)	3.4	(7.8)		回転ナズ、回転糸切り	暗灰色	回転ナズ、磨ナズ					△	
	246	SB184	瓦質土器 小皿 7.4	1.5~1.1	6.0		回転ナズ、回転糸切り	赤褐色	回転ナズ	△	△			○	口縁部：スス付着 金ウシも多く含む
	247	SB162	土師質土器 小皿 7.6	1.9~1.7	6.4		回転ナズ、回転糸切り	明赤褐色	回転ナズ、一定方向ナズ	△	△			○	口縁部：スス付着 金ウシも多く含む
	248	SB108	土師質土器 小皿 9.0	1.65	7.0		回転ナズ、回転糸切り	黄褐色	回転ナズ、磨ナズ	△	△	○		○	内側：黒釉 金ウシも多く含む
	249	SB271	土師質土器 小皿 (8.8)	1.8~2.0	(6.7)		明褐色	明褐色	磨研さえナズ	△	△			△	金ウシも多く含む
	250	SB086	土師質土器 小皿 7.9	2.2	5.6		回転ナズ、回転糸切り後 灰状底	黄褐色	回転ナズ、ナズ	△	△	○		○	外側：黒釉あり 金ウシを含む
	251	SB553	瓦質土器 鉢 (25.2)				ナズ、斜行交差	灰色	ヨコ方向のナズ	△	△	○		○	内側：スス付着?
	252	SB370	瓦質土器 鉢 (30.4)				磨研さえ後縁方向のナズ	黄褐色	ヨコハケ、ナズ	△	△	○		△	26
253	SB321	中国産青白磁 合子蓋 1.9	8.5			黒釉	白っぽいみず色	黒釉				△	文様：鳳凰の体	26	
254	SB180	中国産青白磁 合子蓋 (6.8)				黒釉	白っぽいみず色	黒釉				△			
255	SB335	中国産青白磁 合子蓋				黒釉	白っぽいみず色	黒釉							
256	SB269	中国産白磁 鉢 (13.2)				黒釉	白色	黒釉							
257	SB148	中国産青磁 鉢 (15.4)				黒釉	白色	黒釉							
258	SB125	中国産青磁 鉢			6.0	黒釉	白色	黒釉							

遺物一覧表4 (古市下遺跡)

探検 番号	遺物 番号	遺物名	品類	法量 (cm) () 法重量 (g)			調査・文様		備考	写真 記録 番号			
				口径	高さ	底径	外 面	内 面					
91	259	S160											
	260	S441	瓶				黄白色	施釉					
	265	白青銅	土師質土器	杯	(長さ)18×4	(幅)1.1	(高さ)12.4	ナブ	黄褐色色、暗褐色				
	266	1区遺物出土部	土師質土器	杯			8.9	回転ナブ、回転み切り	黄褐色色、暗褐色	回転ナブ、ナブ	○ ○ ○	金ウレモ少し含む	
	267	1区白青銅	土師質	瓶				回転ナブ、回転み切り	黄褐色色、暗褐色	回転ナブ、ナブ	△ △ △	金ウレモ少し含む	
	268	1区表土	中国産白磁	皿	(9.3)			施釉	乳白色	施釉、磨粉		口先	
	269	1区白青銅	中国産青磁					施釉、施蓮中文	黄緑灰色	施釉			
	270	表土	中国産青磁	瓶				施釉、施蓮中文	黄緑灰色	施釉			
94	271	1区B3区	中国産青磁	合子蓋				施釉	黄緑灰色	施釉		△	
	272	1区表土	瓦質土器	こね鉢	(26.0)				灰色	ココナブ、磨研さえ縄一 段跡のハケ			片口
	273	1区表土	土師	(長さ)123×4	(幅)0.8	(高さ)1.6		ナブ	黄褐色色、暗褐色		△ △ △		
	274	2区表土	土師質土器	杯	11.3	3.3	7.6	回転ナブ、回転み切り	黄褐色色	回転ナブ、多方向のナブ	○	金ウレモ多く含む	
	275	2区表土	土師質土器	杯	(11.7)	(3.5)	(8.1)	回転ナブ、回転み切り	にぶい赤褐色	回転ナブ、ナブ	○	金ウレモ多く含む	
	276	2区赤磁	瓦質土器	瓶				ココナブ、磨研さえ縄 ハケ	黄褐色	横ハケ	○		
	277	2区表土	土師質	甕	(22.0)			ココナブ	にぶい褐色	ココナブ	○		
	278	2区赤磁	土師	(長さ)5.2	(幅)1.7	(高さ)1.6		ナブ	黄褐色		△		
95	279	2区	青磁	瓶?				施釉	黄褐色	施釉			
	280	2区N2区	土師質	杯			7.5	回転ナブ、ヘラきり	回転ココ	回転ナブ	△	○	
	281	S053	土師質土器	小皿	(7.4)	1.3	(4.2)	回転ナブ、回転み切り	黄褐色色	回転ナブ	△ ○ ○	底唇：黒黒あり	
	282	2区M2・3区	中国産白磁		(15.7)			施釉	白色	施釉		玉縁口縁	
	283	S005	青磁	甕				自然釉、ココナブ	自然釉、ココナブ			26	
	284	S016	瓦質土器	罐鉢				ナブ	灰色	横ハケ、磨目	○ ○ ○	磨目6本	
	285	S016	青磁	罐鉢	(31.0)			ナブ	赤褐色	ナブ、磨目	△ ○ ○	磨目8本	
	286	S031	土師	(長さ)5.1	(幅)1.1	(高さ)1.2		ナブ				孔径：0.5cm	

古市下遺跡遺物一覧表 (土器片加工品)

探検 番号	遺物 番号	遺物名	法量 (cm) () 法重量 (g)			調査・文様		備考	写真 記録 番号
			長さ (cm)	幅 (cm)	重量 (g)	外 面	内 面		
21	18	SH001	4.9	4.7	28.0	ナブ	ナブ		
	52	SH003	3.9	3.1	12.6	ナブ	ナブ		21
	53	SH003	3.4	2.6	10.2	ハケ	ナブ		21
	54	SH003	6.1	4.2	36.3	ナブ	ナブ	損部	21
	55	SH003	7.0	4.1	33.2	ハケ	ナブ		21
	56	SH003	5.4	4.6	37.6	ナブ	ナブ		21
	57	SH003	2.8	2.3	4.7	ハケ	ナブ		21
	58	SH003	4.4	3.0	18.3	ナブ	ナブ		21
	66	SH002	4.4	3.0	19.4	ナブ	ナブ		22
	67	SH002	5.3	3.7	25.3	ナブ	和彫		22
	68	SH002	5.3	4.1	31.3	工真ナブ	ナブ		22
	69	SH002	4.3	3.2	14.4	ナブ	ナブ		22
	70	SH002	5.5	3.5	23.6	ナブ	ナブ		22
	77	SH015	5.7	3.9	30.1	ナブ	ナブ		
	78	SH015	3.9	2.6	13.7	工真ナブ	ナブ	損部	
32	98	SH017	3.4	2.9	9.7	ハケ	ナブ		23
	99	SH017	3.0	2.3	7.2	ハケ、磨状染布	ナブ		23
	100	SH017	3.3	2.7	7.5	ナブ	ハケ		23
	101	SH017	3.5	2.8	11.2	ナブ	ナブ		23
	102	SH017	4.9	3.0	16.7	ナブ、三角染布	ココナブ		23
	103	SH017	3.7	2.9	14.1	ハケ、磨状染布	ナブ		23
	104	SH017	4.6	3.5	19.7	ナブ	ナブ		23
	105	SH017	3.7	2.7	9.1	ハケ	ナブ		23
	106	SH017	4.2	3.2	15.1	ナブ、染布	ナブ		23
	107	SH017	3.9	2.7	10.8	ハケ	ナブ		23
	108	SH017	4.0	3.1	12.0	ナブ	ナブ		23
	109	SH017	5.2	3.5	22.1	ハケ	ナブ		23
	110	SH017	5.2	4.2	30.3	ナブ	ナブ、ケズリ		23
	111	SH017	5.0	2.9	9.7	ナブ	ナブ		23
	112	SH017	5.3	3.9	23.8	ヘラナブ、磨状染布	ナブ		23
113	SH017	5.6	3.7	20.0	ナブ、磨状染布	ナブ		23	
114	SH017	6.8	4.4	39.1	ハケ、磨状染布	ナブ		23	
115	SH017	5.1	4.6	29.3	ナブ	ナブ、ケズリ		23	
41	116	SH019	4.6	3.5	19.7	ナブ	ナブ		23
	124	SH008	5.1	3.7	21.1	ナブ	ハケ		24
	125	SH008	4.3	3.2	15.2	ナブ	ナブ		24

探跡 番号	遺物 番号	遺物名	形質 () 寸法			調査・文様			備考	写真記録 番号
			長さ (cm)	幅 (cm)	重量 (g)	外 面	内 面			
44	126	SH008	4.9	2.3	12.7	ナデ	ナデ		24	
	127	SH008	5.4	4.1	20.7	ナデ	ナデ		24	
	128	SH008	4.1	3.0	13.1	ナデ	ナデ		24	
	129	SH008	5.7	3.3	25.6	ハケ	ナデ		24	
	130	SH008	4.3	3.9	22.0	ハケ	ナデ		24	
	131	SH008	5.6	3.6	25.3	ナデ	ナデ		24	
	132	SH008	5.2	5.8	31.4	ナデ	ナデ		24	
	133	SH008	4.0	4.6	22.4	ヨコナデ	ナデ		24	
	134	SH008	4.9	4.4	25.4	ナデ	ナデ		24	
	135	SH008	5.3	4.9	26.6	ハケ	ナデ		24	
	136	SH008	5.3	4.4	33.5	ナデ	ナデ		24	
	137	SH008	5.3	4.0	25.7	ナデ	ナデ		24	
	138	SH008	6.8	7.5	74.6	ナデ	ナデ		24	
	139	SH008	9.0	4.2	32.1	ナデ	ナデ		24	
	152	SH018	5.8	3.4	13.0	工具ナデ	ナデ			
	153	SH018	4.0	4.2	25.1	ナデ	ナデ			
	154	SH018	3.2	2.8	9.7	ナデ	ナデ			
	50	171	SH031	3.7	2.3	8.6	ナデ	ナデ		25
		172	SH031	3.5	2.5	9.6	ナデ、三角突部	ナデ		25
173		SH031	3.9	2.8	11.6	ハケ	ハケ		25	
174		SH031	2.9	3.6	9.0	ナデ、帯状突起	ナデ		25	
175		SH031	4.6	3.2	13.9	ハケ	ハケ		25	
176		SH031	5.6	3.6	23.4	ハケ	ナデ		25	
177		SH031	5.0	3.5	17.1	ハケ	ナデ		25	
178		SH031	5.3	4.0	24.4	ハケ	ハケ		25	
179		SH031	5.4	3.8	31.1	ナデ	ナデ		25	
180		SH031	6.3	3.8	21.8	ナデ	ナデ		25	
181		SH031	3.7	7.1	38.9	ナデ	ナデ		25	
182		SH031	5.9	4.4	42.5	ナデ	ナデ		25	
183		SH031	7.1	4.5	48.8	工具ナデ	ハケ		25	
184		SH031	11.4	6.1	112.9	ナデ	ナデ		25	
196		S032	3.4	2.5	10.0	ナデ	ナデ			
197		D区	4.2	2.9	9.2	ナデ	ハケ			
198		S032	5.2	3.6	20.3	磨鏡文	ナデ			
199		D区	5.7	5.2	31.0	ハケ	不明			

古市下遺跡遺物観察表 (石器)

探跡 番号	遺物 番号	遺物名	器 種	石 材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備 考	写真記録 番号
12	30	S079	石鏃	珩+	3.6	1.6	0.9	5.0	トロト石鏃	19
	31	D区	石鏃	鹿島地層燧石	1.9	1.6	0.40	0.9		19
	32	D区	石鏃	鹿島地層燧石	2.0	1.2	1.1	1.5		
15	40	SH350	磨石・磨石	安山岩?	11.7	10.0+α	9.2	1600.0		
	41	SH350	磨石	安山岩?	4.0+α	9.8	7.3	320.0		
	42	SH350	磨石	安山岩?	10.1+α	4.3+α	6.5+α	540.0		
	43	SH350	磨石	安山岩?	14.0+α	9.4+α	8.1	810.0		
	45	SH008	磨製石鏃		3.5	1.2	0.2	0.7		
46	141	SH008	石鏃	安山岩	20.6	23.5	12.0	7900.0		24
54	185	SH031	石鏃	安山岩	22.1	23.0	15.0	8750.0		25
59	194	D区	石鏃		8.0+α	5.0	2.55	182.0	磨鏡	
68	195	S079	磨石・磨石	安山岩?	6.1	5.9	2.6	150.0		
68	206	SK007	磨石・磨石	安山岩?	7.6	7.6	5.0	500.0		
228	SD007	磨石	安山岩		8.6	6.6	4.5	313.0		
68	229	SD007	台石	安山岩	12.6+α	13.5+α	9.5+α	1550.0		

古市下遺跡遺物観察表 (鉄器)

探跡 番号	遺物 番号	遺物名	器 種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備 考	写真記録 番号	
19	50	SH001	鉄製刀子		(3.4+α)	1.3	0.2	5.8		
	51	SH001	鉄製鎌?		(3.9+α)	2.6	0.2	9.3		
23	63	SH003	鉄鏃		(5.1+α)	1.8	0.4	12.0		
	64	SH003	鉄製鎌?		(3.4+α)	2.3	0.31	9.6		
36	80	SH016	鉄鏃?		(2.8+α)	0.7	0.65	4.5		
81	217	SD007	鉤形押		9.3	10.1	4.1	380		

古市下遺跡遺物一覽表 (銭貨)

探跡 番号	遺物 番号	遺物名	銭 貨 名	国・王様名	初 年	重さ (g)	直径 (cm)	備 考	備 考
92	261	S280	元龜通寶	北宋	1078	6.6	—	遺失	
92	262	S280	〇〇通寶	不明	不明	0.6	—	—	
93	263	D区	聖學元寶	北宋	1068	2.1	2.5	遺失	
93	264	D区	淳祐元寶	南宋	1241	1.2	—	—	背文?

遺物一覧表6 (古市上遺跡)

古市上遺跡遺物一覧表 (土器)

探検番号	遺物番号	遺物名	器種	経路 (m) () 経度			調査・文種		土質	備考	写真記録番号	
				口径	高さ	底径	外 形	内 面				
113	1	SH005	弥生土器 壺				不定方向のナデ	ヨコナデ	○	○	○	37
	2	SH005	弥生土器 壺				ヨコナデ	ナデ	○	○	○	37
	3	SH005	弥生土器 壺	(12.8)			ヨコナデ後ナデ、磨縁段状文	横ハケ後ナデ	○	○	○	37
	4	SH005	弥生土器 壺				不定方向のナデ	磨縁のため不明	○	○	○	37
	5	SH005	弥生土器 壺				不定方向のナデ、磨縁点線文	磨縁のため不明	○	○	○	
	6	SH005	弥生土器 壺				磨縁段状文	ナデ	○	○	○	
	7	SH005	弥生土器 壺				磨縁段状文	ナデ	○	○	○	
	8	SH005	弥生土器 壺		4.9		不定方向のハケ	ナデ	○	○	○	37
	9	SH005	弥生土器 壺				タテハケ後ナデ	タテハケ	○	○	○	
	10	SH005	弥生土器 壺		4.2		ナデ	磨縁のため不明	○	○	○	内面：スス付着
	11	SH005	弥生土器 壺		(21.6)		ナデ	ナデ	○	○	○	内面：スス付着
	12	SH005	弥生土器 壺				ヨコナデ	ヨコナデ、磨り	○	○	○	
	13	SH005	弥生土器 壺				ヨコナデ	ナデ	○	○	○	
	14	SH005	弥生土器 鉢		(0.0)		タテハケ、ヨコナデ	ナデ	○	○	○	37
	15	SH005	弥生土器 鉢				ヨコナデ、タテハケ	ナデ	○	○	○	
	16	SH005	弥生土器 鉢				タテハケ	ナデ	○	○	○	
	17	SH005	弥生土器 壺				ヨコナデ	ナデ	○	○	○	
116	30	SH027	弥生土器 壺				ヨコナデ	ヨコナデ	△	△	△	
	31	SH027	弥生土器 壺				ヨコナデ	ヨコナデ	△	△	△	
	32	SH027	弥生土器 壺				ヨコナデ	ヨコナデ	△	△	△	
	33	SH027	弥生土器 壺				ナデ	磨縁のため不明	○	○	○	
	34	SH027	弥生土器 壺				ナデ	磨縁のため不明	○	○	○	
	35	SH027	弥生土器 壺				ナデ、不定方向のハケ	ナデ	○	○	○	37
	42	SH047	弥生土器 壺	(20.6)	25.4	5.0	ハケ	ヨコナデ、ハケ	○	○	○	内面：スス付着
	43	ST006	弥生土器 壺				ヨコナデ	斜め方向のナデ	○	○	○	
	44	ST018	弥生土器 壺				ヨコハケ	ヨコハケ	○	○	○	
131	45	ST028	弥生土器 壺				ヨコナデ	ヨコナデ	△	△	△	
	46	ST035	弥生土器 壺				ヨコナデ	ヨコナデ	△	△	△	
	47	ST035	弥生土器 壺				ハケ	ハケ	△	△	△	
	48	ST035	弥生土器 壺				ヨコナデ	ヨコナデ	△	△	△	
	49	ST035	弥生土器 壺				ナデ	ナデ	△	△	△	
	50	ST036	弥生土器 壺				ヨコナデ	ヨコナデ	△	△	△	
	51	ST036	弥生土器 壺				ヨコナデ	ヨコナデ	△	△	△	
	52	ST036	弥生土器 壺				ヨコナデ	ヨコナデ	△	△	△	
	53	ST036	弥生土器 壺				ヨコナデ	ヨコナデ	△	△	△	
	54	ST044 a	弥生土器 壺	(18.6)			ヨコナデ、磨縁段状文	ヨコナデ	○	○	○	38
	57	SK058	土器 壺	13.4			ヨコナデ、不定方向のナデ	ヨコナデ	○	○	○	38
135	59	SD043	土器 壺				磨縁段状文	ナデ	△	△	△	
	60	SD043	土器 壺				ヨコナデ、ハケ、磨縁段状文	ヨコナデ	○	○	○	
	61	SD043	土器 壺				斜め方向のハケ	ナデ	○	○	○	
	62	SD043	土器 壺				斜め方向のハケ	ナデ	○	○	○	
	63	SD043	土器 壺				斜め方向のハケ	ナデ	○	○	○	
	64	SD043	土器 壺				斜め方向のハケ	ナデ	○	○	○	
	65	SD043	土器 壺				斜め方向のハケ	ナデ	○	○	○	
	66	SD043	土器 壺				斜め方向のハケ	ナデ	○	○	○	
	67	SD043	弥生土器 壺				ナデ	ナデ	○	○	○	
	68	SD043	弥生土器 壺				斜め方向のハケ	ナデ	○	○	○	
	69	SD043	土器 壺				ヨコナデ	ヨコナデ	△	△	△	
	70	SD043	土器 壺				ヨコナデ	ヨコナデ	○	○	○	
	71	SD043	土器 壺				ナデ	ヨコナデ	○	○	○	
	72	SD043	土器 壺				ナデ	ヨコナデ	○	○	○	
	73	SD043	弥生土器 壺				ヨコナデ後ハケ	ヨコナデ	○	○	○	
	74	SD043	弥生土器 壺				ヨコナデ	ヨコナデ	△	△	△	
	75	SD043	弥生土器 壺				ナデ	ナデ	△	△	△	
	76	SD043	弥生土器 壺				ナデ	ナデ	○	○	○	
136	88	SD045	土器 壺				ヨコナデ	ナデ	△	△	△	
	89	SD045	弥生土器 壺				ヨコナデ	ナデ	△	△	△	
	90	SD045	弥生土器 壺				ヨコナデ	ナデ	△	△	△	
	94	SD046	土器 壺				ヨコナデ、磨縁段状文	ナデ	△	△	△	
	95	SD046	土器 壺	(9.0)			ヘラミダキ	ヘラミダキ	△	△	△	
	96	SD046	土器 壺				ハケ	ハケ	○	○	○	
	97	SD046	土器 壺				タテハケ	ナデ	△	△	△	
	98	SD046	弥生土器 壺				ナデ	ナデ	○	△	△	
	99	SD046	弥生土器 壺				ナデ	ナデ	○	△	△	
	100	SD046	土器 壺	(27.8)			ヨコナデ	ヨコナデ	△	△	△	
137	101	SD046	土器 壺				ヨコナデ	ヨコナデ	○	○	○	
	102	SD046	土器 壺				ヨコナデ	ヨコナデ	○	△	△	
	103	SD046	土器 壺				ヨコナデ	ハケ	△	△	△	
	104	SD046	土器 壺				ヘラミダキ	ハケ、ヨコナデ	△	△	△	
	105	SD046	土器 壺				ヨコナデ	磨縁段	○	○	△	内面：スス付着
	106	SD046	弥生土器 壺				ナデ	ナデ	△	△	△	内面：スス付着
	107	SD046	土器 壺				ヨコナデ	ヨコナデ	△	△	△	

探検番号	遺物番号	遺物名	器種	径線 (cm) () 径線			調整・文様		胎土			備考	写真記録番号	
				口径	器高	底径	外 面	内 面	赤 色	灰 色	土 色			
	113	遺構外	弥生土器	壺				ハケ、磨縁皮状文	ヨコナデ	△	△	△		
	114	遺構外	弥生土器	壺				ハケ、磨縁皮状文	ナデ	△	△	△		
	115	遺構外	土器	壺				ハケ	ナデ	△	△	△		
	116	遺構外	土器	壺				ハケ	ナデ	△	△	△		
	117	遺構外	弥生土器	甕 (口注)				ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ削り、ハケ	○	○	○	外底：ス入付着	
	118	遺構外	弥生土器	壺				ナデ	ナデ	△	△	△		
	119	遺構外	弥生土器	高坏				ハケ	ナデ	△	△	△		
	120	遺構外	弥生土器	壺		5.1		ナデ	ナデ	△	△	△	内底：ス入付着	
	124	SH005	縄文土器	浅鉢				ミゴキ、西点文	ミゴキ	○	○	○		
	125	SH005	縄文土器	浅鉢				ミゴキ、磨縁縄文	ミゴキ	○	○	○		
	126	SH005	縄文土器	浅鉢				縄文	ナデ	○	○	○		
	127	SH005	縄文土器	浅鉢				ナデ	ナデ	○	○	○		
	128	SH005	縄文土器	浅鉢				ミゴキ	ミゴキ	○	○	○		
	129	SH007	縄文土器	浅鉢				ミゴキ	ミゴキ	○	○	○		

古市上遺跡遺物一覽表 (土器片加工品)

探検番号	遺物番号	遺物名	径線 (cm) () 径線			調整・文様		胎土			備考	写真記録番号
			口径	器高	底径	外 面	内 面	赤 色	灰 色	土 色		
	116	36 SH027	3.5	3.1	9.4	ナデ	ナデ	△	△	△		
	77	SD043	3.7	2.4	8.8	ナデ	ナデ	△	△	△		
	78	SD043	3.7	3.0	14.7	ナデ	ナデ	△	△	△		
	79	SD043	4.1	3.05	21.5	ナデ	ナデ	○	△	○		
	80	SD043	4.4	3.9	31.5	ナデ	ナデ	△	△	△		
	81	SD043	5.2	3.7	14.0	ナデ	ナデ	△	△	△		
	82	SD043	5.9	4.0	47.0	ナデ	ナデ	○	○	○		
	83	SD043	5.5	3.3	11.5	ハケ	ナデ	△	△	△		
	84	SD043	5.8	3.9	28.4	ナデ	ナデ	△	△	△		
	85	SD043	5.45	4.6	28.1	ハケ	ナデ	△	△	△		
	86	SD043	5.8	4.7	22.5	ナデ	ナデ	△	△	△		
	91	SD045	5.2	4.2	25.3	ナデ	ナデ	△	△	△		
	92	SD045	5.5	4.2	29.1	ナデ	ナデ	△	△	△		
	93	SD045	5.5	5.3	34.0	ナデ	ナデ	○	○	△		
	108	SD046	4.0	1.85	7.2	ナデ	ナデ	△	△	△		
	109	SD046	4.6	3.05	15.3	ナデ、磨縁皮状文	ナデ	△	△	△		
	137	110 SD046	5.4	4.05	29.2	ナデ	ナデ	△	△	△		
	111	SD046	6.1	4.8	41.2	ナデ	ナデ	△	△	△		
	112	SD046	6.3	6.2	55.9	ナデ	ナデ	△	△	△		
	131	遺構外	6.3	6.4	18.5	ナデ	ナデ	○	△	△		
	132	遺構外	6.5	4.5	25.7	ナデ	ナデ	△	△	△		
	123	遺構外	6.7	4.6	20.2	ナデ	ナデ	△	△	△		

古市上遺跡遺物一覽表 (石器)

探検番号	遺物番号	遺物名	器種	石 材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考	写真記録番号
	18	SH005	磨製石鏃	浅緑岩	2.9	1.1	0.2	1.2		37
	19	SH005	磨製石鏃未製品	浅緑岩	2.6	1.2	0.2	0.6		37
	20	SH005	磨製石鏃未製品	浅緑岩	3.7	1.6	0.4	2.2		37
	21	SH005	磨製石鏃未製品	浅緑岩	2.9	1.7	0.3	2.3		37
	22	SH005	磨製石鏃未製品	浅緑岩	3.4	1.7	0.4	2.8		37
	23	SH005	磨製石鏃未製品	浅緑岩	3.2	1.6	0.5	3.3		37
	24	SH005	磨製石鏃未製品	浅緑岩	3.9	2.0	0.5	4.6		37
	24	SH005	磨製石鏃未製品	浅緑岩	4.5	2.0	0.4	3.6		37
	25	SH005	磨製石鏃未製品	浅緑岩	4.2	1.8	0.4	3.9		37
	27	SH005	磨製石鏃未製品	浅緑岩	6.6	2.6	0.6	12.5		37
	114	28 SH005	網子	和島産黒曜石	4.6	2.5	0.8	6.9	使用痕跡心割付?	
	29	SH005	扁平打製石鏃	安山岩	9.5	7.3	2.8	224.4		
	37	SH027	石鏃	和島産黒曜石	3.1	3.2	0.4	1.7		37
	116	38 SH027	磨製石鏃	浅緑岩	5.7	1.7	0.4	5.5		37
	39	SH027	磨製石鏃	浅緑岩	6.2	2.1	0.4	7.0		37
	119	41 SH047	磨製石鏃	浅緑岩	2.3	1.0	0.15	0.4		37
	131	56 ST001	扁平打製石鏃	安山岩	10.2	6.3	1.4	116.8		38
	133	58 SK058	扁平打製石鏃	安山岩	8.1	6.5	2.4	152.7		38
	135	87 SD043	磨製石鏃		3.1	1.2	0.3	1.6		
	130	遺構外	石鏃	浅緑岩?	1.4	1.1	0.2	0.2		38
	131	遺構外	石鏃	和島産黒曜石	3.0	1.7	0.6	2.0		38
	132	遺構外	磨製石鏃	緑閃石??	2.1	1.2	2.5	1.1		38
	133	遺構外	浅形石鏃?	チャート	2.0	2.0	0.6	2.6		38
	134	遺構外	打製石鏃	安山岩	8.1	5.0	1.3	64.3		38

写 真 图 版



古市下遺跡Ⅱ区全景(南から)



古市下遺跡Ⅰ区全景(北西から)



古市下遺跡Ⅱ区全景(北東から)



古市下遺跡遠景(北西から)



古市下遺跡遠景(西から)



縄文時代遺物集中箇所(南から)



縄文時代遺物集中箇所(西から)



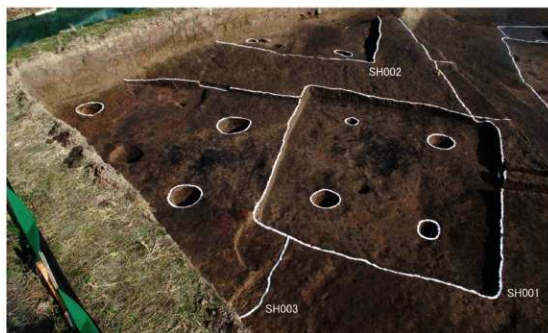
SH350完掘状況
(東から)



SH350遺物出土状況
(東から)



SH350遺物出土状況



SH001、SH002、SH003完掘状況(西から)



SH001完掘状況
(西から)



SH001裸出土状況
(西から)



SH003完掘状況
(東から)



SH003遺物出土状況
(東から)



SH003遺物出土状況
(西から)



SH002完掘状況
(東から)



SH002焼土・炭出土状況
(南から)



SH002遺物出土状況



SH005完掘状況
(南から)



SH005完掘状況
(西から)



SH015がSD007に
切られる



SH015検出状況
(東南から)



SH015完掘状況
(東から)



SH016(手前)とSH015



SH017とSH019完掘状況
(南から)



SH017完掘状況
(西から)



SH017遺物出土状況



SH008完掘状況
(南から)



SH008遺物出土状況
(南から)



SH008遺物出土状況



SH018完掘状況
(南から)



SH018遺物出土状況
(南から)



SH018遺物出土状況



SH031完掘状況
(南から)



SH011完掘状況
(南西から)



SH025完掘状況
(北から)



SK009完掘状況
(西から)



SK013完掘状況
(東から)



SK087遺物出土状況



SE10



SD007(南から)



SD007土層写真(南から)



掘立柱建物跡礎盤石



掘立柱建物跡礎盤石



中世土師質土器出土
状況



中世土師質土器
出土状況



中世土師質土器
出土状況



青白磁合子
出土状況

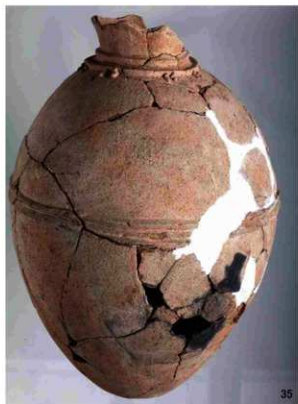
遺物集中箇所



その他の縄文時代遺物



SH350



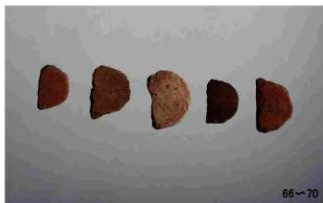
SH001



SH003



SH002



SH005



SH015



SH016



SH017

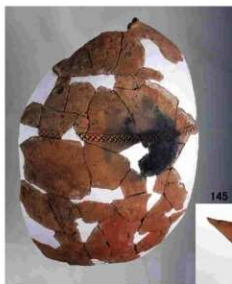


SH008



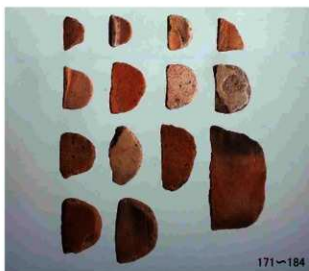


SH018



SH031





SK087



SK279



SK425



SB504

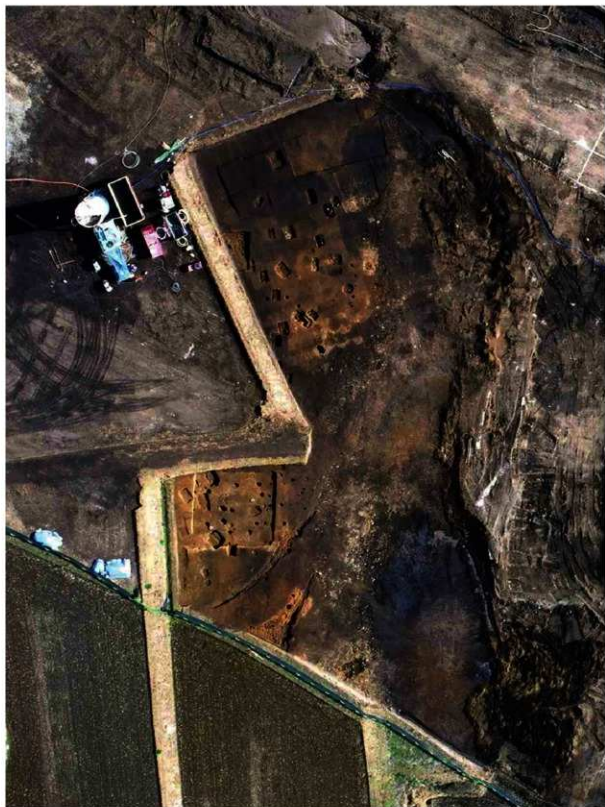


SB504



その他の中世遺物





古市上遺跡全景



SH005



SH027



SH040



SH047



ST001



ST006



ST014



ST015



ST017



ST018



ST023



ST016



ST020



ST020完掘状況



ST022



ST025



ST026



ST031



ST028



ST033



ST035



ST036



ST041



ST042



ST044



ST044赤色顔料・遺物出土状況



ST048



ST049



ST050



ST055



ST056



ST059



SD043



SD045・SD046



SD046標出土状況



SD045・SD046土層



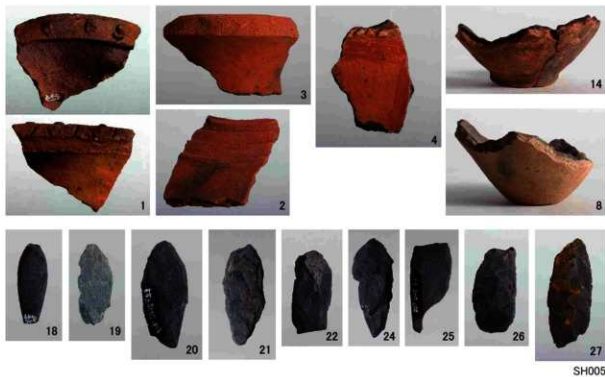
SK058全景(南から)



SK058全景(南から)



SK058遺物出土状況



SH005



SH027

SH047

古市上遺跡出土遺物①(竪穴建物跡)



54

ST044



124

SH005(混入品)



57

SK058



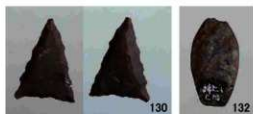
56

ST001



58

SK058



130

132



131



134

遺構に伴わない遺物

古市上遺跡出土遺物②(墓・土坑・その他)

報告書抄録

ふりがな	ふるいちしもしいせき・ふるいちかみいせき							
書名	古市下遺跡・古市上遺跡							
副書名	一般国道57号大野竹田道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告書							
巻次	(2)							
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第74集							
編著者名	後藤一重 吉田寛							
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター							
所在地	〒870-1113 大分市大字中判田1977 TEL 097-597-5675							
発行年月日	2016年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ふるいちしもしいせき 古市下遺跡	おおいのたけふんぼんごおののし あさじまちおおあさひちまんだ あさふんぼん 大分県豊後大野市 朝地町大字市万田 字古市	212	705	33° 0' 50"	131° 27' 45"	100106～ 100215	2,332	道路建設
ふるいちかみいせき 古市上遺跡	おおいのたけふんぼんごおののし あさじまちおおあさひちまんだ あさふんぼん 大分県豊後大野市 朝地町大字市万田 字古市	212	705	33° 0' 50"	131° 27' 45"	100112～ 100204	1,462	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
古市下遺跡	集落	縄文・ 弥生～古墳・ 古代・中世	竪穴建物跡・土坑・溝・ 掘立柱建物跡・井戸		土器・石器・鉄器・銭貨		市万田川流域における弥生時代後期～古墳時代前期の拠点集落及び中世の館跡。	
古市上遺跡	集落・墓	弥生～古墳	竪穴建物跡・墓・溝		土器・石器		大野川流域の弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落では、調査事例の少ない墓地を確認。	
要約	<p>古市下遺跡では、縄文時代、弥生時代後期～古墳時代前期、古代、中世の遺構・遺物を調査した。</p> <p>縄文時代は包含層から後期石町式の遺物集中箇所が検出された。一括性が高く、竪穴建物跡等の残影と思われる。弥生時代後期～古墳時代前期にかけては16基の竪穴建物跡を確認した。古市上遺跡と合わせ市万田川流域における当該期の拠点集落と考えられる。古代については土坑が1基確認されたのみで、遺跡の中心は調査区西側に展開すると想定される。中世は溝に区画された館跡を確認した。丘陵裾部に展開する変則的状況であるが、掘立柱建物跡の規模や出土遺物から一万田氏を支える有力層の館跡と考えられる。</p> <p>古市上遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴建物跡3基・土坑墓(木棺墓)29基・溝3基ほかを調査した。竪穴建物跡は弥生時代後期前葉から中葉、土坑墓(木棺墓)は弥生時代後期後葉から古墳時代前期に比定され、この地点では弥生時代後期後葉を境に、遺跡の空間利用が集落から墓地へと変遷することが確認された。</p> <p>古市下遺跡と古市上遺跡は、弥生時代後期後葉から古墳時代前期の集落と墓地であり、両者がセットで確認された調査事例として貴重な成果を収めることができた。</p>							

古市下遺跡・古市上遺跡

一般国道57号大野竹田道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第74集

平成26年3月31日

発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870-1113 大分県大分市大字中判田字ビワノ門1977
TEL 097-597-5675

印刷所 尾花印刷株式会社
〒877-0026 大分県日田市田島本町8-8
TEL (0973) 23-0123
